九月八日　上野長樂寺南叟、寂ス。

〔禪刹住持籍〕（山城）（曆應四年四月十五日條ニ收ム）

十一月十一日　北畠親房ノ據レル常陸關城及ビ大寶城、陷ル。〔結城文書〕

十二月二日　備前ノ兒島高德、新田脇屋義治ヲ擁シテ義兵ヲ擧ゲントシ、丹波ノ荻野朝忠ト通ズ。因テ、朝忠、兵ヲ高山寺城ニ擧グ。是日、足利幕府、山名時氏ヲ丹波守護ト爲シ朝忠ヲ擊タシム。尋デ、時氏、朝忠ヲ攻メテ、之ヲ降ス。

〔祇園執行日記〕一　（六、七、八一四、）

十一月廿四日、今朝小雪風天晴、四郎三郎、宮仕孫法師下丹波、荻野源太成御敵之間、當國動亂之間、爲所當催促也、

十二月二日、天晴大風、丹波守護職事、荻野彥六（朝忠、丹波守護代タリ）企隱謀之間、仁木殿（頼章）上表、仍山名豆州（時氏）被補云々、仍爲打手近日可被下向云々、

八日天不晴、行安保許、丹波打手大將山名豆州、近日被下向於社領波々伯部保、軍勢等不可致狼藉之由、制札可□□由申處今日令對面可申試云々、

十日晴、行安保許、小林左（丹波守護代）京亮許ヘノ狀取之、

荻野源太敵ト成ル

山名豆州下向

行小林許、昨日丹州下向延引、明旦可被□

十一日晴小雪、丹波新守護代小林左京亮許ヘ行之處、今朝已□丹州、山名豆州同被立了云々、今日先桂マテ下□節自丹波上洛、

〔前田家所藏文書〕（古蹟文徵三）（六、七、八一五、）

俣野中務丞家高令發向丹波國高山寺城（水上郡）自最初屬當手、致忠候、訴訟事急速可有御沙汰候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

康永三年三月廿七日　　前伊豆守（山名）時氏（花押）

進上　御奉行所

高山寺城ヲ攻ム

〔參考太平記〕（卷第十四）　三宅荻野（附壬生地藏事）

其比備前國住人三宅三郎高德ハ、（乃兒島三郎也、既註レ前、）新田刑部卿義助ニ屬シテ、伊豫國ヘ越タリケルカ、義助死去ノ後、備前國ヘ立歸リ、兒島ニ隱レ居テ、猶モ本意ヲ達セン爲ニ、上野國ニオハシケル新田左衞門佐義治ヲ呼奉リ、是ヲ大將ニテ、旗ヲ擧ントソ企ケル、此比又丹波國住人、荻野彥六朝忠、將軍ヲ恨奉ル事有ト聞ヘケレハ、高德潛ニ使者ヲ通シテ觸送ルニ、朝忠悅テ許諾ス、兩國既ニ、日ヲ定テ打立ントシケル處ニ、事忽ニ漏聞ヘテ、丹波ヘハ、山名伊豆守時氏、三千餘騎ニテ推寄、高山寺ノ麓、四方

兒島高德

新田義治

荻野朝忠

山名時氏

高山寺

興國四年（康永二年）　一〇三七

二三里ヲ塀ニヌリ籠テ、食攻ニシケル間、朝忠終ニ戰屈シテ、降人ニ成テ出ニケヲ、（下文ハ、明年四月四日ノ條ニ收ム）

（註）延元二年七月二十六日、延元四年六月二十九日、興國五年四月四日、正平六年十一月是月條參照。

十二月十四日　出羽藤島城ノ官軍、越後ニ攻メ入リ、大河將長ノ城ヲ陷イル。

〔三浦和田文書〕△六、七、八、二二、

去十四日、羽州藤島城囚徒等寄來當國候處、同日酉刻、被打落大河彦次郎將長楯候間、須土宇山分當平申所へ將長引退了、因茲當庄人々相共可罷向候、即時先岩船まて可有御出候、明日者御敵山內へ打入候由聞候、忿々可有御合力候、以此趣藏王堂令申了、恐々謹言、（康永二）十二月十六日附、藤原（公房ヨリ和田四郎兵衛尉宛）

（註）二月十九日條參照。

興國五年（康永三年）甲申（一三〇四）

二月是月　僧月山、上野長樂寺住持トナル。

〔禪刹住持籍〕（山城）上野州世良田山長樂寺歷代

十八世月山諱參已、（嗣無爲元、昭元）康永三年甲申二月入寺、貞和五年己丑九月廿一日示寂、塔于法輪菴、壽七十五歲、

〔廣智國師語錄〕二疏　△六、一二、九七四、寶蓋參已住世良田長樂山門疏

古聖榮朝闢山爲世之良田、帝師圓爾隸葉爲國之寶所、惟朝公付藏教於爾祖、二千年後有阿難、乃爾祖傳佛心於朝公、三百年前無神贊者、寺得厥孫裔、遞代須紹門風、某學達絕學之隣、不慕諸聖、參到無參之地、不重已靈、呑大智海於毛端、全具超師之作、垂大寶蓋於頭上、遠馳出世之名、去入西山、解道虛空講經、未到南岳、寧求住山鉞斧、霜露之果熟矣、天龍其推（推カ）出焉、撞動長樂鐘、開堂演法、運載長安月、祝聖爇香、

〔廣智國師語錄〕四偈頌　△六、一二、九七五、月山

供養修行陷鐵圍、獨超物外藏須彌、靈光洞徹寶峰頂、照顧兒孫墮嶮崖、

榮朝闢山

四月四日　兒島高德、新田脇屋義治ヲ擁シテ、京都ニ於テ義擧ヲ企テシモ、發覺シテ擊タル。義治・高德等、信濃ニ遁ル。

一味ノ者擊タル

〔師守記〕八（帝國圖書館本）△六、八、二一九、四月四日癸亥、（頭書）傳聞今日於五條坊門壬生召取御敵、或自害或被召取云々、於首者東寺四塚懸之云々、洛中賀茂祭以前之間、被憚之云々、

〔參考太平記〕卷第二十四（前文ハ去年十二月二日ノ條ニ收ム）兒島ヘハ、備前備中備後、三箇國守護五千

高德義治ヲ擁シテ京都ニ上リ愈氏等ヲ狙フ

餘騎ニテ、五千、（金勝院本作ニ三千ニ下做レ之、）寄ケル間、高德爰ニテハ本意ヲ遂ル程ノ合戰、叶ハシヤト思ヒケン、大將義治ヲ引具シ、海上ヨリ京ヘ上テ、將軍、左兵衛督、高上杉ノ人々ヲ、夜討ニセントソ巧ケル、勢少クテハ叶フマシ、廻文ヲ遣シテ、同意ノ勢ヲ集ヨトテ、諸國ヘ此由ヲ觸遣スニ、此彼ニ身ヲ側メ、形ヲ替テ隱レ居タル宮方ノ兵千餘人、夜ヲ日ニ繼テソ馳參リケル、此勢一所ニ集ラハ、人ニ怪シメラルヘシトテ、二百餘騎ヲハ、大將義治ニ附奉リテ、東坂本ニ隱シ置キ、三百餘騎ヲハ、宇治、醍醐、眞木、葛葉ニ宿シ置キ、勝レタル兵三百人ヲハ、京白河ニ打散シ、態一所ニハ置サリケリ、既ニ明夜木幡峠ニ打寄テ、將軍、左兵衛督、高上杉カ館ヘ、四手ニ分テ夜討ニ寄ヘシト、相圖ヲ定タリケル前日、如何シテ聞ヘタリケン、時ノ所司代都筑入道（金勝院本云、都筑山城入道宿俊、）二百餘騎ニテ、（二百、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作ニ三百ニ）夜討ノ手引セントテ、究竟ノ忍ヒ共カ隱レ居タル、四條壬生宿ヘ未明ニ推寄ル、楯籠ル所ノ兵共、元來死生不知ノ者共ナリケレハ、家ノ上ヘ走上リ、矢種ノアル程射盡シテ後、皆腹搔破テ死ニケリ、是ヲ聞テ、處々ニ隱居タル與黨ノ謀反人共モ、皆散々ニ成ケレハ、高德カ支度相違シテ、大將義治相共ニ信濃國ヘソ落行ケル、サテモ此壬生ノ在家ニ隱レ居リタル謀反人共、遁ルヽ處ナク皆討レケル中ニ、武藏國住人ニ、香勾（カウワ）新左衛門高遠ト云ケル者、只一人地藏菩薩ノ命ニ代ラセ給ヒケルニ依テ、死ヲ遁レケルコソ不思議ナレ、（下畧）

義治高德等信濃ニ落ツ

發覺

四條壬生宿

十月二十日　直義、新田氏ノ根據地越後上田庄內闕所地ヲ上杉憲顯ニ與ヘテ、同國守護領ノ不足分ニ充テシム。

上田庄

〔上杉古文書〕一（上杉憲顯）　△、六、八、四九〇、

越後國上田庄（南魚沼郡）內（闕所未給分、）爲當國守護領不足分、可致沙汰之狀如件、

康永三年十月廿日　（貞義）（花押）

民部大輔（上杉憲顯）殿

新田義興

十月二十六日　新田義興、武藏國府ニ在リ。鎌倉ノ兵ニ襲ハレテ遁ル。

〔關城繹史〕十月廿六日、新田義興在武藏國府、鎌倉遣賊兵襲之、義興逃、（高山家譜）

（註）興國二年五月二十五日條參照。

興國六年（康永四年・貞和元年）

里見義宗

八月十七日　新田里見義宗、京廷ヨリ民部少輔ニ任ゼラレ、從五位下ニ除セラル。尋デ、二十九日、天龍寺供養ニ列ス。

〔園太曆〕五　八月十七日天晴、大外記師利師茂注送去夜聞書、（中略）去夜除目聞書（多クノ名列中ニ）民部少輔源義宗

從五位下（中略）源義宗民部少輔

〔園太曆〕五　康永四年八月廿九日、天龍寺供養也、依之三條殿夜前御參一條殿、今日出御之間爲連御車也、（醫兵中ニ）里見藏人

〔結城文書〕一（伊勢）　（六、九、二八四、）　天龍寺供養日記

康永四年乙酉八月廿九日、庚辰　天晴風靜、武衛自三條宿館、昨夕被渡將軍家、被連軒、（醫兵中ニ）　里見民部少輔

興國七年・正平元年（十二月八日改元）（貞和二年）丙戌（一三〇六）

二月十四日　新田綿打又太郎政光等、自殺ス。

綿打政光

〔常樂記〕　貞和二丙戌、二月十四日（中略）綿打又太郎政光、廿四、同時互害死了、

（註）　興國三年九月二十六日、正平六年二月是月條參照。

三月六日　新田貞員、越中ノ井上俊清・富來俊行等ト共ニ能登ニ攻メ入リ、富來院內木尾嶽ニ據ル。同十六日ヨリ、足利黨吉見氏頼、之ヲ攻メ、攻戰續ク。尋デ、五月四日、木尾嶽陷ル。

〔得江文書〕（六、九、八五八、）

得江九郎頼員申軍忠事、

新田貞員
井上俊清
富來俊行

右越中國囚徒井上宮內權少輔俊清與同八條殿、并新田式部權少輔貞員、栗澤彈正忠政景、富來彥十郎俊行以下輩、今年（貞和二）三月六日、令亂入當國、能州、依橋籠富來院內木尾嶽、爲對治之大將吉見掃部助（氏頼）殿、自越中國御發向間、屬彼御手、同十六日攻寄城墻、致合戰忠節訖、同十八日押寄彼城大手、頼員不惜身命攻戰之刻、自身被疵、左肘射疵、同若黨長野彥五郎季光被疵右足射疵、訖、加之同廿三日廿五日以後合戰之時、差向若黨等、每度致軍忠、同五月四日攻落彼城畢、此等次第侍所長井藤內左衞門尉見知之上者、早下賜御證判、爲備向後龜鏡、恐々言上如件、

貞和二年五月日　（吉良氏顯）承了（花押）

（註）　正平五年十一月三日條參照。

閏九月十四日　是ヨリ先、新田ノ子息（新田貞カ）擒ヘラレテ斬ラル。越中ノ井上俊清、足利方ニ降參ス。又、曾テ、義助ノ據リシ尾張羽豆崎城、陷ル。是日、尊氏、伊作宗久等ニ之等ヲ報ズ。

〔二階堂文書〕一（東京）　（六、一〇、一四二、）

（尊氏）（花押）

新田ガ子息

嶋川の左京しん入道、(伊作宗久)おきの入道子とも、(二階堂行仲)いまゝてこらへてちうを いたす事、しんへうに候、(尾張)おわりのくに(羽豆)わつか(崎)さきのしやう(知多郡師崎村)もおとされ候 ぬ、ゑちうの(越中)ふもんくら(門蔵)人(井上俊清ナルベシ)もかう人ニまいり候ぬ、こなたさまゝみなせ いひつして候、猶〳〵ちうをいたすへし、又新田かしそくもいけとられ候てきら れ候ぬ、いまゝいよ〳〵ちからをそへて忠をいたすへし、きよかんあるへし、この あひたのしんくこそ、かへす〳〵しんへうに候へ、

(貞和二年)潤九月十四日

十一月二十六日　僧了休、上野長樂寺住持トナル。

〔禪刹住持籍〕(上野州世良田山長樂寺歴代山城)

十九世雪心諱了休、(嵩月船、貞和二年丙戌十一月二十六日入寺、歳七十一、同三年丁亥十二月二十三日寂、七十二歳)

正平二年(貞和三年)丁亥(二〇〇七)

三月二十六日　足利幕府、岩松頼宥ニ、勲功ノ賞トシテ、新田莊寺井郷内ノ地ヲ與フ。〔正木文書〕(正平五年五月七日ノ條ニ收ム)

四月二日　尊氏、岩松直國ニ、新田莊由良郷・成塚郷ノ地ヲ領知セシム。〔正木文書〕

岩松直國

伊賀局

(足利尊氏花押)

下　岩松治部少輔直國

可令早領知上野國新田庄内由良郷成塚郷加蕾鹽金屋兩村地頭職事、

右以人所補任也、者守先例可致沙汰之狀如件、

貞和三年四月二日

六月十日　義貞ノ家臣篠塚伊賀守ノ娘伊賀局、吉野ニ於テ藤原基遠ノ亡靈ト語ル。

〔吉野拾遺〕上新待賢門院に伊賀のつぼねといふありけり、これは左中將義貞朝臣のさぶらひに、篠塚伊賀守といへるがむすめになんありける、女院の御所は、皇居のにしのかたにて、山につゞける所なりけり、去ぬる正平ひのとの亥の年の春の比、ばけものあなりとて、人々さはぎおそれ玉へる、かたちをしかと見さだめたるものもあらず、行あひける者は、心ちくらく成にけり、内裏より御とのゐ人あまたまいらせ玉ふて、ひきめなどいさせければ、そのほどはしづまりにけり、みな月十日あまりの程に、いとあつき比なりければ、此つぼね、庭に出てたちたまへるに、月のさしいでていとあかかりければ、

正平二年(貞和三年)

すゞしさを松吹風にわすられて袂にやどす夜半の月かげ

とたれきく人もあらじとひとりごち玉へるに、松の梢のかたよりからびたるこゑして、たゞよくこゝろしづかなれば、すなはち身もすゞしといふふるき詩の下句をいふに、みあげ玉へば、さながらにおにのかたちにて、つばさのおひ出けるが、眼は月よりもひかりわたるに、たけきものゝふのこゝろもきえうせぬべきに、打わらひたまふて、まことにさにこそありけれ、さもあらばあれ、いかなるものにかあるらん、あやしくおぼゆるにこそ、名のりし玉へととはれて、我は藤原の基とをにこそ侍れ、女院の御ためにいのちをたてまつりさぶらひしに、せめてはなきあとをとはせ玉はむことにこそあれ、それさへなくさぶらへば、いとつみふかく、かるかたちになりて、くるしきことのいやまされば、うらみ奉らんとおもひて、此春の比より、うしろの山にさぶらへども、おまへにはおそれてまいらぬにこそあれ、此よしけいして玉ひなんとこたへければ、げにさは聞をよびし、されどうらみたてまつるべき事かは、世のみだれにおもひ過したまへるぞかし、そのことばかりならば、けいしてとぶらひてん、さるにても御法（經イ）には、いかなることかよかるべき、心にまかせ侍らんとのたまへば、たゞそのことばかりにさぶらへ、御とぶらひには（たゞイ）法華經にしくはあらじ、さればかへりなんといふに、かへらむところはいづくにとの玉へれば、露ときえにし野の原にこそなき玉はうかれさぶらへとて、北をさして光りもて行をみをくりてのち、女院のおまへにまいりてけいしたまひければ、まことに思ひわすれてこそ過しつれとて、あけの日吉水法印にみことのりありて、御堂にて三七日法華經を供養し玉ひけるに、そののちあへてことなることもなかりし、うかびてや有らんといとたのもし。（下文明年正月二十四日ノ條ニ敷ム）

（註）興國三年九月三日條參照。

十二月二十三日　上野長樂寺住持了休、寂ス。（禪刹住持籍）（去年十一月二十六日ノ條ニ敷ム）

正平三年（貞和四年）戊子（二〇〇八）

正月二十四日　是ヨリ先、正月五日、楠木正行、四條畷ニ戰死ス。是日、高師直、吉野ヲ陷イル。天皇、紀伊ニ幸シ給フ。篠塚伊賀局、女院ノ行啓ニ功アリ。後、楠木正儀ノ妻トナル。

（吉野拾遺）上（上文去年六月十日ノ條ニ敷ム）このつぼね（篠塚伊賀局）ひととせむさしのかみもろなをが皇居をおそひ奉る時に、ふせぐべきたよりのなかりければ、人々なを山ふかくいらせ給ひけるに、女院の御ともに、はか〳〵しき侍もつき玉はで（奉ライ）女ばうだち

女院ヲ渡シ奉ル

左馬頭正儀ノ妻トナル

ばかりなりけり、よし野川のはし一けんが程ふみおとしてありけるに、せんかたなくてみなあきれてたゝせたまへるに、このつぼね（イナシ）そのほとりの松櫻の大きなるえだどもを、ひき折〳〵うちわたして、女院をおひたてまつりて、人々をもわたしはてたまひける（後イ）に、そのときのおほきさなる枝を、そのべの六郎におらせて御覽ありけれども、かなはでやみにけり、いといかめしき事にぞありける、今は左馬頭正のりの妻になんなりたまひし、

四月一日　忽那義範等、鹽飽之島賊黨ノ城廓ヲ攻落ス。大館右馬亮、之ニ協力セシトモ云フ。

〔忽那文書〕（乾 伊豫）　△、六、十一、四六七、

今月一日於讃岐國鹽飽之島、追落城郭之處、致合戰軍忠之條、殊以神妙、早々可令注進也、仍執達如件、

正平三年四月二日　　大藏大輔（花押）

忽那下野法眼（義範）御房

〔福山史料集〕（新田氏研究 一九九頁）

今月一日於讃岐國鹽飽島、追落城郭之處、致合戰之忠之由、忽那下野法眼令注進了、尤神妙者、天氣如此、悉之以狀、

正平三年四月二日　　大藏大輔（花押）

大館右馬助殿

（註）右福山史料集所收綸旨、日附ニ疑ヒアレド、姑ク茲ニ掲グ。興國四年四月十四日條參照。明年十二月十四日條參照。

是歳　天澤宏潤、上野長樂寺ニ住持ス。

〔禪刹住持籍〕（上野州世良田山長樂寺歴代　二十世天澤諱宏潤、晶雲屋輪、晶無學、貞和四戊子入寺、歳五十、後歴迁、圓覺建長、）

正平四年（貞和五年）己丑（二〇〇九）

九月二十一日　上野長樂寺月山、寂ス。〔禪刹住持籍〕（康永三年二月是月條參照）

十二月十四日　是頃、忽那義範、周防屋代島ニ於テ賊黨ト戰フ。是日、吉野朝廷、之ヲ褒ス。大館右馬亮、亦同ジトモ云フ。

〔忽那文書〕（坤 伊豫）　△、六、一三、五一、

屋代島（周防大島郡）合戰致軍忠之由被聞食了、尤以神妙者、天氣如此、悉之以狀、

正平四年十二月十四日　　左中辨（花押）

忽那下野（義範）法眼房

〔福山史料集〕（新田氏研究二〇〇頁）（前同文、大館右馬助宛）

〔忽那島開發記〕（伊豫）　忽那下野法眼藤原義範

同（正平）四年十二月屋代嶋合戰、（並忽那ノ内）由里嶋、（並屋代ノ内）家室、皆瀾、所々軍忠、大將軍中院

内大臣殿御教書賜、同月十四日、

（註）福山史料集所收綸旨ハ疑ハシケレド姑ク茲ニ掲グ。去年四月一日條參照。正平六年八月二十二日條參照。

正平五年（貞和六年・觀應元年）（三月二十七日改元）庚寅（三〇一〇）

五月二日　官軍新田伊達小次郎、如法寺圓康・土岐藏人太郎等ト共ニ起リテ、豊前上毛郡ヲ攻略シ、是日、賊黨守護代ト篠塚ニ戰フ。

（新田伊達小次郎、如法寺圓康、土岐藏人太郎、上毛郡篠塚）

〔成恆文書〕（豊前）　△六、一三、六五一、

豊前國成恆左衛門三郎種定申軍忠事、

□□蜂起之間、屬筑州（筑後守少貳頼尚）御手、令發向之處、合戰延引之間、罷歸之刻、當國御敵新田伊達小次郎、如法寺孫次郎入道圓康、土岐藏人太郎以下、可打出之由承及之間、最前馳參築城之刻、今月二日凶徒等濫妨上毛郡、俵燒拂所々、御發向之間、屬守護代御手、於當郡篠塚致合戰之忠條、守護代御見知之上、萱津次郎三郎、安永四郎以下數輩被見知者也、然早預御注進、賜御判爲備龜鏡、粗言上如件、

觀應元年五月日　承了（花押）

〔歴代鎮西志〕九　五月少貳頼尚、帥師而發向筑前國、宮方新田、岩松、堤、高橋、宇都宮、菊池武敏、武茂等、守諸城無下、交戰有日、

（註）興國四年七月二日條參照。

五月七日　岩松頼宥、足利幕府ニ、新田鳥山右近將監（宗義カ）新田庄寺井郷ヲ押領スト訴フ。是日、幕府、之ヲ停メ、此ノ地ヲ頼宥ニ交付セシム。

〔正木文書〕〔岩松家系附考拾遺〕

御判

岩松禪師頼宥代有義申上野國新田庄寺井郷内田在家事、

右地者、頼宥爲勳功之賞、去貞和三年三月廿六日拜領之處、以當郷内惣領分田在家、鳥山右近（宗義カ）將監、自同年押領之間、可被沙汰下地之由、頼宥雖申之、兩方當參之間、去三月四日遣奉書之處、無音之間、重同廿日以兩奉行人關左近將監宗度、并舊冬使者雖加催促、于今不參、（雖カ）雖遁難澁之咎、然則於彼地者、任御下文之旨、頼宥知行不可有相違

（新田岩松堤高橋、鳥山右近將監）

正平五年（貞和六年・觀應元年）

也、次押領以後得分物、任員數可糺返之、次押領各事、可分召所領五分一之狀、下知如件、

觀應元年五月七日

（註）正平七年六月十二日條參照。

六月一日　決翁元勝、上野長樂寺ニ住持ス。

〔禪刹住持籍〕上野州世良田山長樂寺歷代

廿一世決翁諱元勝　高鈞翁、觀應元年庚寅六月一日入寺、歲六十、應安二年己酉七月二日示寂、壽稱卅六世、竜興庵、

七月二十四日　京廷、上野長樂寺院豪ニ圓明佛演禪師ノ諡號ヲ賜フ。

〔園太曆〕十五（弘安四年八月二十一日ノ條ニ收ム）

九月三日　是頃、官軍、信濃・常陸・越後等ノ諸國ニ蜂起スル由、京都ニ風聞ス。同月十七日、上杉憲將、越後如法寺左藤ノ官軍ヲ擊タントス。

〔園太曆〕十五　九月三日天晴、濃州靜謐之由祝著之處、信濃、常陸、越後已下四五ヶ國蜂起之由有其聞云々、

〔南狩遺文〕三安藤氏家臣田口茂右衞門藏

當國凶徒等執陣於如法寺（越後藤原郡）左藤之間、爲對治明日十七日、罷向候、爲後攻相催一族等、自山國令發向、可被致軍忠候、仍執達如件、（觀應元年九月十六日附、兵庫頭ヨリ田口三郎宛）

十月二十六日　是夜、直義、潛ニ京都ヲ遁レ、大和ニ赴ク。〔園太曆〕

十一月三日　是ヨリ先、足利幕府ノ敵（桃井直信）、越中ニ起リ、能登ニ入ラントシテ、幕府軍ト戰フ。是日、先ニ新田貞員ト聯合セシ富來俊行及ビ井上布袋丸等、能登富來院ヨリ打出デ、花見槻ニ寄來リ、翌日、又、飯田宿ニ陣ヲ取リシガ、ヤガテ越中ニ退ク。尋デ十九日、桃井直信、越中ヨリ能登ニ侵入ス。能登守護桃井義綱、幕軍ヲ率ヰテ、十二月一日、志雄保ニ、十三日、金丸城ニ之ト戰フ。

〔得江文書〕△、六、一三、九八三、

（裏端書）得江石王感狀

得江石王丸代長野彦五郎季光申軍忠事、

一去年（觀應元）十月廿日、於越中國凶徒打出、同廿三日責來同國氷見湊之間、堀切石王丸一族等所領志雄越山（能州）令警固、致度々合戰訖、

一同十一月三日、御敵井上布袋丸、富來彦十郎以下、自當國（能州）、富來院打出、寄來花見槻之間、馳向彼所致軍忠訖、

井上布袋丸・富來彦十郎

正平五年（貞和六年・觀應元年）

一同四日、凶徒等取陣同國飯田宿之間、季光押寄彼在所、致合戰忠節、追越御敵等於越中國訖、是等次第、能州守護桃井兵部大輔殿（義興）御代官矢野余五郎令見知訖、

能州守護桃井兵部大輔

一同日四日、兵部大輔殿自京都當國能州、御下向之間、屬彼御手之處、同十九日、御敵桃井兵庫助直信、率數千騎自越中令亂入能州、取陣高畠宿、同十二月一日、寄來石王丸等領内志雄保之間、季光不惜身命致戰功、追歸凶徒等訖、

桃井兵庫助直信

一同十三日、被楯籠兵部大輔殿金丸城之處、御敵等寄來之間、季光自城中打出致合戰忠節、追歸凶徒等訖、

金丸城

一今年、（觀應二）正月廿一日、被差向里見彦七殿於羽田城之間、屬彼御手、致合戰燒拂麓、至于同廿五日、毎日抽軍忠訖、

里見彦七足利方ニアリ

右如此致毎度戰功上者、且被經御注進、且賜御證判、爲備向後龜鏡、言上如件、

觀應二年正月　日

（附箋）「桃井兵部大輔殿」（桃井義綱ナルベシ）

承了（花押）

（註）正平元年三月六日條參照。十二月二十三日條參照。

十二月十二日　直義、上野長樂寺ヲシテ、祈禱セシム。

〔長樂寺文書〕

天下泰平武運長久祈禱事、早可致精誠之狀如件、

觀應元年十二月十二日　（直義）（花押）

世良田長樂寺長老（元勝）

十二月十三日　直義、吉野朝廷ニ降參ス。朝廷、之ヲ許シ給フ。

〔觀應二年日次記〕〔吉野事書案〕〔大乘院記錄拔書〕

〔參考太平記〕（卷第十八）　慧源降參南方事

直義赦免ノ願ヲ出ス

左兵衛督（直義）入道（中略）嚮テ專使ヲ以テ、吉野殿ヘ奏達セラレケルハ、

元弘初、先朝爲逆臣被遷皇居於西海、被惱宸襟候時、雖有應勅命起義兵輩、或爲敵被圍、或戰負屈機、空志處、慧源苟勸尊氏卿企上洛、應勅決戰、歸天下於一統皇化候事、乾臨定被殘叡感候歟、其後依義貞等讒、無罪罷成勅勘之身、君臣空隔胡越之地、一類悉殘朝敵之名條、難有餘處也、臣罪雖誠重、天恩不咎、往負刑下被免其咎、則蒙勅免綸言、鎭四海之逆亂、可載聖朝之安泰候、此旨内々得御意、可令奏聞給候、恐惶謹言、

義貞等尊氏兄弟ヲ讒ストナス

十二月九日　沙彌慧源

進上　四條大納言殿

ト委細ノ書狀ヲ捧テ、降參ノ由ヲソ申サレケル（下略）

十二月二十三日　足利幕府、上杉憲顯ニ令シ、新田庄内ナル世良田右京亮・桃井直信等ノ所領ヲ岩松直國ニ交付セシム。

〔正木文書〕一

上野國新田庄内世良田右京亮、幷桃井刑部大輔（直信）等跡事、任御下文之旨、可被沙汰付岩松治部少輔直國代之狀、依仰執達如件、

觀應元年十二月廿三日　　（憲顯）上杉民部大輔殿　　（高師直）武藏守（花押）

桃井刑部大輔ハ直信ナリ

（註）史料編纂所本正木文書ノ朱ノ加筆ニ、「新田松平ノ御家譜ヲ按ズルニ世良田右京亮攻義ハ滿義ノ子ナリ」トアリ。桃井刑部大輔、大日本史料ニハ直常トスレドモ、得江文書觀應二年九月日附得江石王丸代ノ軍忠狀ニ桃井刑部大輔直信トアリ、又、天野文書文和二年六月日附天野遠政代軍忠狀ニ桃井播州幷刑部大輔殿トアレバ直信ナル事明ナリ。

十二月二十七日　尊氏、和泉・備後兩國内ニ在ル世良田右京亮ノ所領、及ビ新田庄内木崎村安養寺ナル義貞ノ舊領ヲ勳功ノ賞トシテ、岩松頼宥ニ領知セシム。

〔正木文書〕一

（尊氏）（花押）

下　岩松禪師頼宥、

可令早領知和泉備後兩國内世良田右京亮跡、上野國新田庄内木崎村安養寺（義貞）跡、事、

右爲勳功之賞所宛行也者、守先例可致沙汰之狀如件

觀應元年十二月廿七日

（註）正平十四年四月十日條參照。

正平六年（觀應二年）辛卯（二〇一二）

正月二十一日　足利幕府、里見彦七ヲ遣シ、能登羽田城ノ幕敵ヲ擊タシム。〔得江文書〕（去年十一月三日ノ條ニ收ム）

二月二十六日　是ヨリ先、直義黨、尊氏黨ヲ破リ、兄弟和睦ス。是日、高師直・師泰等、直義黨ニ殺サル。〔觀應二年日次記〕〔參考太平記〕〔其他〕

二月是月　曾テ、土佐ニ於テ新田綿打入道等ノ奉ゼシ花園宮、是頃、周

世良田右京亮跡義貞跡

防ニ御遷リアリテ常陸親王ト申ス。是月、諏方部助直ヲ召シ給フ。

〔三刀屋文書〕（諸家文書纂三所收）△六、一四、八五三、

常陸親王

參御方可致軍忠、於有其功者、可有恩賞、常陸親王宮令旨如此、悉之以狀、

諏方部彌三郎（助直）殿　　和泉守（花押）

正平六年二月日

〔毛利文書〕百四十八　雜類　△六、一四、八五三、

宗良親王

周防御座

常陸親王御使

河原源源次左衞門尉

一宮源藏人大夫入道

花園宮

正平六年七月卅日

せん（光良）くわうの御こ四人、

めうほうしとの、さすのミや、

はなそのゝミや、（とさより）すハうへ御入ある、

いまハひたちのしんハうと申候也、

懐良親王

ちんせいのミや、つくしニ御さ候、

後村上天皇

よしのゝたうきん、

大塔宮御子

おうたをのミやの御こ（二人、そうして六人わたり候、）

ひたちのゐんわうの御つかひ、

かわらのけんしさゑもんのせう、

一のミや（とうたうミのくに）のくらうとたゆふにうたう、

しやうへいろくねん七月卅日

七月二日　直義、岩松直國ニ其ノ所領ヲ安堵セシム。

〔正木文書〕一　△六、一五、一〇二、

岩松直國

本知行地事、不可有相違之狀如件、

直義（花押）（直義ノ二字ハ、追筆ナルベシ、）

觀應二年七月二日

岩松治部少輔（直國）殿

八月一日　直義、尊氏・義詮ト和セズ。是日、京都ヲ逃レ、北國ニ赴ク。

〔園太曆〕〔觀應二年日次記〕〔其他〕

八月十五日　是頃、岩松頼宥、中國ニ下向シ、尊氏黨ヲ督ス。是日、三吉

岩松頼宥ト三吉覺辨

覺辨ノ備後石成城ニ戰ヘルヲ褒ス。

〔福山志料〕三十一附錄古文書　△六、一五、二〇一、

備後國石成上下城（深津郡）退治事、去十三日致軍忠之條尤神妙、京都殊可注申之條如件、

觀應二年八月十五日　（岩松）頼宥（花押）

三吉少納言（覺辨）御房

（註）覺辨、大館右馬亮ト戰フ事、興國四年四月十四日條ノ鼓文書ニ見ユ。

〔萩藩閥閱錄〕八ノ二福原對馬　△六、一五、二〇一、

長井出羽前司貞賴、去年（觀應二）、賴宥中國下向之時、於備後國度々音信之段、無子細候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

（觀應三）六月廿七日　僧賴宥判

進上　御奉行所

承了（花押脫カ）

八月二十二日　仁田（新田カ）彦四郎一族、去月三日常陸親王ニ來附セシ出雲ノ諏和部信惠ト共ニ、直義黨山名時代ノ招ニ應ジテ石丸城ニ兵ヲ擧グ。

仁田彦四郎

〔三刀屋文書〕（諸家文書纂三所收）△六、一五、二三三、

須和部三郎入道信惠申、

出雲國三刀屋郷楯籠石丸城、去廿二日（月脫カ）、揚御旗人數、

桑原神五一族　若槻源藏人一族

片山平次郎入道一族　仁田彦四郎一族

須和部三郎入道一族

楯籠彼城郭、令致忠節之條、若槻孫四郎所令存知候也、仍且（粗カ）恐々言上如件、

觀應二年九月廿二日　承了（山名時氏花押）

〔三刀屋文書〕（七月三日附、常陸親王令旨）　〔三刀屋文書〕（八月二十一日附、山名時氏軍令狀）

八月二十二日　尊氏黨岩松頼宥、官車ト備後尾道城ニ戰フ。時ニ官軍ノ將ハ大館右馬亮ニシテ、足利直冬、右馬亮ノ戰功ヲ褒セシガ如シ。

〔福山志料〕三十一附錄古文書　△六、一五、二三六、

於備後國尾道城、去廿二日合戰之時、致軍忠之條尤神妙、殊可注申京都之狀如件、

正平六年（觀應二年）

岩松頼宥

観應二年八月廿五日

三吉少納言（豊綱）御房

頼宥（岩松）（花押）

（福山史料集）（新田氏研究）（二〇三頁）

去二十二日、於備後國尾道城合戰之時、致忠節之由、殊以神妙也、彌可抽戰功之狀如件、

正平六年八月十日（月日ニ誤リアルベシ）　直冬

大館右馬助殿

（註）福山史料集所收文書ニハ疑アレド姑ク茲ニ掲グ。正平四年十二月十四日條參照。本年十二月二十三日條參照。

大館右馬助

九月一日　足利基氏、上野世良田ニ至ル。

（鶴岡社務記錄）坤　九月一日（觀應二年）、若御（基氏）世良田ニ下著、

江田行義等ノ活動ナルベシ

九月三日　丹後守護上野頼兼、同國官軍ニ殺サル。但馬官軍モ入リ來ルト風說ス。

（園太暦）十七　丹後國宮方打入事　九月十二日、天晴、今朝丹後國目代光清法師來、申云、去三日、當國守護上野左馬助（頼兼）被打、同四日、宮方勢結城已下入部、國中濫妨無度、且又但馬國惡黨等可入來旨風聞云々者、

（註）興國三年二月十七日、二年二月十八日、延元二年七月二十六日、同四年六月二十九日條參照。次項及十一月是月條參照。

江田行義モ入來ルベキ旨相觸ルベキ旨相觸ル

九月七日　官軍新田金谷某、石清水八幡ニ入リ來リ、神人等ト鬪ヒテ死ス。又、新田江田行義モ入リ來ルベキ旨、聞ユ。

新田金谷ニ入リテ死ス

（園太暦）十七　八幡惡黨亂入追出注進事　九月七日、癸丑、天晴、今日、未刻、八幡權別當定清進使者云、今朝惡黨欲亂入境内、而祠官神人及境内輩追出、且大略打止云々、其後又、永清進使、其趣大略同前、新田兵部少輔（行義）可入來旨相觸之云々、

（觀應二年日次記）（山城）　〈六、一五、二五八、九月七日、新田金野（カナヤ）打入八幡、人勢五十餘人、騎馬六七騎云々、八幡在家之輩并牧片野之輩數百人令引率、忽以令追罰之處、彼金野切腹自害云々、當座被打殺之者二十餘人、被疵者十餘人云々、彼被疵輩各流河云々、彼金野號宮方云々、

金野ハ宮方ナリ

（註）新田兵部少輔ハ江田（世良田）行義ナル事、延元二年七月二十六日條ノ南部晋所藏文書及ビ註ニヨリ明カナリ。新田金野ハ金谷經氏ノ一族ナルベシ。本條ノ事、前掲丹後動亂ト關係アルカ。金谷經氏ノ事、興國元年二月十七日、正平六年（觀應二年）

興國三年六月五日、及ビ、明年十二月八日條參照。行義ノ事、十一月是月條參照。

上杉憲顯

九月二十一日　足利基氏、武藏賀美郡長濱鄕ヲ上野長樂寺ニ寄進ス。上杉憲顯、同憲將、之ヲ施行ス。

〔長樂寺文書〕

寄進　世良田長樂寺、

武藏國賀美郡內長濱鄕安保中務丞跡、事、

右守先例、可被致沙汰之狀、依仰奉寄如件、

觀應二年九月廿一日　散位藤原朝臣（上杉憲顯）（花押）

寄進　世良田長樂寺、

武藏國加美郡長濱鄕事、

右爲當寺領所寄附也者、守先例可被致沙汰之狀、依仰奉寄如件、

觀應二年九月廿一日　散位藤原朝臣（上杉憲顯）（花押）

上杉憲將　岩松頼宥

世良田長樂寺雜掌宗阿申、武藏國賀美郡長濱鄕內、安保中務丞跡事、宗員頼直請文、幷宗阿請取狀等、謹進上之候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

觀應二年九月廿六日　兵庫頭憲將請文

十月九日　直冬黨上杉三郎・宮盛重等、尊氏黨ノ岩松頼宥ヲ備後勝戸城ニ攻ム。尋デ、十八日、頼宥、備中ノ急ヲ救ハントシ、備後長井貞頼ヲシテ其ノ居城信敷城ヲ固守セシム。更ニ、二十九日ヨリ備中荏原高越城攻擊ヲ開始シ、十二月ニ及ブ。

〔萩藩閥閱錄〕八ノ二福原對馬　△、六、一五、四九七、

依無指事、其後不申承候、于今無心元候、抑上椙山田三郎、宮平太郎（盛重）以下囚徒打出候、昨日九日寄來當城勝戸（後攻カ）候、俊政事深奉憑入候、御出候御合力候ハヽ、爲悅候、恐々謹言、

正平六　十月十日　僧（岩松）頼宥　判

謹上　長井出羽（貞頼）守殿

〔福山志料〕三十二附錄古文書　△、六、一五、四九八、

於備後國在々所々、被致忠節上、殊被籠當城勝戸之條、戰功之至尤以神妙候、至恩賞者

寂前可申沙汰狀如件、

觀應二年十月十日　　賴宥（花押）

三吉小納（豐綱）言御房

〔毛利文書〕（福原家證文百三十五）　△六、一五、四九八、

山内又三郎（廣通）已下囚徒、幷上椙三郎代等、打入御領内（備後信敷庄、今比婆郡）合戰之由承候、合力可申候之處、畠山丹波守、宮平太郎已下、又寄來當城（勝戸）候之間不馳參候、其方御合戰無爲落居候者可有合力候、當城無殊事候者其可（念カ）參候、恐々謹言、

正平六　十月十八日　　僧賴宥（花押）(52)

謹上　長井出羽（貞廉）守殿

〔萩藩閥閲錄〕（福原對馬八ノ二）　△六、一五、五三〇、

去十八日進狀候、定參着候覽、畠山丹波守（賴繼カ）今日廿一日（月カ）までハ不寄來候、就其備中國難儀之由、庄四郎左衞門（小田郡草壁庄ノ豪族ナルベシ）以下同心申給候間、明日可罷越候、相構當城（信敷庄、備後）、御こらへ候て、可有御待歸國候、細々自備中可申候、恐々謹言、

正平六　十月廿二日　　僧賴宥（日杉）判

謹上　長井出羽（貞廉）守殿

〔福山志料〕（附錄古文書三十二、鼓氏所藏）　△六、一五、五五〇、

於備中國荏原（後月郡ニ江原村アリ）高越城、自去十月廿九日、迄于同十二月二日度々合戰、同十五日、延福寺山合戰之時、致軍忠之條尤神妙、殊可（注カ）從申京都之條如件、

正平六年十二月十九日　　賴宥（花押）

三吉小納（豐綱）言御房

〔毛利文書〕（福原家證文百三十五）　△六、一五、五五一、

荏原城事、既自去廿一日取廻、万方合戰、寂中候處、上椙五郎、宮平太郎（盛重）以下、爲後詰寄來之由風聞候歟、早々御出對候者可宜候哉、但路次難儀之由其聞候之間、無心本候、近日布野孫三郎等、罷出候間、令申候、御同道候哉、恐々謹言、

正平六　十二月廿六日　　僧賴宥（花押）(53)

謹上　長井出羽（貞廉）前司殿

十月十一日　曾氏、新田大島義政ニ上野淵名莊ヲ與フ。

〔古文書〕（淺草文庫本廿四）　△六、一六、一八一、

持主豆州加茂郡伊豆權現別當般若院

走湯山造營料所上野國淵名庄事、正平七年正月廿日、被成一圓御敎書之處、新田大

新田大島義政

島讃岐前司義政、去年十月十一日以御書拜領之上者、所詮中分彼所、沙汰付半分下地於當山雜掌、可執進請取之狀、依仰執達如件、

正平七年閏二月十六日　　前遠江守（南宗繼）（花押）

宇都宮下野守（氏綱）殿

（註）本年十二月十六日條參照。

十月二十四日　吉野朝廷、尊氏・義詮ノ降ヲ許シ、且、之ニ直義追討ヲ命ジ給フ。尋デ、十一月四日、尊氏、京都ヲ發ス。七日、京廷ノ主崇光院、廢セラレ給フ。九日、尊氏、始メテ其ノ教書ニ正平ノ號ヲ用フ。

〔園太曆〕〔其他〕

十一月十五日　直義、北陸道ヲ經テ、是日、鎌倉ニ入ル。

〔鶴岡社務記錄〕〔其他〕

十一月是月　新田江田行義、丹波官軍ノ將トシテ、兵粮以下ノ公事ヲ庄保ニ課ス。仁和寺、法金剛院領丹波主殿保ニ於ケル右課役ヲ停止セラレン事ヲ吉野朝廷ニ請フ。

〔仁和寺文書〕（七、山城）　（六、一五、六二六、

新田江田行義

仁和寺法金剛院領丹波國主殿保事

右當寺者、爲待賢門院御願、朝庭奉祈之伽藍也、當保者爲佛聖燈油僧食料所、重色異于他之地也、而新田江田（行義）殿爲當國大將軍、被分宛兵粮於所々、被懸催公事於庄保之間、近（今カ）明可被入御使於當保之由有其聞、然者寺院之佗傺、保民之牢籠、歎而有餘者也、所詮凡於寺社領者可被止兵粮以下煩之旨、被載吉野殿御事書之由所承及也、其上可致御祈禱之由、去正平三年被成下綸旨於當院之上者、早不可成當保之違亂由被成下令旨、全寺用彌爲抽御祈禱之忠勤、事書如件、

正平六年十一月日

（註）本年九月七日條參照。正平八年十月十七日條參照。

十二月十三日　尊氏、駿河ニ下向シ、是日、由比山（藍埜）ニ陣ス。直義軍、之ヲ攻ム。〔伊達文書〕〔參考太平記〕〔其他〕

十二月十六日　上野ノ山上公秀・香林直秀等ノ一族、新田大島義政ヲ擁シテ尊氏ニ應ジ、直義黨長尾氏ト同國淵名莊木島ニ戰ヒテ敗走ス。尋デ、十九日、芳賀伊賀守ニ屬シテ、桃井直常・長尾氏ノ軍ト同國那波莊ニ戰ヒテ勝ツ。

〔赤堀文書〕（明年閏二月二十日ノ條ニ收ム）

〔參考太平記〕卷第三十　薩埵山合戰附尊氏兄弟重和睦事　（前略）

尊氏薩埵山ニ陣ヲ取ル

將軍已ニ駿河國ニ著給ヒケレトモ、遠江ヨリ東、東國北國ノ勢トモ、早悉高倉殿ヘ馳著テケレハ、將軍ヘハ墓々シキ勢モ參ラス、角テ左右ナク鎌倉ヘ寄ン事叶カタシ、先姑ク要害ニ陣ヲ取テコソ、勢ヲモ催サメトテ、十一月（金勝院本作二十月一、或作二十二月一、非也、）晦日、駿河薩埵山ニ打上リ、東北ニ陣ヲ張給フ、（中略）去程ニ將軍已ニ薩埵山ニ陣ヲ取テ、宇都宮カ馳參ルヲ待給フ由聞ヘケレハ、高倉殿、先宇都宮ヘ討手ヲ下サデハ難儀ナルヘシトテ、桃井播磨守直常ニ長尾左衛門尉（左、毛利家本作レ右、西源院本或作二新左衛門一、前後不レ一、）幷ニ北陸道七箇國ノ勢ヲ附テ、一萬餘騎上野國ヘ差向ラル、高倉禪門モ同日ニ鎌倉ヲ立テ、薩埵山ヘ向ヒ給フ、（中略）宇都宮ハ（北條家、金勝院、西源院、南都本、有二伊豫守字一、天正本、作二宇都宮伊豫守氏綱一、按、公綱子也、）藥師寺次郎左衛門入道元可カ（俗名公儀、）勸ニ依テ、（天正本云、元可高野山ヨリ出テ、日比ノ譬憤ヲ散センリメニ、宇都宮ヲ勸ケル、云々、）

宇都宮勢

兼テヨリ將軍ニ志ヲ存シケレハ、武藏守師直カ一族ニ、三戸七郎ト云者、其邊ニ忍ヒテ居タリケルヲ大將ニ取立テ、薩埵山ノ後攻ヲセントト企ケル處ニ、上野國ノ（天正本、作二上總一、非也、）住人、大胡山上ノ一族共、人ニ先ヲセラレシトヤ思ヒケン、新田ノ大島ヲ大將ニ取立テ、五百餘騎薩埵山ノ後攻ノ爲トテ、笠懸ノ原ヘ打出タリ、長尾孫六、同平三、三百餘騎ニテ（三百、今川家本作レ百、毛利家本作二六百一、）上野國警固ノ爲ニ、兼テヨリ世良田ニ居タリケルカ、是ヲ聞トヒトシク、笠懸原ヘ打寄、敵ニ一矢ヲモ射サセス、拔連テ懸立ケル程ニ、大島カ五百餘騎、十方ニ驅散サレ、行方モ知スナリニケリ、宇都宮是ヲ聞テ、此人々惣ナル事仕出シテ、敵ニ氣ヲ著ツル事ヨト、興醒テ思ヒケレトモ、其ニ依ヘカラスト機ヲ取直シテ、（天正本云、宇都宮手勢七百餘騎ヲ引率ス、云々、）十二月（今川家、毛利家本、作二十一月一、非也、）十五日宇都宮ヲ立テ、薩埵山ヘソ急ケル、相伴フ勢ニハ、氏家太宰少貳周綱、同下總守、同三河守、同備中守（毛利家本不レ出、）同遠江守、芳賀伊賀守貞經（今川家本作二貞綱一、毛利家、金勝院、西源院、天正本、並作二貞綱一、第三十四卷、第三十九卷、本文或作二公綱一或高貞一、諸本亦前後錯雜、同隨レ所レ出、并註二異同一、未レ知二孰是一、）同肥後守（金勝院本作二肥前守一、）紀黨ニハ猿子出雲守、藥師寺次郎左衛門入道元可、舍弟修理進義夏（天正本作二義貞一、）同勘解由左衛門義春、同掃部助助義、武藏國住人猪股兵庫入道、安保信濃守、岡部新左衛門入道、子息出羽守（北條家、金勝院、南都本、作二出雲守一、）都合其勢千五百騎、（天正本作二一千餘騎一、）十六日午刻ニ、下野國天命宿ニ打出タリ、此日佐野佐貫ノ（西源院本作二奈日一、）一族等、五百餘騎ニテ馳加リケル間、兵皆勇進ミテ、夜明ハ桃井カ勢ニハ目モ懸ス、打連テ薩埵山ヘ懸ラント評定シケル處ニ、大將ニ取立タル三戸七郎、俄ニ狂氣ニ成テ、自害ヲシテ死ニケリ、是ヲ見テ門出惡シトヤ思ヒケン、道ニテ馳著ツル勢共、一騎モ殘ラス落失テ、始宇都宮ニテ一味同心セシ勢許ニ成ケレハ、僅ニ七百騎ニモ足サリケリ、角テハ如何有ント、諸人色ヲ

正平六年（觀應二年）

藥師寺入道

失ケルヲ、藥師寺入道、姑ク思案シテ、吉凶ハ糾ヘル繩ノ如シトイヘリ、是ハ何樣宇都宮大明神、大將ヲ氏子ニ授給ハン爲ニ、懸ル事ハ出來ル者ナリ、姑クモ御逗留有ヘカラスト申ケレハ、諸人實モト氣ヲ直シテ、路ニ少ノ滯モナク、引懸引懸打程ニ、同十九日午刻ニ、利根河ヲ打渡テ、那和庄ニ著ニケリ、爰ニテ跡ニ立タル馬煙ヲ、馳著御方カト見レハ、サハアラテ、桃井播磨守、長尾左衞門尉、一萬餘馳ニテ跡ニ附テ推寄タリ、宇都宮サラハ陣ヲ張テ戰ヘトテ、小溝ノ流レタルヲ前ニアテ、平々トシタル野中ニ、紀清兩黨七百餘騎ハ大手ニ向テ、北ノ端ニ控ヘタリ、氏家大宰少貳ハ、二百餘騎中ノ手ニ控ヘ、藥師寺入道元可（天正本有ニ父子字ノ）兄弟カ勢五百餘騎ハ、（五百、天正本作三百ノ）搦手ニ對シテ南ノ端ニ控ヘ、兩陣互ニ相待テ、半時許時ヲ移ス處ニ、桃井カ勢七千餘騎、鬨聲ヲ揚テ、宇都宮ニ打テ懸ル、長尾左衞門カ勢三千餘騎、魚鱗ニ連リテ、藥師寺ニ打テ懸ル、長尾孫六、同平三二人カ勢五百餘騎ハ、皆馬ヨリ飛下、徒立ニ成テ、射向ノ袖ヲ差カサシ、太刀長刀ノ鋒ヲ、ソロヘテ、閑々ト小跳シテ、氏家カ陣ヘ打テ懸ル、アクマテ廣キ平野ノ、馬ノ足ニ懸ル草木ノ一本モナキ所ニテ、敵御方一萬二千餘騎（金勝院本作ニ敵御方三千餘騎ノ）東ニ開ケ、西ニ靡ケテ、追ツ返ツ半時許戰フタルニ、長尾孫六カ下立タル一揆ノ勢（天正本云、下紺一揆、）五百餘人、縱横ニ懸惱マサレテ、一人モ殘ラス討レケレハ、

那和庄ニ著ク

桃井直常長尾某ト戰フ

桃井モ長尾左衞門モ、叶ハシトヤ思ヒケン、十方ニ分レテ落行ケリ、軍畢テ四五箇月ノ後迄モ、戰場二三里カ間ハ、草醒シテ血野原ニ洒キ、地堆クシテ、戸路徑ニ横レリ、（下略）

（註）十月十一日、明年閏二月二十日條參照。

十二月二十日　桂峰文昌、上野長樂寺住持トナル。

（禪刹住持籍）（上野州世良田山長樂寺歷代　廿二世桂峰諱文昌、桃溪悟、觀應二年辛卯十二月廿日入寺、歲六十六、）

十二月二十三日　官軍大館右馬亮等、尊氏黨厚東武直ト聯合シ、船隊ヲ率ヰテ、是日、及ビ明日、赤間關其他附近ノ港ヲ襲フ。細川清氏ノ部將下總親胤等、之ヲ拒グ。大館等、長門前田浦ニ退ク。尋デ二十七日、大館等、又、豐前清瀧村ヲ襲フ。

大館右馬亮厚東武直ト聯合シ赤間關ニ寄ス

（正閏史料）（二之三門司又右衞門家藏　△六、一六、五五、）

下總修理亮親胤申、去年（觀應二、）八月十一日御關著已來、度々軍忠條々、

一去年十月仁近所御敵依打弗（出カ）、同五日御向候間、差進子息左衞門藏人親長、同舍弟新三郎能親已下若黨等、同七日笠取原合戰仁致忠勤畢、

一御敵大館右馬助殿已下、河津已下凶徒等、令同心厚東駿河太郎（武直）、乘數十艘兵船、去

年十二月廿三四兩日、寄來當關竝領内浦々候(之カ)間及合戰、御敵船貳艘打留之畢、依之彼凶徒等長箇引退前田浦(郡豐浦)畢、

前田浦ニ退ク

一同廿七日夜、丑時、件凶徒等、親胤親類卿房在所清瀧村(郡企救)ニ寄來候而致合戰、御敵等被疵畢、

清瀧村ニ寄セ來ル

一今年(觀應三)正月十九日夜、同御敵等、重卿房宿所ニ寄來候而及散々合戰、卿房同子息彌三郎若黨等被疵畢、御敵重手負死人數輩、仍彼凶徒引退訖、

一同廿日、辰時、同御敵等寄來當關之間、自兩關(門司、赤間)取兵艘(船カ)椁浮海上合戰之間、凶徒等手負死人數輩、即引退小倉津畢、

赤間、門司ニ寄セ來リ海上合戰ス　小倉ニ退ク

一今月一日、同凶徒等小倉津息ニテ、當關大船壹艘椁之、同日申刻、罷通長箇庄候間、門司赤間兩關能中途海上ニ椁向兵船、御敵船五艘所乘凶徒數十人令誅伐畢、生虜數輩在之、新三郎自身手負、若黨等被疵畢、

海上合戰

以前條々軍忠次第如此、自本令在關役所、致忠功事、悉以被知食之上者、賜御證判爲備龜鏡、恐々言上如件、

觀應三年二月日　承之　判

此目安條々無相違之上、今日早々可注進之、仍狀如件、

觀應三年三月六日

厚東ハ當時尊氏黨ナリ

〔益田家什書〕(六、六、一五、六三二)

厚東駿河太郎武直以下凶徒誅伐事、急速令發向、可抽軍忠之狀如件、

觀應二年十二月三日　付紙ニ直冬判

(註)　大日本史料曰ク、本文書宛名ヲ闕ク、姑ク益田兼見ニ宛タルモノト認メラ揭書ス、ト。

〔厚東家譜〕(長門淨名寺文書所收)(六、六、一五、七四三)

十六代武直厚東長門守、觀應武辛卯十二月、足利公方ヨリ防長二ケ國ノ守護職ヲ賜ル、

〔長門國守護代記〕二十八厚東長門守武直、守護代備前守武通、觀應二年十二月廿日入府、

〔上利文書〕(長門)　十五代武村(略ス)―十六代武直(長州守)―十七代義武(觀應二年十一月ニ長州守護ヲ給ル、小守護代富永武通(觀應以下ノ注文ハ十六代武直ノ注文ナルベシ))

(註)　大日本史料ニ大館右馬亮ヲ直冬黨トナスハ誤リニシテ、尊氏黨厚東武直ト聯合セル官軍ナリ。本年八月二十二日條ニ直冬ノ感狀ヲ受ケタルハ尊氏ノ吉野ニ歸順セザル前ノ事ナリ。

正平六年(觀應二年)

〔萩藩閥閲錄〕七十一　小野貞右衛門　△六、一六、六一八、

於長門國、致忠節之由、厚東駿河太郎武直所注申也、尤以神妙、彌可抽戰功之狀如件、

觀應三年六月廿七日　義詮公御判

小野三郎左衛門尉殿

正平七年（觀應三年・文和元年）（五月二十七日改）壬辰（一三〇二）

正月五日　尊氏、直義ト和シ、鎌倉ニ入ル。

〔鶴岡社務記錄〕〔參考太平記〕〔其他〕

正月十七日　尊氏、上野長樂寺長老ノ使ヲ遣シテ候問セルヲ褒シ、且、祈禱セシム。

〔長樂寺文書〕

關東下向事、以專使示給之條尤神妙、彌可被致祈禱精誠之狀如件、

正平七年正月十七日　（花押）

世良田寺長老

正月十九日　官軍大館右馬亮等、再ビ豊前清瀧村ノ直冬黨ノ宿所ヲ襲フ。明日、又、赤間關ニ寄セ來リテ海上合戰ヲナシ、豊前小倉津ニ退ク。

門司關海上合戰

大館右馬助

尋デ二月一日、三度、門司・赤間關海上ニ戰ヒ、敗北ス。

〔正閏史料〕（去年十二月二十三日ノ條ニ收ム）

〔正閏史料〕△六、一六、五七、

豊前國門司關海上合戰時、致忠節候條尤神妙也、弥可抽軍功之狀如件、

觀應三年二月廿七日　判　細川清氏

下總修理亮殿

〔福山史料集〕（新田氏研究二〇〇頁）

豊前國門司海上合戰並小倉津合戰時、致忠節之由、聞食之條、尤神妙者、宮將軍令旨如此、悉之以狀、

正平七年三月六日　左中將

大館右馬助殿

正月二十日　尊氏、先ニ新田大島義政ニ與ヘシ上野淵名莊ヲ伊豆走湯山ニ寄セテ造營料所ニ充テシム。（古文書）（去年十月十一日ノ條ニ收ム）

二月七日　足利義詮、石原兵衛三郎ニ令シテ、丹波守護ニ屬シテ敵徒ヲ擊タシム。

丹波國囚徒ハ江田行義カ或ハ千種ナルベシ

〔河本文書〕（備前）　△、六、一六、七三、

丹波國囚徒對治事、所被仰守護人也、早發向彼在所、可致軍忠之狀如件、

正平七年二月七日　（義詮）（花押）

石原兵衛三郎殿

（註）去年十一月是月、本年閏二月十五日條參照。

二月十五日　尊氏、新田莊八木沼郷三分一ノ地ヲ長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕（貞治四年七月五日、明德三年八月十一日條ニ收ム）

二月二十六日　直義、鎌倉ニ死ス。（鶴岡社務記錄）（園太曆）（其他）

二月二十九日　越後官軍中院某、是日、村山信義等ヲ率ヰテ尊氏黨池氏ヲ擊ツ。尋デ、翌月九日、式部卿親王（宗良カ）、之ヲ褒シ給フ。

又、是ヨリ先、北畠顯信、奥州ノ尊氏黨ヲ伐タント謀ル。因テ尊氏黨吉良貞家、顯信ヲ攻メントシ、是日、相馬親胤ヲ招ク。公武合體破レントス。

〔村山文書〕（羽前）（中院侍從）（花押）　△、六、一六、一五二、

一見了

村山右京亮信義軍忠事、

式部卿親王

吉野合躰

右去月廿九日、爲囚徒池一族等御退治、中院殿當府（越後國府、頸城郡ニアリ、）御發向之間、相催信義一族等、寂前馳參御方、致忠節、令宿直警固上者、下賜御證判、向後爲施弓箭面目、恐々言上如件、

正平七年閏二月日　（中院）侍從（花押）

寂前參御方、致忠節之條、殊以神妙、弥可成其勇者式部卿親王令旨如此、悉之以狀、

正平七年閏二月九日　（中院）侍從（花押）

村山右京亮（信義）殿

（註）大日本史料曰、「式部卿親王ハ宗良親王ナラン、延元二年二月是月ノ條ニ見エタリ、」ト。興國三年三月是月、本年閏二月六日條參照。

〔相馬文書〕二　△、六、一六、一五五、

就吉野御合躰、野心之輩出來者、可加退治之由、自將軍家度々被仰下之間、令存知其旨了、爰顯信卿、於奥方爲對治御方人等、致合戰之上者、爲合力可押□□（下カ）□人等令□□□任□□□來□□所□□□□催一族不廻時日馳參名取郡、可□（抽カ）軍功之狀如件、（正平七年二月廿九日附、右京大夫（吉良貞家）ヨリ相馬出羽守（親胤）宛）

正平七年（觀應三年・文和元年）

二月是月　是ヨリ先、岩松義繼、豊前山田莊内ノ地ヲ筑前安樂寺ニ寄進ス。

〔西高辻文書〕三（筑前）　△六、一七、五八一、

（前略）

一豐前國一圓　（中略）

山田庄地頭職内貳拾餘丁岩松左近將監義繼寄進之、（中略）

右大略注進如件、

観應三年二月日寫之云々　　都維那大法師實會（後略）

岩松義繼

（註）右ハ筑前安樂寺所領注進ナリ。而シテ觀應三年二月ハ注進ノ年月ナリヤ、書寫ノ年月ナリヤ、詳ナラズ、今姑クコヽニ收ム。

閏二月六日　吉野朝廷、宗良親王ヲ征夷大將軍ニ任ジ給フ。

征夷大將軍

〔系圖纂要〕神皇四　宗良親王　正平七年壬二ノ六、補征夷大將軍、

〔李花集〕雜歌　遠國に久しく住侍て、今は都のてふりもわすれはてぬるのミならす、ひたすら弓馬ゆ道にのミたつさはり侍て、征夷將軍の宣旨なと給りしも、我なからふしきに覺侍ければ、歌よみ侍し次に、

征夷將軍

おもひきや、手もふれさり〜梓ゆミおきふしわか身なれんものとは

東夷を征すへき將軍の宣旨を下されて、東山東海のほとりに籌策をめくらし侍るひまに、（下文二十日條ニ收ム）

由良信阿

〔新葉和歌集〕十八雜歌下

あつまのかたに久〜く侍て、ひたすらものゝふの道にのミたつさはりつゝ、征東將軍の宣旨なと下され〜も、思ひの外なるやうに覺てよみ侍し、

中務卿宗良親王

おもひきや手もふれさり〜梓ゆミおきふ〜わか身なれんものとは

〔續本朝通鑑〕百三十八南朝後村上　二月、癸卯、南帝密遣由良信阿於東國、先至信濃、逢宗良親王、勅授征夷將軍、任上野守、兼中務卿、

（註）宗良親王、征夷大將軍ニ任ゼラレ給フ日、詳ナラズ、姑ク系圖纂要ニ從テ掲書ス。本年二月二十九日、閏二月二十日條參照。

（參考）

〔信濃宮傳〕（舞鶴）六年宮は越中國へ渡らせまし〜て、明る年のはる信濃へ歸らせ給ふ。（中略）正平四年上野國新田庄寺尾城を築きて宮を居參らせ、ける程に近國の

者共多く參りぬ、七年新田左兵衛佐義興、武藏守義宗、左衛門佐義治、大江田式部大輔氏經等と議し、義兵を起し大軍を率して宮を奉し武藏國に打出、足利尊氏と所々に戰ひける、一戰に味方打勝しかは、頓て鎌倉をも攻落して基氏を追出し、御方入替りける、義宗は尊氏を追打へしとて宮を大將軍になし奉り、信濃國碓氷峠にて大に戰ひしに、數萬の敵横はりて御方多く討れけり、御軍しきりに危かりしかは、宮をは義宗はかりて世良田修理進親季等に託し、士卒を添まいらせて信州諏訪へ送らせ奉り、義宗は越後國へ遁れて時を伺ひける、

閏二月十五日(1) 新田義宗・義興・脇屋義治等、尊氏誅伐ノ義兵ヲ上野ニ擧グ。是日、義興、上野長樂寺ニ兵士竝ニ衆庶ノ亂入狼藉スルヲ停ム。

〔長樂寺文書〕(四上野) 六、六、一六、一七二、

禁制

世良田長樂寺

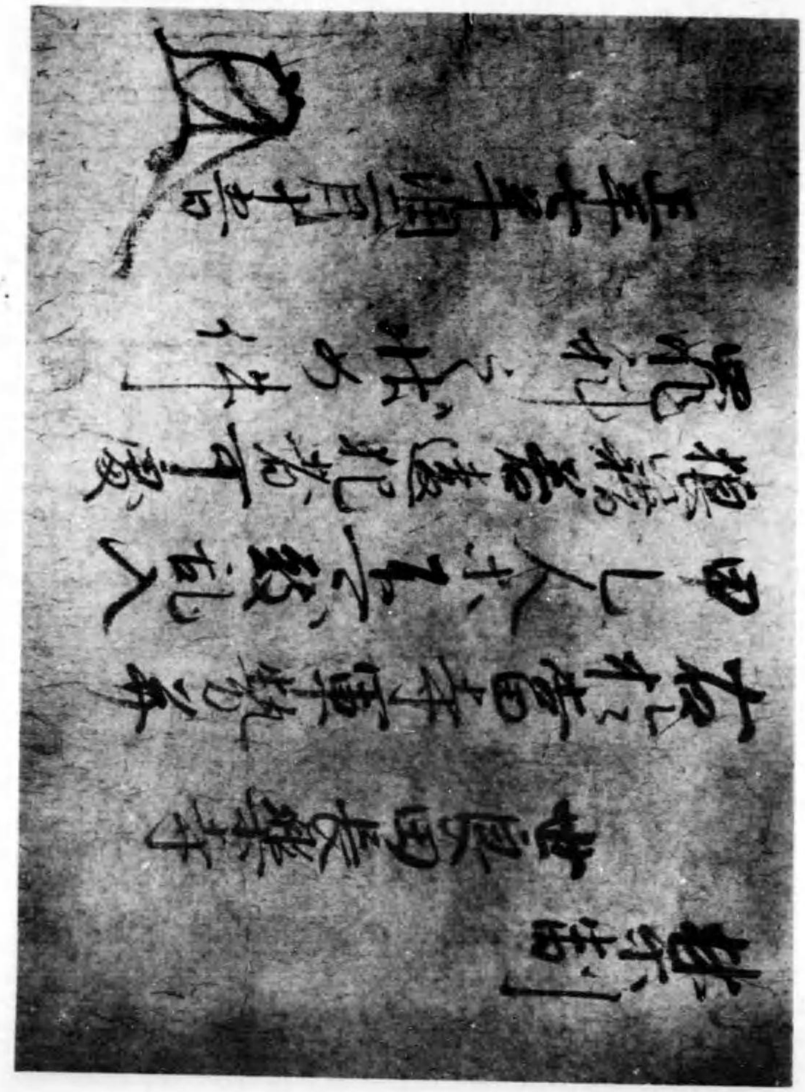
右於當寺、軍勢幷甲乙人等、不可致亂入狼藉、若違犯者、可處罪科之狀如件、

正平七年潤二月十五日　(新田義興)(花押)(54)

(註) 右義興花押ニツキテハ、大日本史料曰、本文書ノ花押詳ナラズ、姑ク義興トノ花押ニ擬ス

新田義興ノ花押

上野長楽寺蔵



六七　新田義興公禁制狀

藤州雜志曰、按ニ、公守花押ト相似タリト、駿河國田數ノ文書ニ、花押ノ文書ハ、義興ノ筆ニ似タリ

推定シテ掲書ス、ト。蓋シ本月二十日條ニ收ムル張州雜志抄ノ花押ト比較シテ、之ヲ義興ト斷ズルヲ妥當トスベシ。

〔園太曆〕(本月二十日ノ條ニ收ム)

閏二月十五日(2) 曾テ脇屋義治ト聯合セシ丹波ノ尊氏黨荻野朝忠、官軍千種顯經ニ逐ハル。

〔園太曆〕十八 閏二月十五日、天晴、抑武家(宰相中將)中將、齶陶、是丹波國守護(代脇カ)荻野(朝忠)被追落、事々增色、每事不可從綸旨、起軍之旨風聞、

十七日、天晴、丹波口、江州等、自住吉被向其勢之旨謳歌歟、魔緣—歟(可イ)爲謹可惶々々、義詮朝臣出立其勢充滿內野事(顯經カ)

廿日、千種少納言少將來、日來在丹波、已入京內野充滿、

(註) 本年二月七日條參照。

閏二月十六日(1) 尊氏、上野淵名莊ヲ大島義政ト走湯山トニ折半セシム。

〔古文書〕(去年十月十一日ノ條ニ收ム)

閏二月十六日(2) 尊氏黨和田茂實、越後黑川城ニ據リテ、直義黨上杉憲顯ノ軍ヲ拒グ。

〔色部文書〕(羽前) △六、一六、一八四、

上杉憲顕

三浦關又次郎入道覺圓申軍忠事、

右覺圓老躰之間、以子息等爲代官、爲當國越後、先守護上杉氏(民)部大夫憲顕余黨退治、今年閏二月十六日以來、屬惣領三浦和田下野權守茂實手、楯籠當國黒河城致軍忠畢、次同八月八日爲小國以下凶徒退治、茂實致發向同國濱中之時、子息孫五郎長義同令發向致軍忠畢、然早爲賜證判言上如件、(親應三年十一月廿九日附、某證判)

閏二月十六日(3)　尊氏、高麗經澄ノ勳功ヲ賞シテ、武藏高麗郡内ノ地頭職ヲ與フ。〔町田文書〕(武藏)(正平七年閏二月十六日附、尊氏袖判下文)

閏二月十九日　是ヨリ先、天皇、賀名生ヲ發シ、河内東條・天王寺ヲ經テ、是日、八幡ニ行幸アラセラル。〔園太曆〕〔其他〕

閏二月二十日(1)　官軍、京都ヲ攻ム。義詮、大敗シテ近江ニ走ル。〔園太曆〕〔其他〕

閏二月二十日(2)　是ヨリ先、十五日、新田義宗・義興・脇屋義治等、兵ヲ上野ニ起シ、十六日、國中ノ尊氏黨ヲ平ゲ、武藏ヲ略ス。信濃諏訪祝等、亦、兵ヲ起シテ鎌倉ニ向フ。宗良親王、之ガ總帥タリ。十七日、尊氏、鎌倉ヨリ武藏狩野川ニ落ツ。十八日、義宗等、鎌倉ニ入ル。十九日、義興等、武藏關戸ニ陣シ、尊氏、同國谷口(矢ノ口)ニ陣ス。是日、兩軍大イニ人見原・金井原ニ戰フ。新田軍、敗レテ、義興・義治等、鎌倉ニ還ル。

香林時秀

〔赤堀文書〕(春氏)(花押)　△六一六、五六四

上野國香林又太郎時秀子息小次郎直秀謹言上、

欲早淵名庄内香林郷、(佐位郡)下賜安堵御判間事、

同孫五郎俊秀　同太郎次郎秀時

同孫四郎秀長　同五郎太郎秀成

右、去年(觀應二)十二月十三日、屬山上十郎公秀馳參御方、同十六日、於上州淵名莊木島(佐位郡)合戰致忠節、同十九日、同國那波合戰、屬芳賀伊賀守致戰功、相州足柄伊豆後攻仕、鎌倉至御共令勤仕畢、今年閏二月十六日、新田兵衛(義興)佐殿、同武藏(義宗)殿自東西打出、燒拂國中之處、屬芳賀伊賀守、廿日、同廿八日、兩度後攻仕訖、加之下野國西明寺城、爲時秀代官孫四郎秀長罷向致軍忠畢、然則戰功異于他也、當知行上者、下賜安堵御判、彌爲致忠節、恐々言上如件、

山上公秀

木島合戰

那波合戰

新田義興

新田義宗

打出ヅ

西明寺城

觀應三年五月日

正平七年(觀應三年・文和元年)

〔李花集〕雜歌

東夷を征すへき將軍の宣旨を下されて、東山東海のほとりに籌策をめくらし侍ひまに、題をさくりて歌よミ侍とて、寄海祝を、

四方のうミのあかにもわきてしつかなれわかおさむへきうらのなみかせ

〔園太曆〕十八　閏二月廿五日、天晴、今日(中略)又聞、鎌倉大納言所勞危急、或已及大事云々、近日浮說任雅意歟、眞僞可尋、

廿六日、天陰、或曰、信濃諏方祝已下一國軍勢發向鎌倉之由、去十六日立彼國云々披露、實否如何、

廿八日、天陰、尊氏卿去十八日沒落之由、有其說之由准后(親房)語之、或又去十三日卒去云々、

(關東敗北事)三月一日、晴不定(除脫カ)、今日園三位基經(略)卿送使者云、(登カ)兼譽法印送狀、關東敗北事、妙法印宮(宗良親王)注進已下到來之間、今日持參八幡之由示之、所詮去十九日(七カ)尊氏卿沒落、大略不知行方、於武藏國、前守護代樂師寺一黨上椙一類等合戰、御方乘勝了、又奥州大軍已到常州云々者、

(新田注進事)四日、新田注進、後日見及之間續之、

尊氏所勞ノ風說

諏方祝兵ヲ擧ゲテ鎌倉ニ向フ

尊氏鎌倉ノ風說

尊氏沒落ノ說

十三日卒去ノ風說

宗良親王ノ注進到來

尊氏沒落官軍勝利

新田義宗ノ注進

注進、

今月十五日於上州揚義兵、同十六日、對治國中凶徒、同日、打越武州、打隨當國凶徒、同十八日、攻入鎌倉候之處、尊氏已下凶徒已沒落、楯籠武州狩野河(川カ)(神奈)候之間、今日(十九日)發向彼方仕候、決雌雄候者重可注進候、以此旨被加御詞、可有洩御披露候、義宗恐惶謹言、

閏二月十九日　　武藏守義宗

進上　御奉行所

基經(略)卿叔父覺譽法印狀送之、書寫續之、

先日乍物忩參拜、恐悅候、抑去月十八日(七カ)、關東凶徒等、沒落武州狩野川之城、官軍乘勝攻懸、大王(宗良親王)以(下脫カ)上州信州之堺白居塔下まて已出御候て、諸方大軍如雲霞、可決雌雄之條不可廻踵之間、新田者共注進昨日酉刻、到來、則申入八幡了、先度自大王被仰下之趣、悉以符合、不參差之條、返々目出畏入之外無他候、新田一族以下諸將、十五日立上州、對治國中興黨殘黨、打越武州及關東發向之間、尊氏以下不堪防禁(脫カ)逃落候云々、新田武藏守義宗ハ令警固關東奉待大王、義興(義宗舍兄)義治(脇屋)以下諸將ハ、立歸武州可平敵陣云々、次奥州國司(顯信カ)到著白川關、先懸勢宇津宮ニ相伴て

宗良親王ニ雄井峠ニ出デ給フ

新田十五日上州ヲ立ツ

義宗ヲ親王ニ奉ル

義興ヲ待チ

義治ニ武藏ニ赴ク

十五日義兵ヲ擧グ

十八日鎌倉ニ攻メ入ル

沒落武藏ニ

狩野川ニ據ル

義宗ヲ追フ

奥州國司白川ニ着クトノ説

一方發向、葉賀（芳賀）兵衛入道已討取之由、同載此注進候、旁以不違信州御廢立（敍意カ）無申計存候、次江州凶徒引退、已及沒落之企候云々、其謂候哉、只今餘取亂候間任筆候、重又可申入候也、恐惶謹言、

三月五日　覺譽

園殿

〔鶴岡社務記錄〕坤　閏二月十七日、將軍武州御發向、

〔町田文書〕（武藏）　△、六、一六、一九二、

（尊氏）（花押）

十七日尊氏武藏ニ退クト

二十日金井原合戰

二十八日高麗原合戰

著到

八文字一揆高麗四郎左衛門尉季澄軍忠事、

右去壬二月十七日、武州御發之（向脫カ）時令御共、同廿日、金井原御合戰之時、藥師寺加賀權守入道令同道、至散々大刀討了、同廿八日、於高麗原、抽戰功了、爲備後證、著到如件、

觀應三年五月日

高麗彥四郎經澄申軍忠事、

十七日

十九日谷口ノ陣

二十日人見原合戰

廿八日高麗原合戰

廿八日小手指原合戰

右去潤二月（正平七）十七日、將軍家御發向之間、自鎌倉令供奉訖、

一同十九日、自谷口御陣、屬于藥師寺加賀權守入道手、同廿日、於人見原致散々合戰、

通裏訖、此等次第、鬼窪彈正左衛門尉・澁江左衛門太郎、於同時合戰、令見知者也、（藥カ）

一同廿八日於高麗原、爲執事御手、於東手崎寂初合戰致戰、若黨原七郎手負（被架右股）之

條、此等次第岡部彈正左衛門尉、鬼窪左近將監、令見知候訖、仍軍忠次第如件、

正平七年三月日

（藥師寺加賀入道ナルベシ）承了（花押）

〔蠹簡集殘編〕（土佐）二　朝比奈永太郎藏　△、六、一六、一九三、（正平七年三月日附、松井彈正忠助宗軍忠狀、今川範國證判ノモノ、）

（同文同日附、武田信武證判ノモノ）（前略）

右去月十七日、將軍家武州御發向之間令供奉、屬于御手、同廿日、武州人見原合戰、同

廿八日、籠手指原合戰、至極致忠節訖、仍爲下賜御判、恐々言上如件、（下略）

〔蠹簡集殘編〕（土佐）二　朝比奈永太郎藏　△、六、一六、四二八、（くわんおう三年卯月七日附、松井助宗宛尊氏感狀）

〔黃薇古簡集〕（備前）一　△、六、一六、一九四、

波多野又次郎清秀申軍忠事、

右去閏二月十七日、鎌倉御（マヽ）第時御共仕、同廿日、於武州人見原合戰致軍忠條、逸見左

正平七年（觀應三年・文和元年）

近藏人、河口孫三郎令存知畢、然賜御證判爲備後證、恐々言上如件、（正平七年三月日附武田信成證判、）

〔古證文〕二　△六、一六、一九五、

三富彌四郎元胤申軍忠事、

一去年將軍家御下向之時海道供奉事、

一今年閏二月十七日、武州御下向之間御共仕、同廿日、金井原、同廿八日、小手指原兩度合戰仁致忠節事、

一今月八日、相模國御發向之間御共仕、同十五日、河村城御向之時致合戰事、右條々處御手柄忠勤之上者、早下賜御判、爲備後證、言上如件、

三月八日相模發向十五日河村城發向

觀應參年三月十六日　（畠山國清）（花押）

〔雲頂庵文書〕（乾相模）　△六、一六、一九五、

波多野小次郎景高代子息佐藤五經貞申軍忠事、

右、屬于侍所御手、去潤二月十七日、自鎌倉供奉仕、同廿八日、小手指原御合戰致忠節、今月十二日、自懐島御共仕之上者、賜下御判、爲備于後訴龜鏡、恐々言上如件、（次ノ行ニ年月日ヲ脱セリ、畠山國清シナラン、カノ證判、）

〔板橋文書〕（磐城）　△六、一五、一五二、（觀應三年三月日附朝夕新會彦太郎光久著到狀、欠氏抽判、）（前略）

右去觀應二年七月廿八日、自石山寺御出時、至于江□小野、大覺寺、醍醐、八相山、佐田山、伊豆國府御共仕□次於鎌倉者、去潤二月十七日武州御發向之間令御□人見原、入間河原御合戰之御共仕之條、無其隱之抽□勤上者、下賜御判、爲備末代龜鏡、恐々著到如件、（下略）

〔鶴岡社務記錄〕坤　閏二月廿日、新田鎌倉入、於武州金井原合戰、御方打勝了、御敵沒落云々、相模次郎號仁（北條時行）、鎌倉入、

〔鎌倉大日記〕　文和壬辰閏二月廿日、新田於武州金井原合戰、

〔張州雜志抄〕（三十古文書春日井郡水野村水野家藏古證書）　△六、一六二三七、

水野平太致秋申軍忠事、

右自寂前馳參御方、去月十九日、自武州鶴見宿（橘樹郡）地參關戸（南多摩郡）、同廿三日、三浦入御時令供奉、同廿八日、鎌倉合戰致軍忠畢、其後至平塚宿、令御供上者、賜御判、爲備後證、言上如件、

十九日義興鶴見ヨリ關戸ニ移ル　廿三日三浦ニ移ル　廿八日鎌倉合戰ニ平塚ニ移ル　廿日新田鎌倉入　相模次郎鎌倉入

正平七年三月三日　（新田義興ナルベシ）一見了（花押）(54)

正平七年（觀應三年・文和元年）

〔張州雜志抄〕三十

參御方致忠節之條、尤以神妙、彌勵戰功者、可抽賞之狀如件、

正平七年閏二月廿三日　（新田義興ナルベシ）（花押）同（前）

水野平太殿

〔毛利文書〕百四十九　他家證文　△、六、一六、二四〇、

（尊氏ナルベシ）御判

武州人見原合戰之時、引留致忠節之由、武田陸奥守（信武）所注申也、尤以神妙、彌可抽戰功之狀如件、（文和元年十二月廿二日附、金子平内左衞門尉宛）

御判

度々抽戰功云々、尤以神妙也、彌可致忠節之狀如件、

正平七年二月廿二日（圓殷カ）（宛名ヲ缺ク）

〔石川文書〕（甲斐）△、六、一六、二四一

（ヤヽ）田武又五郎入道々儀申軍忠事、

右、去閏二月廿日、於武州人見原合戰致于忠節畢、如此次第武田周防守、遙見掃部助

令見知候訖、然則給御判爲備後證、恐々言上如件、（觀應三年三月日附、武田信成證判）

〔松浦文書〕七　△、六、一六、二四三、

（尊氏）（花押）

去月廿日、武藏國金井原合戰之時、父治部左衞門尉討死云々、尤以神妙也、可抽賞之狀如件、（觀應三年三月廿日附、松浦太郎宛）

松浦治部左衞門尉秀事、武藏國金井原合戰之時討死訖、子息幼稚之間、不及參洛云々、恩賞事、以便宜之地可被致計沙汰也、（六月八日附、尊氏ヨリ一色範氏宛）

〔前田家藏書閲覽筆記〕四　水野系圖　△、六、一六、二四四、（觀應三年三月十二日附、尊氏ヨリ小河下野又二郎宛）

去月廿日合戰以後江（相カ）州供奉之條尤神妙也、彌可抽忠節之狀如件、

〔源威集〕（羽後）△、六、一八、二八五、　潤二月新田武衞義興（義貞男）武州江打出、國中ヲ靡由馳申間、即時ニ將軍御發向、基氏、（畠山國清、仁木兵部）賴章、（武田伊豆守仁木ノ誤）義長、平白篠兩一揆ノ輩奉相從戰士等數萬騎、閏二月廿日、武州於金井ノ原終日責戰、義興沒落ス、依之結城中務大輔直光其勢五百餘騎揚鞭ヲ馳參、自元諸大名賴雖被思食、依有思慮、于今不參處、直光最前ニ馳參之條、御感再三、（下文二十八日ノ條ニ收ム）

正平七年（觀應三年・文和元年）

義詮吉野ニ和陸ヲ奏聞ス　尊氏ヲ義貞ノ子供ニ追罰セシメン

〔參考太平記〕巻第三十　南朝興義詮佯御和睦附住吉松折井細川頼春討死事

足利宰相中將義詮朝臣ハ、將軍鎌倉ヘ下リ給ヒシ時、京都守護ノ爲ニ殘サレオハシケルカ、關東ノ合戰ノ左右ハイマタ聞ヘス、京都ハ以ノ外ニ無勢ナリ、角テハ如何樣、和田楠ニ寄ラレテ、云甲斐ナク京ヲ落サレヌト覺シケレハ、一旦事ヲ謀テ、姑ク洛中ヲ無爲ナラシメン爲ニ、吉野殿ヘ使者ヲ立テ、自今以後ハ、御治世ノ御事ト、國衙ノ郷保、幷ニ本家領家年來進止ノ地ニ於テハ、武家一向其イロヒヲ止ヘキニテ候、只承久以後、新補ノ卒法、幷ニ國々ノ守護職、地頭御家人ノ所帶ヲ、武家ノ成敗ニ許サレテ、君臣和睦ノ恩惠ヲ施サレ候ハ、武臣七德ノ干戈ヲ戢テ、聖主萬歳ノ寶祚ヲ仰奉ルヘシト、頻ニ奏聞ヲソ經ラレケル、（按ニ岡太曆、東寺長者補任ニ、此武家奏請者、觀應二年尊氏在レ京之時、尊氏既爲ニ此謀一而今言ニ義詮謀一者、非也、岡太曆出レ下、可ニ合見一）是ニ依テ諸卿僉議有テ、先ニ直義入道和睦ノ由ヲ申テ、言ノ下ニ變シヌ、是モ亦僞テ申條、仔細ナク覺レ共、謀ノ一途タレハ、先義詮カ申旨ニ任ラレ、帝都還幸ノ儀ヲ催シテ、後ニ義詮ヲハ、畿内近國ノ勢ヲ以テ對治シ、尊氏ヲハ義貞カ子供ニ仰附テ、追罰セラレンニ、何ノ仔細カ有ヘキトテ、御問答再往ニモ及ハス、御合體ノ事、仔細アラシトソ仰出サレケル、兩方互ニ僞給ヘル趣、誰カハ知ヘキナレハ、此間持明院殿方ニ拜趨セラレケル諸卿、皆賀名生殿ヘ參ラル、

公武合體破ル　義興義治義宗上野信濃ニ身ヲ匿シテ時ヲ待ツ　義詮信武藏ニ阿波ヲ良信ト向ハシ　勅使ニテ下ル兵ノ勅命

〔參考太平記〕巻第三十一　新田義宗已下起義兵事

吉野殿武家ニ御合體有ツル程コソ、都鄙暫ク靜ナリツレ、御合體忽ニ破レテ合戰ニ及シ後、畿内洛中ハ僅ニ王化ニ隨トイヘトモ、四夷八蠻ハ猶武威ニ屬スル者多カリケリ、是ニ依テ諸國七道ノ兵、彼ヲ討是ヲ從ヘント、互ニ威ヲ立ル間、合戰ノ止時モナシ、已ニ鬪諍堅固ニ成ヌレハ、是ナラストモ靜ナルマシキ理ナリ、元弘建武ノ後ヨリ、天下久シク亂テ一日モイマタ治ラス、心アルモ心ナキモ、如何ナル山ノ奥モガナト、身ノ隱家ヲ求ヌ方モナケレト、何クモ同ジ浮世ナレハ、嚴子陵カ釣臺モ、脚ヲ伸ルニ水冷ク、鄭太尉カ幽栖モ、薪ヲ擔フニ山嶮シ、如何ナル一業所感ニカ、懸ル亂世ニ生レ逢テ、或ハ餓鬼道ノ苦ヲ生ナカラ受、或ハ修羅道ノ奴ト死サル前ニ成ヌラント、歎カヌ人ハ無リケリ、此時故新田左中將義貞ノ次男、左兵衛佐義興、三男少將義宗、從父兄弟左衛門佐義治三人、武藏上野信濃越後ノ間ニ、在所ヲ定メス身ヲ匿シテ、時ヲ得ハ、義兵ヲ起サントテ企テ居タリケル處ヘ、吉野殿イマタ住吉ニ御座有シ時、由良新左衛門入道信阿ヲ（金勝院本第十八卷云、由良新左衛門、於ニ金崎城一戰死、第十八卷諸本又云、由良長資、死ニ於金崎一、然無ニ新左衛門字一、今出ニ子此一者、似ニ相違一、可ニ幷見一）勅使ニテ、南方ト義詮ト御合體ノ事ハ、暫時ノ智謀ナリト聞ユル處ナリ、仍テ節ニ迷ヒ時ヲ過スヘカラス、早ク義兵ヲ起シテ將軍ヲ追討シ、宸襟ヲ休メ奉

兵ヲ催ス

ルヘシトソ仰下サレケル、信阿急キ東國ニ下リテ、三人ノ人々ニ逢テ、事ノ仔細ヲ相觸ケル間、サラハ聽テ勢ヲ相催セトテ、廻文ヲ以テ東八箇國ヲ觸廻ルニ、同心ノ一族八百人ニ及ヘリ、中ニモ石堂四郎入道（四郎、毛利家本作ニ左馬頭ニ、按、俗名義房）、近年高倉殿ニ屬シテ、薩埵山ノ合戰ニ打負テ、甲斐ナキ命計ヲ助ラレ、鎌倉ニ在ケルカ、大將ニ憑タル高倉禪門ハ毒害セラレヌ、我トハ事ヲ起シ得ス、哀謀叛ヲ起ス人ノアレカシ、與力セント思ヒケル處ニ、新田左兵衛佐同少將ノ許ヨリ、内狀ヲ通シテ事ノ由ヲ知セタリケレハ、流レニ棹スト悅テ、聽テ同心シテケリ、又三浦介（按、名高通、三浦介高繼子、）葦名判官、二階堂

三浦高通
葦名判官
二階堂政元
小俣義弘

下野二郎（按、名政元、下野守時元子也、）小俣宮内少輔（異本或作ニ少輔二郎ニ、此下篠倉合戰段、本文作ニ小次郎ニ不レ一、按、名義弘、仲義子也、）高倉殿方ニテ、薩埵山合戰ニ打負シカハ、降人ニ成テ命ヲハ繼タレトモ、人ノ見ル處世ノ聞處、口惜キ者カナ、哀謀叛ヲ起サハヤト思ヒケル處ニ、新田武藏守、同佐衛門佐ノ（毛利家本作ニ義興ニ、）方ヨリ、憑ミ思フヨシヲ申タリケレハ、願フ處ノ幸カナト悅テ、則與力シテケリ、此人々密ニ扇谷ニ寄合テ評定シケルハ、新田ノ人々旗ヲ擧テ、上野國ニ起リ、武藏國ヘ打越ルト聞ヘハ、將軍ハ定テ鎌倉ニテヨモ待給ハシ、關戸入間河ノ邊ニ出合テソ防キ給ハンスラン、我等五六人カ勢、何トナク共、三千騎ハ（西源院本作ニ二三千騎ニ、）アランスラン、將軍戰場ニ打出給ハンスル時、態馬廻リニ控ヘテ、合戰已ニ半ナランスル最

戰ノ合圖

中、將軍ヲ眞中ニ取籠奉リ、一人モ殘ラス打取テ、後ニ御陣ヘハ參候ヘシト、新田ノ人々ノ方ヘ相圖ヲ堅ク定テ、石堂入道、三浦介、小俣、葦名ハ、ハタラカデ鎌倉ニコソ居タリケレ、諸方ノ相圖事定リケレハ、新田武藏守義宗、左兵衛佐義興、左衛門佐義治、（此上本文有ニ脫字ニ、今依ニ異本ニ補レ之、）閏二月八日（園太曆作ニ十五日ニ、）先手勢八百餘騎ニテ、西上野ニ打出ラル、是ヲ聞テ國々ヨリ馳參ケル、當家他門ノ人々、先一族ニハ、江田、大館、堀口、篠塚（今川家本作ニ松塚ニ、金勝院、西源院本作ニ藪塚ニ、）羽川、岩松、田中、青龍寺、小幡、大井田、一井、世良田、籠澤（毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、載ニ額田ニ、）外樣ニハ、宇都宮三河三郎（北條家、南都本、作ニ三河守ニ、）天野民部大輔政貞、三浦近江守、南木十郎、西本七郎（此上二人、金勝院本不レ出、）酒匂左衛門、小幡左衛門（左、毛利家、天正本、作レ有、金勝院、西源院本、不レ載、）中金、松田、河村、大森、葛山、勝代（金勝院本作ニ藤代ニ、）蓮沼、小磯、大磯、酒間、山下、鎌倉、玉繩（毛利家、金勝院、西源院本、作ニ出繩ニ非也、）梶原、四宮、三宮（北條家、南都本、作ニ三宮ニ、）南西（金勝院本作ニ袁西ニ、）高田（毛利家本作ニ高山ニ、）中村（北條家、南都本、載ニ鉈井ニ、）皃玉、丹黨ニハ、淺羽（毛利家本作ニ淺生ニ、金勝院本不レ出、）四方治、豐後守（今出川家、天正本、作ニ豐前守ニ、）同丹内左衛門、勅使河原丹七郎（七、金勝院本作レ六、）西黨、東黨、熊谷（金勝院本不レ出、）太田（西源院本作ニ太山ニ、）平山、私市（金勝院本不レ出、）村山、横山、猪俣黨、都合其勢十萬餘騎（十萬、毛利家本作ニ五萬ニ、）所々ニ火ヲ懸テ、武藏國ヘ打越ル、コレニ依テ武藏上野ヨリ、早馬ヲ打テ鎌倉ヘ急ヲ告ル事、櫛ノ齒ヲ引カ如シ、サテ敵ノ勢ハ何程有ソト問ヘハ、使者トモ皆二十萬騎

新田西上野ニ打出ツ

新田方ノ大軍武藏ニ入ル

足利方ノ戰評定

ニハ劣リ候ハシト答ケル、仁木細川ノ（西源院本作ニ畠山一）人々是ヲ聞テ、サテハユヽシキ大事ゴザンナレ、鎌倉中ノ勢千騎ニマサラジト覺ユルナリ、國々ノ軍勢ハ縱參ル共、今ノ用ニハ立カタシ、千騎ニ足ヌ御勢ヲ以テ、敵ノ二十萬騎ヲ防カン事ハ、叶ヘキ共覺候ハス、只先安房上總ヘ開セ給ヒテ、御勢ヲ附テ御合戰コソ候ハメト申サレケルヲ、將軍ツクツクト聞給ヒテ、軍ノ習落テ後利アル事、千ニ一ノ事ナリ、勢ヲ催サン爲ニ、安房上總ヘ落ナハ、武藏相摸上野（毛利家本作ニ上總一非也、）下野ノ者共ハ、縱尊氏ニ志アリ共、敵ニ隔ラレテ御方ニ成事アルヘカラス、又尊氏鎌倉ヲ落タリト聞カハ、諸國ニ敵ニ成者多カルヘシ、今度ニ於テハ縱小勢ナリトモ、鎌倉ヲ打出テ敵ヲ道ニ待テ、戰ヲ決センニハシカシトテ、十六日早旦ニ、將軍僅ニ五百餘騎ノ勢ヲ率シ、敵ノ行合ンスル所マテト、武藏國ヘ下リ給フ、鎌倉ヨリ追著奉ル人々ニハ、畠山上野介（北條家、西源院、南都本、作ニ上總介一、按ニ系圖及櫻雲記一、畠山上野介高國、觀應二年二月、於ニ奥州一討死、云々、觀應三年所謂上野介、未レ知ニ何人一）子息伊豆守、畠山左京大夫、舍弟尾張守義深（清義）舍弟大夫將監（清義）其次式部大輔（義熙、金勝院本不レ出、）仁木左京大夫、舍弟越後守、三男修理亮、岩松式部大夫、大島讃岐守、石堂左馬頭（異本或作ニ右馬頭一、赤混雜、蓋左馬助義基、）今川五郎入道、同式部大輔（今川家本作ニ民部大輔一、北條家、南都、天正本、作ニ上總介一、共言ニ心省子範氏一）田中三郎（天正本作ニ二郎一）大高伊豫守（按、閏二月二十日、義詮敗ニ走江州一之時、大高在レ京逃ニ于東坂本一、而聞ニ義詮在ニ四十九院一、乃往從焉、今出ニ于此一者可レ疑、第三十卷義詮江州落段、可ニ并見一）同土佐修理亮（同、毛利家、西源院、天正本、作レ高、金勝院本作ニ高土佐守同修理亮一、爲ニ兩人一）大平安藝守、同出羽守、宇津木平三（宇津木、毛利家、天正本、作ニ宇都宮一、金勝院本作ニ宇都宮木一、非也、）完戸安藝守、山城判官（山城、西源院本作ニ結城一）曾我兵庫助、梶原彈正忠（諸本第二十九卷小清水合戰段云、梶原彈正忠討死、今出ニ于此一者恐非也、天正本不レ載之、爲レ得、）二階堂丹後守（守、毛利家本作ニ三郎一）同三郎左衛門（金勝院、西源院本、無ニ）饗庭命鶴、和田筑前守（和田、毛利家、金勝院、西源院、天正本、作ニ和泉一）長井大膳大夫、同備前守、同治部少輔子息右近將監等ナリ、（右近、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作ニ左近一）元ヨリ隱謀有シカハ、石堂入道、三浦介、小俣宮內少輔、葦名判官、二階堂下野次郎、其勢三千餘騎ハ、他ノ勢ヲ交ヘス、將軍ノ御馬ノ前後ニ、透間モナクソ打タリケル、（金勝院本云、左近將監三千餘騎ハ、他ノ勢ヲマシヘス、將軍ノ馬ノ前後ニソ打タリケル、元ヨリ隱謀有シカハ、石堂入道、三浦介、小俣少輔四郎、葦名判官、二階堂下野次郎、彼等モ同相順ケルカ、殊更將軍ニ少モ離レス附添ケル、云々、）久米河ニ一日逗留シ給ヘハ、河越彈正少弼（西源院本載ニ新田、岩松、大島讃岐守一、按、大島、既載ニ于尊氏發ニ鎌倉一日後至之列一、而西源院本重複、）同上野介、同唐戸十郎左衛門（唐戸、異本或作ニ唐子一、西源院本載ニ佐竹一）江戸遠江守、同下野守（毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、載ニ同上野介一）同修理亮、高坂兵部大輔（天正本作ニ同下野守一、少輔一）同下總守、同掃部助、豐島彈正左衛門（豐島、毛利家本作ニ庶島一）同兵庫助、土屋備前守、同修理亮、同出雲守、同肥後守、土肥次郎兵衛入道、子息掃部助、舍弟甲斐守、同三郎左衛門、二宮但馬守、同伊豆守（毛利家本作ニ伊豫守一）同近江守（今川家本作ニ遠江守一、北條家、南都本、載ニ同三郎左衛門一）同河內守、曾我周防守、同三河守、同上野介、子息兵庫助（此上三人、金勝院本不レ出、）澁谷木工左衛門、同石見守、海老名四郎左衛門、子息信濃守、舍弟修理亮、小早川刑部大輔、同勘解由左衛門（澁谷石見守以下至レ此、金勝院本不レ出、）豐田因幡守（豐田、今川家、毛利家、金勝院、西源院、天正本、作ニ豐島一）狩野介（金勝院本不レ出、）那須遠江守、本間四

久米河ニ一日逗留

郎左衛門（本間、西源院本作ニ木間一）鹿島越前守（北條家、南都本、作ニ越後守一）島田備前守（島田、西源院本作ニ嶋田一）淨法寺右近大夫右、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作レ左、白鹽下總守、高山越前守（天正本作ニ越中守一）小林右馬助、瓦葺出雲守（西源院本作ニ出羽守一）見田常陸介（本間以下至レ此、金勝院本不レ載一）古尾谷民部大輔（古尾谷、金勝院本作ニ石尾一、西源院本作ニ古屋一、下倣レ之、）長峰石見守（長峯、今川家、天正本、作ニ長崎一）都合其勢八萬餘騎、將軍ノ御陣ヘ馳參ル、已ニ明日矢合ト定ラレタリケル夜、石堂四郎入道、三浦介ヲ呼ノケテ宣ヒケルハ、合戰已ニ明日ト定ラレタリ、此間相謀ツル事ヲ、子息ニテ候右馬頭ニ（此上作ニ左馬頭一、今又顯顯、天正本云、名義基、）曾テ知セ候ハヌ間、此者一定一人殘止テ、將軍ニ討レ進ラセント覺候、一家ノ中ヲ引分テ、義卒ニ與シ老年ノ頭ニ兜ヲ戴クモ、若望ミ達セハ、後榮ヲ子孫ニ殘サント存スル故ナリ、サレハ此事ヲ告知セテ、心得サセハヤト存スルハ、如何候ヘキト問給ヒケレハ、三浦ケニモ是程ノ事ヲ、告進ラセラレサランハ、後悔有ヘク覺候、急知セ進ラセ給ヘト申ケル間、石堂禪門、子息右馬頭ヲ呼テ、我薩埵山ノ合戰ニ打負テ、今降人ノ如クナレハ、仁木細川等ニ押スベラレテ、人數ナラヌ有樣、御邊モ定テ遺恨ニソ思フラン、明日ノ合戰ニ、三浦介輩名判官二階堂ノ人々ト引合テ、合戰ノ最中將軍ヲ討奉リ、家運ヲ一戰ノ間ニ開カント思フナリ、相構テ其旨ヲ心得テ、我旗ノ趣ニ從ハルヘシト云レケレハ、右馬頭大ニ氣色ヲ損シテ、弓矢ノ道貳心アルヲ以テ恥トス、人ノ事ハ知ス、

石堂義房義基父子

石堂三浦等新田トノ合圖ニ違フ

某ニ於テハ、將軍ニ深ク憑マレ進ラセタル身ニテ候ヘハ、後矢射テ名ヲ後代ニ失ハントハ、エコソ申マシケレ、兄弟父子ノ合戰、古ヨリ今ニ至マテナキ事ニテ候ハス、何樣三浦介輩名判官隱謀ノ事ヲ、將軍ニ告申サスハ、大ナル不忠ナルヘシ、父子ノ恩義已ニ絶候ヌル上ハ、今生ノ見參ハ、是ヲ限ト思召候ヘト、顏ヲ赤メ腹ヲ立テ、將軍ノ御陣ヘソ參ラレケル、父ノ禪門大ニ興ヲ醒シテ、急キ三浦カ許ニ行テ、（天正本云、石堂三浦ヲ呼寄テ云々、）父ノ子ヲ思フ如ク、子ハ父ヲ思ハヌ者ニテ候ケリ、此事右馬頭ニ知セス、敵ノ中ニ殘テ、討レモヤセンスラント思フ悲サニ、告知セテ候ヘハ、以ノ外ニ氣色ヲ損シテ、此事將軍ニ告申サテハ、叶フマシキトテ歸候ツルハ、如何此者カ氣色ヨモ告申サヌ事ハ候ハジ、如何樣嚮テ討手ヲ向ラレント覺候、イサヽセ給ヘ、今夜我等カ勢ヲ引分テ、關戸ヨリ武藏野ヘ廻テ、新田ノ人々ト一ニナリ、明日ノ合戰ヲ致候ハント宣ヒケレハ、多日ノ謀忽ニ顯レテ、却テ身ノ禍ニ成ヌト恐怖シテ、三浦輩名二階堂、手勢三千餘騎ヲ（天正本作ニ二千一、與レ前顯顯、）引分、寄手ノ勢ニ加ハラント、關戸ヲ廻テ落テ行、是ソハヤ將軍ノ御運盡サル所ナリ、

武藏野合戰事

三浦カ相圖相違シタルヲハ、新田武藏守夢ニモ知ス、時刻ヨク成ヌト急キ、明レハ

小手指原

閏二月二十日辰ノ時ニ、武藏野ノ小手差原ヘ打臨給フ、一方ノ大將ニハ、新田武藏守義宗五萬餘騎（五萬、金勝院、天正本、作ニ五百ト恐非也、）白旗中黑頭黑、團扇ノ旗ハ兒玉黨、坂東八平氏赤驗一揆ヲ五手ニ引分テ、五所ニ陣ヲソ取タリケル、一方ニハ新田左兵衛佐義興ヲ大將ニテ、其勢都合二萬餘騎（二萬、天正本作ニ二萬五千ト、）カタハミ鷹羽一文字、十五夜月弓一揆、引テハ一人モ歸ラシト、是モ五手ニ一揆シテ、四方六里ニ控ヘタリ、一方ニハ、脇屋左衛門佐義治ヲ大將ニテ二萬餘騎（二萬、西源院本作ニ三萬、天正本作ニ三萬五千ト、）大旗、小旗、下濃旗、鍬形一揆、母衣一揆、是モ五箇所ニ陣ヲ張、射手ヲハ左右ニ進マセテ、驅手ハ後ニ控ヘタリ、敵小手差原ニアリト聞ヘケレハ、將軍十萬餘騎ヲ（十萬、天正本作ニ二十萬ト、）五手ニ分テ、中道ヨリソ寄ラレケル、先陣ハ平一揆三萬餘騎、小手ノ袋（ヨノハカマ）四幅袴、旗笠驗ニ至ルマテ、一色ニ皆赤カリケレハ、殊更耀テソ見ヘタリケル、二陣ニハ白旗一揆二萬餘騎（二萬、天正本作ニ三萬ニ、下倣ヒ之、）白葦毛、白瓦毛、白佐目（天正本作ニ星白ト、）鵠毛ナル馬ニ乘テ、練貫ノ笠驗ニ（天正本作ニ白母衣ト、）白旗ヲ差タリケルカ（西源院本云、二陣ニハ八文字一揆二萬餘騎、練貫ノ笠驗ニ、八文字ヲ書タル白旗ヲ差タリ、云々、下同、）敵ニモ白旗アリト聞テ、俄ニ短クソ切タリケル、三陣ニハ花一揆、命鶴丸ヲ大將トシテ、六千餘騎（六千、天正本作ニ二千ト、）萠黃火威紫絲、卯花ノツマ取タル鎧ニ、薄紅ノ笠驗ヲツケ、梅花一枝折テ、兜ノ眞向ニサシタレハ、四方ノ嵐吹度ニ、鎧ノ袖ヤニホフラン、四陣ハ御所一揆トテ（御所、西源院本作ニ白旗ト、）三萬餘騎（三萬、天正本作ニ五萬ト、）

足利方ノ部署

新田方ノ部署

二引兩ノ（二、西源院本作レ一、非也、）旗ノ下ニ、將軍ヲ守護シ奉リテ、御內ノ長者國大名、閑ニ馬ヲ控ヘタリ、五陣ニ仁木左京大夫頼章、舍弟越後守義長、三男修理亮義氏（天正本作ニ頼勝ト、頼弾正少弼也、西源院本載ニ畠山上總介父子二人、同阿波守兄弟四人ト、）其勢三千餘騎、笠驗ヲモ著ス旗ヲモ差ス、遙ノ外ニ引ノケテ、馬ヨリ下テソ居タリケル、是ハ兩方大勢ノ合戰ナレハ、十度二十度懸合懸合戰ハンニ、敵モ御方モ、氣ヲ屈シ力疲レヌ事有ヘカラス、其時新手ニ代リテ、敵ノ大將ノ控ヘタランスル所ヲ見澄シテ、夜討ニセンカ爲ナリケリ、（金勝院本云、横合ニカ、ランカ爲ナリ、云々、）去程ニ新田足利兩家ノ軍勢二十萬騎、（天正本作ニ五十萬騎ト恐非也、）小手差原ニ打臨テ、敵三聲鬨ヲ作レハ、御方モ三度鬨ノ聲ヲ合ス、上ハ三十三天マテモ響キ、下ハ金輪際迄モ聞ユラント夥シ、先一番ニ新田左兵衛佐カ二萬餘騎ト（二萬、此上天正本作ニ二萬五千ト、今相飜歟、）平一揆（平一揆、天正本作ニ畠山上野介高國、毛利家本、）平上載ニ畠山高國、按ニ系圖及櫻雲記ニ畠山高國、親應二年二月、於ニ奥州ニ戰死、既註レ上、可ニ合見ト、）三萬餘騎ト懸合テ、（三萬、天正本作ニ二萬ト、）追ツ返ツ合ツ分レツ、半時許相戰テ、左右ヘ颯ト引退タレハ、兩方討ルヽ兵八百餘人、創ヲ被ル者ハイマタ計ルニ遑アラス、二番ニ脇屋左衛門佐カ二萬餘騎ト（二萬、此上西源院本作ニ三萬ト、今同ニ本文ニ相飜歟、天正本作ニ一千ト、赤非也、）白旗一揆二萬七千餘騎ト、（二萬七千、毛利家本作ニ二萬ト、爲レ得、本文此上作ニ二萬ト、今相飜歟）東西ヨリ相懸リニ懸テ、一所ニ颯ト入亂レ、火ヲ散シテ戰フニ、汗馬ノ馳違フ音、太刀ノ鐔音、天ニ光リ地ニ響ク、或ハ引組テ首ヲ取モアリ取ルヽモアリ、或弓手妻手ニ相附テ、切テ落スモアリ、

落サルヽモアリ、血ハ馬蹄ニ蹴懸ラレ、紅葉ニ洒ク雨ノ如ク、尸ハ野徑ニ横テ、尺寸ノ地モ餘サス、追靡ケ懸立ラレ、七八度カ程戰テ、東西ヘ颯ト別レタレハ、敵御方ニ討ルヽ者、又五百人ニ及ヘリ、（五百、金勝院、天正本、作二八百餘騎一）三番ニ饗庭命鶴、生年十八歳、容貌當代無雙ノ兒ナルカ、今日花一揆ノ大將ナレハ、殊更花ヲ折テ出立、花一揆六千餘騎カ眞前ニ驅出タリ、新田武藏守是ヲ見テ、花一揆ヲ散サン爲ニ、兒玉黨ヲ向ヘシ、團扇ノ旗ハ風ヲ含メル物ナリトテ、兒玉黨七千餘騎ヲ差向ラル、花一揆皆若武者ナレハ、思慮モナク敵ニ懸リテ、一戰戰フトソ見ヘシ、（天正本云、兒玉黨大將ノ嚴命ヲ請テ、何カハ勇サルヘキ、馬ノ足ヲ一所ニ定テ、シツシツト進トソ見ヘクリケル、花一揆是ヲ見テ、敵ニ中ヲ破ラレシト、七千餘騎ヲ引圍テ、鞭ヲ進メテソ合タリケル、云々、下同ニ本文ニ）兒玉黨七千餘騎ニ揉立ラレ、一返シモ返サスハツト引、自餘ノ一揆ハ、カクル時ハ一手ニ成テカヽリ、引時ハ左右ヘ颯ト別レテ、新手ヲ入替サスレハコソ、後陣ハ騷カテ懸違フタレ、是ハ其軍立甲斐ナクシテ、將軍ノ後ニ控ヘテオハスル陣ノ中ヘ、コホレ落テ引間、新手ハ是ニ蹴立ラレ進ミ得ス、敵ハ氣ニ乘テ、勝鬨ヲ作懸作懸、攻附テ追カクル、角テハ叶フマシ、些引退テ、一度ニ返セト云程コソ有ケレ、將軍ノ十萬餘騎、ヒタ引ニ引立テ曾テ後ヲ顧ス、新田武藏守義宗、旗ヨリ先ニ進テ、天下ノ爲ニハ朝敵ナリ、我爲ニハ親ノ敵ナリ、只今尊氏カ首ヲ取テ、軍門ニ曝サスンハ、何ノ時ヲカ期スヘキトテ、自餘ノ敵共ノ、南北ヘ

花一揆兒玉黨ニ敗ル

足利方ノ退却

義宗氏ヲ狙ヒ追フ

分レテ引ヲハ少モ目ニ懸ス、只二引兩ノ大旗ノ引ニ附テ、何クマテモト追懸給フ、引モ策ヲ舉、追モ逸足ヲ出セハ、小手差原ヨリ石濱マテ、坂東道已ニ四十六里ヲ（天正本作二五十餘里一）片時カ間ニソ追附タル、將軍石濱ヲ（天正本作二隅田川一）打渡給ヒケル時ハ、已ニ腹ヲ切ントテ、鎧ノ上帶切テ抛捨テ、高紐ヲ放サントシ給ヒケルヲ、近習ノ侍共二十餘騎（二十餘騎、西源院本作二二千一）返合テ、追カクル敵ノ河中マテ渡懸タルト、引組引組討死シケル其間ニ、將軍急ヲ遁レテ、向ノ岸ヘカケ上リ給フ、（天正本云、近習ノ者共二十餘騎、河中ニテ返合セ支ヘ戰ヒシ、其間ニ、將軍急ヲ逃レテ、石濱入道カ宿所ヘソ入ラセ給ケル、云々、）落行敵ハ三萬餘騎、追懸ル敵ハ五百餘騎、河ノ向ノ岸高クシテ、屏風ヲ立タル如クナルニ、數萬騎ノ敵返合セテ、此ヲ先途ト支タリ、日已ニ西ノサガリニ成テ、河ノ淵瀨モ見ヘサレハ、新田武藏守義宗、續テ渡スニ及ハス、跡ヨリ續ク御方ハナシ、安カラヌ者カナト、牙ヲ嚙テ本陣ヘト引返サル、又將軍ノ御運ノツヨキ所ナリ、新田左兵衛佐ト、脇屋左衛門佐トハ一所ニ成テ、白旗一揆カ二三萬騎、北ニ分レテ引ケルヲ、是ソ將軍ニテオハスラン、何クマテモ追追テ討ントテ、五十餘町迄追懸テ行處ニ、降參ノ者共カ馬ヨリ下、各對面シテ色代シケル程ニ、是ニ會釋セント、所々ニテ馬ヲ控ヘ會釋シ給ヒケル間、軍勢ハ皆北ヲ追テ東西ヘ隔リヌ、義興ト義治ト、僅三百餘騎ニ成テソオハシケル、（天正本無二三百餘騎字一）仁木左京大夫頼章、舍弟越後守義長ハ、（西源院本載二

石濱

僚氏危急ヲ免ル

義宗引返ス

義興義治

仁木細章新田軍ニ懸ル

正平七年（觀應三年・文和元年）

畠山ハ元來加樣ノ所ヲ伺テ、イマタ一戰モセス、馬ヲ休メテ、葦原ノ中ニ隱レテ居ラレタリケルカ、是ヲ見テ末々ノ源氏、國々ノ附勢ヲハ、何千騎討テモ何カセン、アハレ幸ヤ、天ノ與ヘタル所カナト悅テ、其勢三千餘騎、只一手ニ成テ推寄タリ、敵大勢ナレハ、定テ鶴翼ニ開テ、取籠ンスラント推量シテ、義興義治魚鱗ニ連テ、轡ヲナラヘテ、敵ノ中ヲ破ント見繕フ處ニ、仁木越後守義長是ヲ屹ト見テ、敵ノ馬ノ立樣軍立、尋常ノ葉武者ニアラス、小勢ナレハトテ、侮リテ中ヲ破ラルナ、一所ニ馬ヲ打寄テ、敵懸ル共懸合スナ、前後ニ常ニ目ヲ賦テ、大將ト覺シキ敵アラハ、組テ落テ首ヲトレ、葉武者カヽラハ射テ落セ、敵ニ力ヲ盡サセテ、御方少モ漂ハス、無勢ニ多勢勝スヤト、委細ニ方便ヲ成敗シテ、一所ニ勢ヲソ圍タル、按ニ違ハス義興義治、目ノ前ニ引ヘテ欺ク敵ニコラヘ兼テ、（此上本文、文義差違、今依二異本一改レ之、）三百餘騎ヲ（三百、天正本作ニ五百一、下倣レ之、）一手ニ成シ、敵ノ眞中ヲ懸破テ、蜘手十文字ニ懸立ント、喚テ懸リケレトモ、仁木越後守（西源院本載二畠山一、）些モ驀カズ、眞中ヲ破ラルナ、敵ニ氣ヲ盡サセヨト下知シテ、彌馬ヲ立寄、透間モナク控ヘタレハ、面ニアル兵計、互ニ討レテ颯ト引ケレ共、追テモ更ニ懸ラス、裏ヘ通リテ戰ヘトモ、面ハ些モ騷カス、東ヘ廻レ共西ハ閑ナリ、北ヘ廻レ共南ハ曾テ驀カス、懸寄レハ打違、組テ落レハ落重ル、千度百度懸レ共、强陣勢堅クシテ、大將退ク事ナ

義興義治東ニ向ツテ落ツ

義宗笛吹峠ニ退却

ケレハ、義興義治氣疲レテ、東ヲ差テ落テ行（金勝院本云、義長是ヲ見テ、餘スナ悉討取トテ追カケケルカ、單已無組ニ成ニケレハ、今ハ是迄ナリトテ引退、云々、）二十餘町落延テ、誰誰討レタルト計ルニ、三百餘騎有ツル兵共、百餘騎討レテ、二百餘騎ソ殘リケル、（北條家、南都本云、二百ニタラスナリニケル、云々、天正本云、五百餘騎有ツル兵、二百餘騎ニソナリニケル、云々、）義興兜ノシコロ、袖ノ三ノ板切落サレテ、（天正本云、兜ノシコロ鎧ル、云々、草摺三枚切落サル、云々、）小手ノ餘リ臑當ノハツレニ、薄手三所負レタリ、義治ハ太刀カケ草摺ノ横縫皆擂切レテ、威毛計續タルニ、鍬形兩方切折レ、星モ少々削ラレタリ、太刀ハ鐔本ヨリ打折ヌ、中間ニ持セタル長刀ヲ持レタリケルカ、ミネハサヽラノ子ノ如ク切ラレテ、及ハ鋸ノ樣ニソ折タリケル、馬ハ三所マテ切ラレタリケルカ、下テ乘替ニノリ給ヘハ、倒レテ蠕テ死ニケリ、兩大將如此、自戰テ創ヲ被ル上ハ、其已下ノ兵共、痛手ヲ負切創ノ二三箇所負ヌ者ハ希ナリ、新田武藏守、將軍ヲハ討漏シヌ、今日ハ日已ニ暮ヌレハ、勢ヲ集テ明日石濱ヘ寄ントテ（天正本云、石濱入道カ宿所ヘ寄ントテ、云々、）小手差原ヘ打歸ル、兵衞佐殿何クニカ控ヘ給ヒヌルト、行合フ兵共ニ問給ヘハ、兵衞佐殿ト脇屋殿トハ、一所ニ控ヘテ御渡リ候ツルカ、仁木殿ニ（西源院本載二畠山一、）打負テ、東ノ方ヘ落サセ給候ツルナリトソ答ケル、サテ雯ニ見ヘタル簿ハ敵カ御方カト問給ヘハ、此邊ニ御方ハ一騎モ候マシ、是ハ仁木殿兄弟ノ勢カ、白旗一揆ノ者共カ、燒タル簿ニテソ候ラン、（天正本云、是ハ仁木殿御兄弟、白旗一揆ノ者共カ燒タル簿火ニテ候、味方ハ一人モ候マシトソ答ケル、義宗是ヲ聞テ、角テハ

如何セント思按シ給フ處ニ御内ノ者トモ一同ニ申ケルハ、此下文異而意同ニ本文ニ　小勢ニテ此邊ニ御座候ハン事ハ、如何ト覺候ヘハ、夜ニ紛レテ、急キ笛吹峠ノ方ヘ打越サセ給ヒ候テ、越後信濃勢ヲ待調ヘラレ候テ、重テ御合戰候ヘカシト申ケレハ、武藏守暫思按シテ、ゲニモ此議然ヘシトテ、笛吹峠ハ何クソト、問々夜中ニ落給フ、

（註）右太平記ノ記述ハ古文書及古記錄等ト齟齬スル所多ケレドモ茲ニ揭グ。

〔賴印大僧正行狀繪詞〕第四卷　觀應三年二月二十日、新田義興朝臣叛反時、榛名ノ忠、尊官軍クリ　新座主忠尊同心合力隱ナキニヨリテ、カノ座主職ヲモチテ、治部卿法印賴智ニ、等持院將軍御判ヲ下サル、然テ本主サヽエ申ニヨリテ、イマニ延引スル所ニ、新座主父ニ先立テ、六月十二日頓滅、父ノ本座主快尊、同廿四日頓滅、

〔喜連川判鑑〕（基氏）壬辰三（觀應）閏二月十六日、義詮南帝ト御合體破レテ、新田ノ一族ニ足利追討ノ宣旨ヲ被下、新田義興義宗義治、武藏上野ニ起ル、武州金井原ニテ將軍新田ト合戰、同二十日於小手差原、妙法院宮幷信濃軍勢等ト合戰、乍兩度新田敗北、將軍ハ石濱御陣、同月二十三日、新田義興義治鎌倉ニ亂入、基氏軍敗レテ石濱ノ御陣ヘ御開キ新田兩將鎌倉ニ入替ル、

（註）義宗ノ事、興國元年八月二十日、興國二年五月二十九日條參照。義興ノ事、興國二年五月二十五日、興國五年十月二十六日、本月十五日條參照。義治ノ事、興國五年四月四日條參照。

金井原戰　小手差原戰

義興等安房ニ落チントスト云フ　鎌倉ヲ出ズ

閏二月二十三日　新田義興・義治・北條時行等、鎌倉ヲ出デヽ、三浦ニ赴ク。

〔名草清源寺文書〕

新田兵衞佐三浦介以下輩、可令沒落安房國之由有其聞、致用意可加治罰之旨、可令下知守護代之狀如件、

正平七年閏二月廿三日　（足利尊氏）（花押）

南遠江守殿

〔鶴岡社務記錄〕坤　閏二月廿二日、新田（義興）相模（北條時行）等鎌倉ヲ出、

〔張州雜志抄〕三十春日井郡水野村水野家藏古證書（二十日ノ條ニ收ム）古文書

（註）右兩書一ハ二十二日トシ、他ハ二十三日トシ、何レヲ是トモ、定メ難ケレドモ、茲ニハ水野家文書ニヨリテ二十三日ニ揭ク。

閏二月二十八日[1]　新田義宗、宗良親王ヲ奉ジテ、尊氏ト武藏小手指原・入間河原・高麗原ニ戰ヒ、終ニ敗北シテ越後ニ退ク。

〔新葉和歌集〕十八雜歌下

おなし比武藏國へうちこえてさし原といふ所に、おりゐて、手分なとし侍し時、いさゝあるへきよし、つはものともに、めしおほせ侍し次ゐ、おもひつゝけ侍し、

中務卿宗良親王

君のためのため世のためなにかおしからんすてゝかひあるいのちなりせは

〔李花集〕雜歌

宗良親王、義宗等ヲ勵シ給フ

戰場ゑ出侍し道すから、いさゝあるへき事なと、つゝもものともに仰ふくめ侍し次に、思ひつゝけ侍し（歌、新葉集ニ同ジ）

〔雲頂庵文書〕〔古證文〕〔蠹簡集殘編〕〔板橋文書〕〔町田文書〕〔赤堀文書〕

（何レモ二十日ノ條ニ收ム）

〔若菜系圖〕（播磨）　村重、若菜助三郎、河内守、母平岩氏女、苦力、文和元年閏二月廿八日、於武州若林合戰有戰功、

〔結城家之記〕　文和元年壬辰、閏三月廿八日、於武州苦林之合戰之時、直光抽諸軍馳參して初合戰得勝利、復將軍之本意、其時之忠賞にハ、房州一國、武州阿陀知郡、同私市庄、相州三浦内菊名郷、上總國三庄、其外所々有恩處不及記之、

苦林ノ戰

〔鏡阿寺文書〕

屬當手殊於致忠節之輩者、可有恩賞之狀如件、

正平七年閏二月廿六日　（足利尊氏）（花押）

南掃部助（宗良）殿

〔參考太平記〕卷第三十一　笛吹峠軍附義宗退越後義興義治籠河村城事

新田武藏守ハ、將軍ノ御運ニ退緩シテ、石濱ノ合戰本意ヲ達セサリシカハ、武藏國ヲ前ニナシ、越後信濃ヲ後ニ當テ、笛吹峠ニ陣ヲ取テソオハシケル、是ヲ聞テ打ヨル人々ニハ、大江田式部大輔、上杉民部大輔、子息兵庫助、中條入道、子息佐渡守、田中修理亮、堀口近江守（堀口、金勝院本作堀河、河、非也、近江、天正本作遠江）羽川越中守、荻野遠江守、酒勾左衞門四郎、屋澤八郎、風間信濃入道、舍弟村岡三郎（金勝院本無村岡字、作惡三郎）堀兵庫助（堀、西源院本作堀口）蒲屋美濃守、長尾右衞門（右、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、及第三十卷本文、作左）舍弟彈正忠、仁科兵庫守（助、北條家、西源院本、作頭）高梨越前守、大田瀧口、千屋左衞門大夫（千家、毛利家、金勝院、天正本、作千屋、西源院本作千脇）矢倉三郎、藤崎四郎（藤崎、天正本作藤澤）瓶尻（尾カ、ミカシリ）十郎（金勝院本載同源五）五十嵐文四、同文五、高橋大五郎、同大三郎、友野十郎（友野、西源院本、作伴野、下倣之）滋野八郎、禰津小二郎、舍弟修理亮、神家一族三十五人（今川家、毛利家、北條家、金勝院、南都、天正本、作三十二人、今出川家、西源院本、作三十一人）滋野一族三十一人（今出川家、今川家本、作三十一人、毛利家、金勝院、西源院本、作二十人、北條家、南都本、作三十餘人、滋野一族、天正本不レ出）都合其勢二萬餘騎、先朝（後醍醐帝）第二宮上野親王ヲ（按、宗良也、或稱信濃宮、或稱上野宮、爲征東將軍、出新葉集、下倣之、西源院本作五宮、天正本作六宮、皆非也、說見第一卷）奉ズ

義宗笛吹峠ニ陣ス、上杉憲顯

上野親王（宗良）ヲ奉ズ

正平七年（觀應三年・文和元年）

大將ニテ、笛吹峠ヘ打出ル、將軍小手差原ノ合戰ニ事故ナク、石濱ニオハスル由聞ヘケレハ、馳參リケル人々ニハ、千葉介、小山判官、小田少將、宇都宮伊豫守（金勝院本有ニ同字一可レ疑、）常陸大掾、佐竹右馬助（佐竹、西源院本作ニ左手一、）同刑部大輔、白川權少輔、結城判官、長沼判官（金勝院本不レ出、）河越彈正少弼（少弼、毛利家本作レ忠、）高坂刑部大輔、江戸、豐島（自ニ河越一至レ此、西源院本不レ出、）古尾谷兵部大輔（按、此上新田義宗起ニ義兵一段、作ニ民部大輔一、前後不レ一、未レ知ニ孰是一、）三田常陸介（西源院本不レ出、）土肥兵衛入道（今川家、毛利家、金勝院、西源院本、兵衛上有ニ次郎字一、北條家、南都本、作ニ次郎一、左衛門入道一、）土屋備前前司、同修理亮、同出雲守（天正本載ニ岡崎一、）下條小三郎二宮近江守（守、今川家本作ニ五郎一、）同河内守、同但馬守、同能登守（今川家、毛利家本、載ニ同伊豆守一、金勝院、西源院本、載ニ同伊豫守一、）曾我上野介、海老名四郎左衛門、本間（今川家本有ニ左衛門字一、）澁谷（西源院本有ニ右馬允字一、）曾我三河守、同周防守、同但馬守（金勝院、西源院本不レ出、）同石見守、石濱上野介、武田陸奥守、子息安藝守、同薩摩守、同彈正少弼、小笠原、坂西、一條三郎（北條家、南都本、作ニ二郎一、）板垣三郎左衛門、逸見美濃守、白洲上野介、天野三河守、同和泉守、狩野介、長峰勘解由左衛門（長峰、今川家本作ニ長崎一、第十卷諸本並載ニ長崎由井濱合戰一、而不レ知レ所レ終、可レ疑、）都合其勢八萬餘騎、將軍ノ御陣ヘ馳參ル、鎌倉ニハ、義興義治七千餘騎ニテ、著到ヲ附ルト聞ヘ、武藏ニハ、（異本作ニ笛吹一、時義宗在ニ笛吹一、）新田義宗（西源院本有ニ上野字一、）上杉民部大輔（毛利家、天正本云、名顯憲、北條家、南都本、作ニ義兼一、而此下南帝八幡御退失段、作ニ顯兼一、前後龜鑑、且皆非也、當レ作ニ憲顯一、註ニ于前一、）二萬餘騎ニテ控タリト聞ユ、何クヘ向ヘシト評定有ケルカ、（天正本云、尊氏暫思、按有テ宜ケル、下同ニ本文一、）先勢ノ勞セヌ前ニ、大敵ニ打勝ナハ、鎌倉ノ小勢ハ戰ハス共退散スヘシト、衆議一途ニ定テ、

石濱ノ足利軍

義興義治義宗、上杉憲顯

將軍閏二月二十五日（毛利家本作ニ三月二十八日一、非也、）石濱ヲ立テ武藏府ニ著給ヘハ、甲斐源氏武田陸奥守、同刑部大輔、子息修理亮（此下蓋衍文也、）武田上野介同甲斐前司、同安藝守、同彈正少弼、舍弟薩摩守、小笠原近江守、同三河守、舍弟越後守（今川家、毛利家、西源院本、作ニ越前守一、而此上自ニ小笠原一至レ此、金勝院本不レ出、）一條四郎、板垣四郎、逸見入道、同美濃守、舍弟下野守（今出川家本作ニ上野介一、）南部常陸介、下山十郎左衛門（自ニ藝武田上野介一至レ此、北條家、南都本不レ出、武田陸奥守、同安藝守、同彈正少弼、同薩摩守、逸見美濃守、及一條、板垣、小笠原、既出ニ于上段一、今重出、蓋衍文也、）都合二千餘騎ニテ將軍ノ御陣ヘ馳參ル、（自ニ甲斐源氏一至レ此、天正本不レ載、）

○北條家、南都本云、將軍閏二月二十五日ニ、石濱ヲ立テ武藏府ニ著給ヘハ、甲斐源氏武田陸奥守、同刑部大輔、子息修理亮ヲ始トシテ、都合其勢三千餘騎ニテ馳參ル、云々、

○天正本云、將軍石濱ヲ御立有テ、武藏國府ニ著給ヘハ、三方ヲ伺テ、イマタ何方ヘモ屬ヌ勢、路次ニテ馳加リ馳加リ、雲霞ノ如ク充滿タリ、云々、

同二十八日（毛利家本作ニ三月二十九日一、非也、）將軍笛吹峠ヘ推寄テ、敵ノ陣ヲ見給ヘハ、小松生茂テ前ニ小河流タル、山ノ南ヲ陣ニ取テ、峯ニハ錦御旗ヲ打立、麓ニハ白旗（毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、載ニ赤旗一、）中黑櫻棡葉梶葉ノ紋書タル旗共（梶、天正本作レ桐、）其數滿々タリ、先一番ニ新手案內者ナレハトテ、甲斐源氏三千餘騎ニテ推寄タリ、新田武藏守ト戰フ、是モ新手ノ越後勢、同三千餘騎ニテ相懸ニ懸リテ、半時許戰フニ、逸見入道以下、宗徒ノ甲斐源

尊氏武藏國府ニ著タ

尊氏笛吹峠ニ攻寄ス

氏百餘騎討レテ引退ク、二番ニ千葉介字都宮小山佐竹カ勢、相集テ七千餘騎、上杉民部大輔カ陣ヘ推寄テ、入亂入亂戰フニ、信濃勢二百餘騎討レケレハ、寄手モ三百餘騎討レテ、相引ニ左右ヘ颯ト引、引ケハ兩陣入替テ追ツ返ツ、其日午刻ヨリ酉刻終マテ、少モ休ム隙ナク、終日戰ヒ暮シテケリ、

○天正本云、千葉介字都宮小山佐竹七千餘騎、新手ニ成テ入替タリ、上杉民部大輔、滋野一族二千餘騎、颯ト入亂テ喚叫テ闘フタリ、何レモ共ニ勇士ニテ、互ニ名ヲ惜ミケル間、命ヲ限ト心サシ、追ツ返シツ、今朝巳刻ヨリ酉終ニ至迄、二十餘度ノソ攻闘ケル、將軍ハ大勢ニテ、入替入替攻入給ヘハ、笛吹峠ハ小勢ナリシカハ、信濃勢二百餘人、思々ニ討死ス、將軍方ニモ五百餘人手負討レテ引退、兩陣共ニ闘屈シテソ見ヘタリケル、云々、下同、

夫小勢ヲ以テ大敵ニ戰フハ、鳥雲ノ陣ニシクハナシ、鳥雲ノ陣ト申ハ、先後ニ山ヲアテ、左右ニ水ヲ界フテ、敵ヲ平野ニ見下シ、我勢ノ程ヲ敵ニ見セスシテ、虎賁狼卒替ル替ル、射手ヲ進メテ戰フ者ナリ、此陣幸ニ鳥雲ニ當レリ、待テ戰ハヽ利アルヘカリシヲ、武藏守若武者ナレハ、毎度廣ミニ懸出テ、大勢ニ取卷レケル間、百度戰千度懸破ルトイヘトモ、敵目ニ餘ル程ノ大勢ナレハ、新田上杉遂ニ打負テ、笛吹峠ヘ

義宗若武者ナリ

笛吹峠ニ引上ル

ソ引上リケル、上杉民部大輔カ兵ニ、長尾弾正、根津小次郎トテ、大力ノ剛者アリ、今日ノ合戰ニ打負ヌル事、身一ノ恥辱ナリト思ヒケレハ、紛レテ敵ノ陣ヘ馳入、將軍ヲ討奉ラントト相謀テ、二人ナカラ俄ニ二引兩ノ（西源院本作ニ一引兩ニ）笠驗ヲ著替、人ニ見知レシト、長尾ハ亂髪ヲ顔ヘ颯ト振懸、根津ハ刀ヲ以テ己カ額ヲツキ切テ、血ヲ面ニ流シカケ、切テ落シタリツル敵ノ首鋒ニ貫キ、トツ附ニ取著テ、只二騎將軍ノ陣ヘ馳入、

根津・長尾・欽氏ヲ狙フ

○北條家、南都本云、長尾ハ黑絲威ノ大アラメナル鎧ニ、同毛ノ鍬形ノ兜ノ緒ヲシメ、五尺八寸ノ太刀ニ、金作ノ太刀一振佩ソヘテ、六尺三寸ノ長刀ノ、タヒラ廣ニテ金蛭卷シタルヲ、馬ノ平頸ニ引添テ、鬼栗毛トテ、八寸二分アリケル名馬ノ太ク逞シキニ、金蒔繪ノ鞍敷テ、水色ノ厚總カケテ、十幅一丈ノ金紗ノ縄、山風ニ颯ト吹ナヒカセタリ、禰津小次郎ハ、フスベ革ノ鎧ニ同毛ノ兜著テ、七物山ノ如クニ取附テ、鹿毛ナル馬ニ、馬鎧カケテ、薄紅ノ大笠驗ニ、一丈アマリニ見ヘタルカナサイ棒、誠ニ輕ケニ提ケテ、分捕シタル敵ノ首、馬ノサンヅニ取附テ、只二騎將軍ノ陣ヘ懸入、云々、下同、本文、

數萬ノ軍勢道ニ横ハリテ、誰手ノ人ソト問ケレハ、是ハ將軍ノ御内ノ者ニテ候カ、

新田ノ一族ニ宗徒ノ人々ヲ組討ニ討テ候間、首實檢ノ爲ニ、將軍御前ヘ參候ナリ、開テ通サレ候ヘト、高ラカニ呼リテ、氣色バウテ打通レハ、目出タフ候ト感スル人ノミ有テ、思ヒトカムル人モナシ、將軍ハ何クニ御座候ヤラント問ヘハ、或人アレニ控ヘサセ給フテ候ナリト、指ヲ指テ教フ、馬ノ上ヨリノヒアカリ見ケレハ、相隔タル事草鹿（クサシ）ノ的（アツチ）山許ニ成ニケル、アハレ幸ヤ、タヽ一太刀ニ切テ落サンスル者ヲト、二人屹ト目動シテ、中々馬ヲ閑々ト歩マセケル處ニ、猶モ將軍ノ御運ヤ强カリケン、見知人有テ、ソコニ紛レテ近ツク武者ハ長尾彈正ト根津小次郎トニテ候ハ、近附テタハカラルナト呼リケレハ、將軍ニ近附奉ラセシト、武藏相摸ノ兵共三百餘騎（三百、北條家、南都本、作二四五百一）中ヲ隔テ左右ヨリ颯ト馳寄ル、根津ト長尾ト、支度相違シヌト思ヒケレハ、峰ニ貫キタル首ヲ拋テ、亂髮ヲ振揚、大勢ノ中ヲ破テ通ル、彼等二人カ鋒ニ廻ル敵、一人トシテ、兜ノ鉢ヲ胸板マテ、眞二ニ破著ラレ（天正本云、或ハ馬ノ平頸三頭打落サル、云々、）腰ノツカヒヲ切テ落サレヌハ無リケリ（北條家、南都本云、サレハ將軍ノ御馬廻二千餘騎ヲ、五六度懸破テ、東西ニ追靡ケ、南北ニ追立ル、云々、下同ニ本文一）サレ共敵ハ大勢ナリ、是等ハ只二騎ナリ、十方ヨリ矢衾ヲ作テ散々ニ射ケル間、叶ハシトヤ思ヒケン、アハレ運强キ足利殿ヤト、高ラカニ歎テ、閑々ト本陣ヘソ歸リケル、夜ニ入ケレハ兩陣共ニ引退テ、陣々ニ篝ヲ燒タルニ、將軍ノ御陣ヲ見渡セハ、四方五六里ニ及テ、銀漢高クスメル夜ニ、星ヲ列ルカ如クナリ、笛吹峠ヲ顧レハ、月ニ消行螢火ノ、山陰ニ殘ルニ異ナラス、義宗是ヲ見給ヒテ、終日ノ合戰ニ、兵許多討レヌトイヘトモ、是程マテ陣ノ透ヘシトハ覺ヌニ、篝ノ數ノ餘リニサヒシク見ユルハ、如何樣勢ノ落行ト覺ルソ、道々ニ關ヲ居ヨトテ、栽田山（ウヘタヤマ）ト信濃路ニ嚴ク關ヲ居ラレタリ、夫士卒將ヲ疑フ時ハ、戰利アラスト云事アリ、前ニハ大敵勝ニ乘テ、後ハ御方ノ國々ナレハ、今夜一定越後信濃ヘ引返サンスラント、我ヲ疑ハヌ軍勢有ヘカラス、船ヲ沈メ糧ヲ捨テ、二度歸ラシト云心ヲ示スハ、良將ノ謀ナリトテ、皆馬ノ鞍ヲオロシ鎧ヲ脫テ、引マシキ氣色ヲ人ニ見セヨトテ、大將鎧ヲ脫給ヘハ、士卒悉鞍ヲ卸シテ馬ヲ休ム、宵ノ程ハ皆心ヲ取靜メ居タリケルカ、夜半許ニ續松夥シク見ヘテ、將軍ヘ大勢ノツヽク勢見ヘケレハ、明日ノ戰モ叶ハシトヤ思ハレケン、上杉民部大輔、篝許ヲ燒棄テ信濃ヘ落ニケレハ、新田武藏守其曉越後ヘ落ラレケリ、（北條家、南都本云、義宗越後ノ國ヘ落給ヘハ、上杉ハ其曉信濃方ヘ落ラル、云々、（下文ハ三月二日ノ條ニ收ム））

上田山ト信濃路ニ關ヲ置ク

義宗越後ニ退ク

大井田氏經

（豐前豐津）小笠原家譜）一　ム、六、二六、七五五、

貞宗―政長　貞宗之嫡男也、母赤澤（大井田カ）伊豆守氏經之娘也、（中略）後光嚴院御宇、文和元年壬辰二月、新田武藏守義宗、陣於笛吹峠（上野越後國境）、尊氏卿發石濱、進兵攻之、政長及

諸將從之、

〔喜連川判鑑〕(基氏)　同二十八日、將軍石濱ヨリ進發アリ、於笛吹山(峠イ)義宗ト合戰、義宗敗北シテ、越後ヘ落ツ、義興義治モ鎌倉ヲ落テ、武州川村城ニ籠ル、

(註)　明年十一月八日條參照。

國府ヨリ鎌倉ニ向フ

閏二月二十八日(2)是ヨリ先、尊氏ノ將石塔義基、武藏國府ヨリ鎌倉ニ向フ。是日、新田義興・義治等、三浦高通・石塔義房等ト共ニ、南宗直・石塔義基ヲ攻メテ之ヲ破リ、三度、鎌倉ニ入ル。〔張州雜志抄〕(二十日條ニ收ム)

〔鶴岡社務記錄〕(坤)　閏二月廿八日、於赤橋邊、三浦(高通ナラン、)新田(義興)與高掃部助(南宗直)石堂左衛門(馬カ)助合戰、掃部助打負了、

〔佐藤文書〕(伊勢)　(一、六、二、六、三〇九、)

佐藤藏人元清申軍忠事、

右、今年(觀應三)閏二月廿五日、自武州國府御立、鎌倉御發向之間御共仕、同廿八日、對于新田兵衛助(佐)、三浦介、以下凶徒等御合戰之時、自岩屋堂前至于中下馬橋、致散々太刀打畢、次於毛和井(敷)攻返合太(大)將御合戰之時、令御共致軍忠條御見知之上者、給御判爲備後證、恐々言上如件、

義興義治小勢ニテ鎌倉ニ赴ク

觀應三年三月日　承了(石塔義基)(花押)

〔尊卑分脈〕(清和源氏石塔)　義房―少輔四郎、義基(左馬助、本ノ一元、義興父、令敵別兩陣合戰、)

〔源威集〕(羽後)(上文ハ二十日ノ條ニ收ム)　同廿八日、苦林ニテ合戰、凶徒沒落同前、然間武將鎌倉ニ御座ス、(中略)去年文和元二月ノ合戰、天下御大事ノ時分、諸大名是ヲ伺テ無音ノ處、直光馳參テ、廿八日合戰ニ致戰功、

〔參考太平記〕(卷第三十一)　鎌倉合戰事

新田左兵衛佐、脇屋左衛門佐二人ハ、纔ニ二百餘騎ニ打成レ、武藏守ニ離レヌ、御方ノ勢共ハ何地ヘカ引ヌラン、浪ニモ著ス磯ニモ離レタル心地シテ、皆馬ヨリ下居テ休マレケルカ、此勢ニテハ上野ヘモ歸リ得マジ、落テ行ヘキ方モナシ、打死スヘキ命ナレハ、鎌倉ヘ打入テ、足利左馬頭ニ(名基氏、按ニ國太曆、將軍三男基氏、號ニ鎌倉三郎、文和元年八月、任ニ左馬頭、然則是蓋追稱耳、)逢テ、命ヲ失ハヤト宣ヘハ、諸人皆此議ニ同シテ、一向討死セント心サシ、思思ノ母衣懸テ、鎌倉ヘトソ赴カレケル、

○天正本云、義興義治ハ一所ニ成テ、打漏サルヽ勢共ヲ引具シ、武藏守ニハ離給ヒヌ、味方ノ勢ハ皆落失ヌ、馬ヨリ下テ休給ヒケルカ、此勢ニテハ落テ行ヘキ方

正平七年(觀應三年・文和元年)

義興等石堂義房ト逢フ

モナシ、打死スヘキ命ヲ徒ニ捨ンヨリハ、鎌倉ヲ打落サンニ、合戰難儀ナラハ、ソコニテ尸ヲ曝セカシ、角テ此彼ニサマヨハン事ハ、本意ニ非スト宣ヒケレハ、義治モ相從フ兵共モ、然ヘシトソ同シケル、サレ共僅ノ勢ニテ鎌倉ヲ落サン事ハ、有カタケレハ、面々皆是ヲ最後ト覺ヘテ、不覺ノ涙ヲ鎧ノ袖ニソ洒ケル、大將二人モ流石心細クヤ思ハレケン、是程ニ成迄面面相伴フ志、今生一世ノ契ニアラス、冥途迄モ諸共ニ、脩羅闘諍ノ苦ヲ受ン事ハ、誠ニ謝シテモ餘リ有トテ、互ニ涙クミテソオハシケル、角テ夜明ナハ叶フマシトテ、ヒシヒシト打立、急キ鎌倉ノ合戰ヲ以テ、安否ヲ定ヘシトテ、既ニ關戸ヲ打過給ヒケル處ニ、勢ノ程五六千騎モ有ント覺シクテ、西ヲ指テソ下リケル、云々、下同ニ本文ニ

夜半過ル程ニ關戸ヲ過給ヒケルニ、勢ノ程五六千騎モ有ラント覺テ、西ヲ指テ下ル勢ニ行合給ヒテ、是ハ搦手ニ廻ル勢ニテソ有ラン、サテハ鎌倉マテモ行著スシテ、關戸ニテソ尸ヲハ曝スヘキニテ有ケリト、面々ニ思定メ、一處ニ馬ヲ懸寄セ、是ハ誰殿ノ勢ニテ御渡候ソト問レケレハ、是ハ石堂入道三浦介、新田殿ヘ御參候ナリトソ答ケル、義興義治手ヲ拍テ、コハイカニト悅給フ事限ナシ、只魯陽カ朽骨二度連テ、韓本文作ニ韓構ニ、非也、今改レ之、ト戰ヲ致セシ時、日ヲ三舍ニ返セシ悅モ、是ニハ過ジトソ覺

足利基氏ト南遠江守ト三浦ニ發向シテ歸ル

ケル、軈テ此勢ト打連レテ、神奈河ニ金勝院本作ニ龜川ニ著テ、鎌倉ノ樣ヲ問給ヘハ、鎌倉ニハ將軍ノ御子息、左馬頭基氏ヲ警固シ奉リ、南遠江守天正本作ニ高南掃部亮ニ下倣レ之、安房上總ノ勢三千餘騎ニテ、假莊坂巨福呂坂ヲ切塞テ、用心密ク見ヘ候シカ、昨日ノ朝、敵三浦ニ在トヒテ候ヨトソ語リケル、サテハ只今ノ合戰コサンナレ、爰ニテ軍ノ用意ヲセヨトテ、兵粮ヲツカヒ馬ニ糠本文誤作レ糟、今依ニ異本ニ改レ之、カハセテ、三千餘騎二手ニ分テ、鶴岡ヘ旗指少々差遣シテ、大御堂ノ上ヨリ眞下リニソ推寄タル、鎌倉勢ハ唯今三浦ヨリ打歸テ、イマタ馬ノ鞍ヲモオロサス、鎧ノ上帶ヲモ解ヌ程ナレハ、若宮小路ヘ打出テ、只一處ニ控ヘタリ、小俣小次郎ヲハ、今日ノ軍奉行ト、今朝ヨリ定ラレタリケレハ、手勢七十餘騎今川家本作ニ三十餘騎ニ、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作ニ七十三騎ニ、引勝テ、敵ノ群立テ控ヘタル中ヘツト懸入、火ヲ散テ切亂ス、三浦葦名二階堂ノ兵共、案内ハ知タリ、人馬ハイマタ疲レス、此ノ谷彼ノ小路ヨリ、トツト喚テハ懸入、颯ト懸破テハ裏ヘ拔、谷々小路小路ニ入亂テソ戰フタル、兵衞佐義興ハ、濱面ノ在家ノハツレニテ、敵三騎毛利家本作ニ二騎ニ切テ落シ、大勢ノ中ヲツト懸拔ケル處ニテ、小手ノ手覆ヲ切ナカサルハ太刀ニテ、手綱ノマカリヲツント切レテ、弓手ノ片手綱土ニサカリ、馬ノ足ニ蹈レケルヲ、太刀ヲハ左ノ脇ニ

新田勢鎌倉ヲ攻ム

義興ノ剛勇

正平七年（觀應三年・文和元年）

南遠江守基氏ヲ擁シテ落ツ

挾ミ（左、毛利家、北條家本、作レ右、）鎧ノ鼻ニ落サカリ、左右ノ手綱ヲ取合テ結ハレケルヲ、敵三騎能
際カナト馳寄テ、兜ノ鉢ト總角附トヲ、三打四打シタヽカニ切ケレ共、義興些モ騷
カス、閑ニ手綱ヲ結ヒテ、鞍坪ニ直リ給ヘハ、三騎ノ敵ハツト馬ヲ懸ノケテ、アハレ
大剛ノ武者ヤト、高聲ニ二聲三聲感シテ、御方ノ勢ニソ馳著タル、塔辻ノ合戰難儀
ナリト見ヘケレハ、脇屋左衞門佐ト、小俣少輔二郎ト一手ニ成テ、二百餘騎（二百、金勝院本作ニ三百、）喚テ懸ラレケルニ、南遠江守懸立ラレテ、旗ヲ卷テ引退ヲ見テ、谷々ニ戰ケル兵
共、十方ヘ落散ケル間、一所ニ打寄ル事叶ハスシテ、百騎二百騎、思思ニ落テ行、サレ
共三浦石堂カ兵共、餘ニ戰クタヒレテ、サシモ敵ヲ追サリケレハ、南遠江守ハ、今日
ノ合戰ニ打洩サレ、左馬頭ヲ具足シ奉リテ、石濱ヲ差テ落ラレケリ、新田左兵衞佐、
脇屋左衞門佐、二月十三日（二月、毛利家本作三月、非也、北條家、南都本、作二閏二月二十三日、爲レ得、十三日、今川家、毛利家、金勝院、西源院本、作二二十三日、按、本文上段云、閏二月二十日、武藏野合戰、然則本文脫レ字明矣、）鎌倉ノ軍ニ打勝テコソ、會稽ノ恥ヲ雪ルノミニ非ス、兩大將ト仰カレ
テ、暫八箇國ノ成敗ニ居ラレケリ、

〔喜連川判鑑〕（基氏（前條ニ收ム））

三月二日　新田義興・義治等、鎌倉ヲ出デヽ、相模河村城ニ據ル。〔張州雜志抄〕（去月二十日條ニ收ム）

尊氏ノ勢威振ヒ鎌倉ニ向フ

義興義治等鎌倉ヲ出デ河村城ニ據ル

〔鶴岡社務記錄〕（坤）　三月二日、三浦（高通）新田（義興）等鎌倉ヲ出、

〔參考太平記〕（卷第三十一（上文ハ去月二日(1)ノ條ニ收ム））　斯リシ後ハ、只今マテ新田上杉ニ附從ツ
ル武藏上野兵共モ、イマタ何方ヘモ附スシテ、一合戰ノ勝負ヲ伺見ツル上總下總
者共モ、我先ニト將軍ヘ馳參リケル程ニ、其勢程ナク百倍シテ、八十萬騎ニ成ニケ
リ、（八十、毛利家、北條家、南都本、作二五十一、）新田左兵衞佐義興、脇屋左衞門佐義治ハ、六千餘騎ニテ尙鎌倉ニ
オハシケルカ、將軍已ニ笛吹峠ノ合戰ニ打勝テ、八箇國ノ勢ヲ率シテ、鎌倉ヘ寄給
フ由聞ヘケレハ、義興モ義治モ、只此ニテ討死セント宣ヒケルヲ、松田河村ノ者共、
某等カ所領ノ内、模摸河ノ河上ニ、究竟ノ深山候ヘハ、只ソレヘ先引籠ラセ給ヒテ、
京都ノ御左右ヲモ聞召、越後信濃ノ大將達ヘモ牒シ合サレ候テ、天下ノ機ヲ得、諸
國ノ兵ヲ集テコソ、重テ合戰モ候ハメト、ヨリヨリ强テ申ケレハ、義興義治諸共ニ、
三月四日鎌倉ヲ引テ、石堂、小俣、二階堂、葦名判官、三浦介、松田、河村、酒勾以下、六千餘
騎ノ勢ヲ率シテ、國府津山ノ奥ニソ籠リケル、（國府津山、金勝院本作二小字都山一、西源院本作二古字津山一、）

〔喜連川判鑑〕（去月二十八日ノ條ニ收ム）

三月三日　朝廷、京廷ノ光嚴院・光明院・崇光院・直仁親王、尊胤法親王ヲ
京都ヨリ河内東條ニ遷シ給フ。〔園太曆〕〔其他〕

正平七年（觀應三年・文和元年）

三月十一日　上野長樂寺、寺領安堵ノ署判ヲ尊氏ニ請フ。尊氏、之ヲ與フ。

是日、尊氏、再ビ觀應ノ年號ヲ用フ。

〔長樂寺文書〕（足利尊氏）（花押）

新田庄世良田長樂寺領目錄

同庄内　女塚	開山檀那	新田次郎義季 法名榮勇	寛元四十二十五
同庄内小角郷内畠	二町一段	世良田彌次郎滿義	元德二卯月廿二（一カ）
同庄内小角郷内畠	二町五段	同	元德二十二
同庄小角田村内田	一町七段	在家一宇田畠九段 同	嘉應（曆カ）三六月一日 寄進
同庄小角田村内畠	一町八段	同	元亨三十七（十脫カ） 寄進
同庄内南女塚在家二宇		淨院	元亨二十二（一カ）廿日 寄進
同庄鳥山内在家一宇田	二町三段	比丘尼慈圓	并念空 永仁五六十一
同庄上江田在家一宇田	三町	淨院	建治三十二廿三 寄進
同庄世良田郷内田	一町四段 在家一宇	賴氏	康元二二十
那波郡善養寺庄内在家二宇田	四町三段半	由良孫三郎景長妻紀氏女	元德三七十三

右於彼所々賜安堵御判爲全知行恐々言上如件、

觀應三年三月十一日

（註）右ハ各其條アリ。

三月十二日　尊氏、鎌倉ニ入ル。

〔鶴岡社務記錄〕坤　三月十二日、將軍（尊氏）鎌倉入二階堂別當房、十四日、御所出仕、

〔喜連川判鑑〕基氏　四月八日（誤カ）、將軍鎌倉ヘ入御、

三月十五日(1)　官軍、京都ヨリ八幡ニ退キ、義詮、入京ス。尋デ二十一日、八幡攻擊ヲ開始ス。是ヨリ先、天皇、勅使ヲ東國ニ遣シ、新田義宗等ノ官軍ニ西上ヲ命ジ給フ。

〔園太曆〕〔祇園執行日記〕〔其他〕〔參考太平記〕卷第三十一（次條ニ收ム）

三月十五日(2)　尊氏ノ將畠山國清、新田義興・義治ヲ相模河村城ニ攻ム。尋デ、義興ハ所在ヲ匿シ、義治ハ越後ニ走ル。天皇、兒島高德ヲ勅使トシテ、義宗ニ上洛ヲ命ジ給フ。〔古證文〕ニ〔雲頂庵文書〕（乾相模）（去月二十日ノ條ニ收ム）

〔參考太平記〕卷第三十一　南帝八幡御退失附四條隆資卿討死并高德入道奉勅下向關東事（前略）今度僞テ京都ヲ攻ラレン爲ニ、先住吉天王寺ヘ行幸成タリシ時、兒

島三郎入道志純モ（西源院本作ニ忠繼ニ、下倣レ之、）召レテ參リタリケルヲ、是カ一大事ナレハ、急東國北國ニ下リテ、新田義貞カ姪子共ニ義兵ヲ興サセ、小山字都宮以下、便宜ノ大名ヲ語ヒテ、天下ノ大功ヲ、即時ニ致ス樣ニ、智謀ヲ運セト仰出サレケレハ、志純夜ヲ日ニ繼テ關東ヘ下リタレハ、東國ノ合戰早事散シテ、新田義興義治ハ、河村ノ城ニ楯籠リ、武藏守義宗ハ、越後國ニソ居タリケル、勅使東國北國ニ行向テ、君已ニ大敵ニ圍マレサセ給ヒテ、助ノ兵力疲ヌ、若神龍化シテ釣者ノ爲ニ捕ハレサセ給ヒナハ、天下誰爲ニカ爭ハント、義ノ重キニ依テ、命ヲ輕ンスヘキ習ヲ申ケレハ、小山五郎（今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作ニ四郎ニ）宇都宮少將入道モ、勅定ニ隨フナリトテ、東國靜謐ノ計略ヲ運スヘキ由約諾ス、義興義治ハ尙東國ニ逗リテ、將軍ト戰ヒ、新田武藏守義宗、桃井播磨守直常、上杉民部大輔、吉良三郎滿貞、石堂入道、東山東海北陸道ノ勢ヲ率シ、二手ニ成テ上洛シ、八幡ノ後攻ヲ致シテ、朝敵ヲ千里ノ外ニ退ヘシト、諸將ノ相圖ヲ定テ、勅使先立テソ上リケル、（下文ハ五月十一日ノ條ニ收ム）

〔參考太平記〕（卷第三十二）　直冬降ニ參吉野ニ事

翌年春（異本無ニ翌年春字ニ、爲レ得、按、翌年、文和三年也、尊氏上洛、文和二年也、）新田左兵衞佐義興、脇屋左衞門佐義治、俱ニ相摸河村城ヲ落テ、何クニ在トモ聞ヘサリシカハ、東國心安ク成テ、將軍尊氏卿上洛シ給ヘハ、（義治越後ヘ越テ、頸城郡ニ隱ル、）按ニ圖太曆ニ、無ニ尊氏上洛月日ニ、今按、文和二年九月也、而本文爲ニ文和三年事ニ、恐非也、東寺長者補任曰、文和二年九月二十一日、自ニ濃州ニ主上還幸、將軍自ニ東國ニ上洛、父子相共諸軍勢令ニ供奉ニ、治世如レ元、云々、圖太曆等諸說出レ下、可ニ合見ニ、京都又大勢ニ成ニケリ、サラハ驕テ山名ヲ攻ラルヘシトテ、宰相中將義詮朝臣ヲ、先播磨國ヘ下サル、

○今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本並云、新田義興ハ河村城ヲ落ヌ、脇屋義治ハ越後ヘ越テ、頸城郡ニ（西源院本作ニ津張郡蒲原ニ、今川家、北條家、南都、天正本、作ニ津張郡ニ、無ニ蒲原字ニ、按、越後無ニ津張郡ニ、既註ヲ第十卷新田義貞擧ニ義兵ニ段上、）隱レ居タリト聞ヘシ後ハ、東國靜謐シテ、畏ルヘキ方ナシトテ、尊氏上洛シ給ヘハ、（毛利家、天正本云、尊氏、九月十七日上洛、云々、按、文和二年九月也、）京都亦大勢ニナリテ、畿內山陰ノ敵トモ、恐ルヽニ足ラスト思ヘリ、サラハ山名ヲ攻ヘシトテ、義詮ヲ先播磨ヘ下サレ、四國中國勢ヲ催サル、云々、（下同ニ本文ニ、）

〔喜連川判鑑〕（尊氏）　壬辰三、三月五日、（誤カ）新田義宗（義興ノ誤カ）、義治川村ノ城沒落、

〔同〕（基氏）　同（三月）五日、（年月ニ誤アルベシ）川村ノ城沒落、

（註）本年五月三日、明年十一月八日條參照。

三月十七日　前上野長樂寺住持法輝、寂ス。

〔禪刹住持籍〕（山城）　上野州世良田山長樂寺歷代

十四世珪澗、諱法輝、（嗣見山寗、建武四年丁丑入寺、歲六十五、觀應三年壬辰三月十七日寂、正興庵、）

四月六日　前上野長樂寺住持了愚、寂ス。

〔禪刹住持籍〕（山城）　上野州世良田山長樂寺歷代

十三世、鈍翁了愚、（嗣月船、建武元甲戌入寺、歳六十二、同三年丙子退院、後住東福、貞和元年乙酉四月六日寂、壽七十三、）

凌霄山普門禪寺

二十世、道福門徒、鈍翁了愚、

〔扶桑五山記〕（五山城州慧日山東福禪寺）　△六、一六、四二二、　住持位次

廿一、鈍翁和尙、諱了愚、嗣月船、

〔五山傳〕△六、一六、四二二、　慧日山東福禪寺歷代住持籍位次

第廿一世、鈍翁、名了愚、觀應三年四月六日滅、塔正統院、

（註）了愚、康永三年聖一國師木像造立ニ助緣者ノ一人ナリシ事ハ建武二年六月十九日ノ條ニ收ム。了愚ノ示寂ノ日、貞和元年ト觀應三年ノ何レナルカ明カナラズ、姑ク本條ニ揭ク。

四月十三日　岩松頼宥、三吉覺辨ノ戰功ヲ幕府ニ注申ス。因テ、是日、義詮、覺辨ヲ褒ス。

〔福山志料〕（三十一附錄古文書）　△六、一六、四三八、

於備後國致忠節之由、頼宥（岩松）所注申也、尤以神妙、彌可抽戰功之狀如件、

觀應三年卯月十三日　（義詮）（花押）

三吉少納言（愛胤）房

五月三日　新田義興、水野致秋ニ上總須賀仟內細草郷ヲ安堵セシメ、尋デ、二十四日、其ノ勳功ノ賞トシテ、武藏花俣郷ヲ與フ。

〔張州雜志抄〕（三十古文書七春日井郡水野村水野家藏古證書）　△六、一六、四九二、

（新田義興ナルベシ）（花押）

義興花押

下　水野平太致秋（マヽ）領

上總國須賀仟內細草郷事、

右人且所宛行也、守先例可被知行之狀如件、

正平七年五月三日

〔張州雜志抄〕（三十古文書七春日井郡水野村水野家藏古證書）　△六、一六、五五九、

武藏國足立郡內花俣郷（秋山次郎跡）、爲勳功之賞所宛行也者、任先例可致沙汰之狀如件、

正平七年五月廿四日　（新田義興ナルベシ）源朝臣（花押）

水野平太（敦秋）殿

五月十一日　賊軍ノ八幡攻撃急ヲ加ヘ、官軍、守リ難シ。是夜、天皇八幡ノ行宮ヲ出御、賀名生ニ遷幸シ給フ。賊軍、之ヲ遮リ奉ルヤ、中黒ノ笠驗ヲ著ケタル怪兵（新田軍カ）天皇ヲ援ケ奉ルトノ記事見ユ。又、先ニ、西上救援ヲ命ゼラレタル新田義宗等、都ニ向ツテ進發セシモ、八幡陥落シテ、遂ニ間ニアハズ。〔園太暦〕十九　〔祇園執行日記〕〔其他〕

〔参考太平記〕巻第三十一　南帝八幡御退失附四條隆資卿討死并高德入道奉勅下向

関東事（前略）古津川ノ端ヲ西ニ傍テ、御馬ヲ早メラル、處ニ、備前松田（毛利家本云、松田備後守、）備後（今川家本作ニ備前一非也、）宮入道カ兵共、二三百騎ニテ取籠奉ル、（天正本云、備前國住人松田備中守、備後國住人宮入道道仙、五百餘騎ニテ取籠奉ル、）云々、十方ヨリ雨ノ降カ如ク射ル矢ナレハ、遁レ給フヘシ共見ヘサリケルカ、天地神明ノ御加護モ有ケルニヤ、御鎧ノ袖（天正本作ニ草摺一、胸板一、）カ、サリケル、法性寺左兵衛督、是迄モ尚離レ進ラセス、只一騎供奉シタリケルカ、跡ヨリ敵懸レハ、引返シテ追散シ、敵前ヲ遮レハ、懸破テ主上ヲ落シ進ラセケル處ニ、何クヨリ來ルトモ知ス、御方ノ兵百騎許、皆中黒ノ笠驗著テ、御馬ノ前後ニ候ケルカ、近附敵ヲ右往左往ニ追散シテ、カキ消様ニ失ニケレハ、主上ハ玉體恙ナクシテ、（西源院本云、其夜ノ明ボノニ、云々、）東條ヘ落サセ給ヒニケリ、

〔参考太平記〕巻第三十一　南帝八幡御退失附四條隆資卿討死并高德入道奉勅下向

関東事（前文ハ三月十五日ノ條ニ收ム）去程ニ新田武藏守義宗ハ、四月二十七日、越後津張ヨリ立テ七千餘騎、越中放生津ニ著ハ、桃井、播磨守直常、三千餘騎ニテ馳參ル、（三千、天正本作ニ二千一、）都合其勢一萬餘騎、九月十一日（按、五月八幡攻落、至ニ九月一何有ニ此事一、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作ニ五月一、誤レ得、）前陣已ニ能登國ヘ發向ス、吉良三郎、石堂モ、四月二十七日ニ駿河國ヲ立テ、路次ノ軍勢ヲ驅催シ、六千餘騎ヲ率シテ、（六千、天正本作ニ五千一、）五月十一日ニ、先陣已ニ美濃垂井赤坂ニ著シカハ、八幡ニカヲ勠セント、遠籌ヲソ燒タリケル、是ノミナラス信濃宮モ（本文、訛作ニ信濃下宮一、今改レ之、）神家、滋野、友野（友野、天正本作レ伴、）上杉、仁科、禰津（天正本載ニ高梨板倉一、）以下ノ軍勢ヲ召具シテ、同日ニ信濃ヲ立セ給フ、伊豫ニハ土居得能、兵船七百餘艘ニ取乘テ、海上ヨリ攻上ル、東山北陸四海九州ノ官軍共皆（毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、有ニ同日字一、）我國々ヲ立シカハ、路次ノ遠近ニ依テ、縱五日三日ノ遲速ハ有トモ、後攻ノ勢コソ近ツキタレト云立程ナラハ、八幡ノ寄手ハ皆退散スヘカリシヲ、今四五日待附スシテ、主上ハ八幡ヲ落サセ給ヒシカハ、國々ノ官軍モ力ヲ落シハテ、皆己カ本國ヘソ引返シケル、是モ只天運ノ時到ラス、神慮ヨリ事起ル故トハ云ナカラ、トスレハ遠フ宮方ノ運ノ程コソ計ラレタレ、

正平七年（觀應三年・文和元年）

六月十二日　尊氏、小此木・古戸（强戸カ）兩名ニ令シテ、新田庄寺井村ノ田宅ニツキ、新田鳥山右近將監ノ領有ヲ拒ケテ、之ヲ岩松頼宥代有義ニ交付セシム。

〔正木文書〕上（岩松文書ニモ在リ）

岩松禪師頼宥代有義申、上野國新田庄寺井村内田在家事、被裁許訖、所詮退鳥山右近將監押領、古戸彌四郎相共莅彼所、任御下文并御下知之旨、沙汰付下地於頼宥代、可執進請取、使節有延引者可有其咎之狀、依仰執達如件、

観應三年六月十二日　　縫殿頭在判

小此木新左衛門殿

（註）観應元年五月七日、正平十七年九月二十日條參照。

六月十三日　新田義興、水野致秋ヲ左衛門尉ニ推擧ス。

〔張州雜志抄〕三十古文書　春日井郡水野村水野家藏古證書　△、六、一六、五七六

左衛門尉所望事、所擧申公家也、可存其旨狀如件、

正平七年六月十三日　　源朝臣（新田義興ナルベシ）（花押）（同54）

水野平太（致秋）殿

（註）五月三日條參照。

六月十八日　尼了觀、新田庄出塚村ノ地ヲ上野長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕（貞治四年七月五日條及ビ明德三年八月十一日條ニ收ム）

六月二十三日　義詮、岩松頼宥ヲ遣シテ備後官軍ヲ擊タシメントシ、兵ヲ招ク。

〔萩藩閥閲錄〕六十七　高須惣左衛門　△、六、一六、五九五、（觀應三年六月廿三日附、尊氏（義詮ノ誤カ）ヨリ杉原千代松丸宛）

備後國凶徒退治事、所差遣岩松禪師房頼宥也、早令發向、可抽忠節之狀如件、

〔鼓文書〕（備後）△、六、一六、五九六、（觀應三年六月廿五日附、義詮ヨリ三吉覺鄰宛、）

備後國凶徒退治事、所差遣岩松禪師房頼宥也、早令發向、可抽忠節之狀如件、

七月二十九日　尊氏、佐野秀綱ニ令シテ官軍ヲ下野松田城ニ攻メシム。

〔佐野文書〕（古今消息集六所收）△、六、一六、七〇一、

下野國松田城（足利郡ニ、村名アリ、）凶徒對治事、可致忠節之狀如件、

観應三年七月廿九日　　尊氏在判

佐野新右衛門（秀綱）尉殿

官軍ノ名不詳、新田氏關係ノ人ナルベシ

八月三日　越後官軍風間越後守、同國尊氏黨池・多却・石坂諸氏等ト藏王堂ニ戰ヒ、尋デ五日、進ンデ大面莊ニ戰フ。又、尊氏黨和田茂實、小國氏等ノ官軍ヲ擊タントシテ、八日、濱中ニ進ム。

〔村山文書〕（羽前）　△、六、一六、七〇八、

著到

村山七郎義盛代方切七郎光義軍忠事、

右越後國奥郡凶徒池、多却、石坂以下之輩令蜂起、今年三日、押寄藏王堂、（蒲原郡）及散々合戰、凶徒等打負、楯籠大面庄（蒲原郡）之由依有其聞、大將軍風聞越後守殿御發向之間、屬于彼御手、同五日、馳向當庄令致軍忠候上者、給御證判、爲備後證、恐々言上如件、

正平七年八月日　（上杉憲顯カ）承了（花押）

〔色部文書〕（閏二月十六日ノ條ニ收ム）

八月十七日　彌仁王（後光嚴院）、京廷ニ踐祚ノ儀ヲ行ヒ給フ。〔後光嚴院御踐祚記〕〔其他〕

八月是月　赤松則祐、攝津警固ノ爲兵庫島ニ下向ス。〔後藤文書〕（明年二月二十六日條ニ收ム）

九月十六日　桂堂士聞、上野長樂寺住持トナル。

〔禪刹住持籍〕（上野州世良田山長樂寺歷代）　廿三世桂堂諱士聞　高南山雲、文和元年壬辰九月十六日入寺、（文和三年カ）六月二十日寂、

九月二十七日　赤松則祐、官軍（新田金谷軍カ）ト播磨賀屋新莊ニ戰フ。

〔安積文書〕（十二月八日條ニ收ム）

九月三十日　楠木正儀、赤松光範ト攝津渡邊神崎ニ戰フ。〔北河原家藏文書〕〔森本文書〕

十月三日　足利幕府、岩松賴宥ニ令シテ、備後泉村地頭職ヲ三吉覺辨ニ交付セシム。

〔鼓文書〕（備後）　△、六、一七、九四、

備後國泉村地頭職波佐竹四郎次郎跡、事、任去年二月十五日御下文、可被沙汰付三吉少納言坊覺辨之狀、依仰執達如件、

文和元年十月三日　岩松禪師（頼宥）御房

（福山志料ニ字都宮遠江入道トアリ）沙彌（花押）

〔福山志料〕三十二附錄古文書　△、六、一七、九四、

正平七年（觀應三年・文和元年）

備後國泉村波佐竹四郎次郎跡、事、任被仰下候(之カ)旨、沙汰付三吉少納言房覺辨於下地候了、仍渡狀如件、

文和二年九月十三日　　賴宥判

十一月三日　楠木正儀・吉良滿貞・石塔賴房等ノ官軍、賊黨赤松光範ト攝津神崎・尼崎ニ戰フ。光範、退テ神呪寺城ニ據ル。尋デ二十四日、兩軍伊丹河原ニ戰フ。

〔園太曆〕〔兼綱公記〕〔古今消息集〕〔北河原家藏文書〕〔野上文書〕

（註）此ノ戰ハ十二月八日條ニ掲グル新田金谷氏ノ活動ト關聯セルモノナルベシ。

十一月十二日　足利直冬、敗績シ、尋デ、吉野朝廷ニ歸順ス。〔園太曆〕〔參考太平記〕

十二月八日　官軍新田金谷某(經氏カ)賊黨赤松則祐ト播磨賀屋新莊ニ戰フ。

〔安積文書〕（盤城）六、六、一七、五〇、

安積出羽守盛氏子息平次盛兼申、

新田金屋ノ退治

右去年(文和元)九月廿六日、當國賀屋新庄(飾西郡)御合戰之時、致忠節候畢、同十二月八日、於同庄新田金屋殿以下之凶徒御退治之時、同致軍忠候畢、今年二月廿六日、於高岡南條御合戰之時、致忠功候畢、同三月八日、於蔭山庄御合戰之時、致忠節候畢、於所々度々捨身命、致軍忠候之條、赤松四郎兵衞尉、宇野彈正忠被見知候之上者、賜御證判爲備龜鏡(龜)、言上如件、

文和二年三月日　　（赤松則祐）承了（花押）

新田金谷戰死ノ風說

〔園太曆〕二十　十二月十二日、天陰、或云、吉野方官軍、新田力(カヂヘ)太、去比於攝州討取候(之カ)云々、實否不審也、

（註）新田金谷某、石清水八幡ニテ戰死セル事、去年九月七日條參照。

正平八年・文和二年癸巳（二〇一三）

正月十一日　官軍石塔賴房等、攝津伊丹城ヲ攻ム。〔北河原森本文書〕

二月二十六日　但馬・丹波ノ官軍、播磨ニ入リ法樂寺ニ據ル。賊黨赤松則祐、之ニ向ヒ、是日、高岡南條ニ戰フ。尋デ三月五日、則祐等、安田莊ニ、同八日、蔭山莊ニ戰フ。

〔安積文書〕(摂津)(去年十二月八日ノ條ニ收ム)

〔後藤文書〕(播磨)　(六、一六、七九九、

後藤八郎左衛門尉基景申軍忠事、

右爲攝州警固、去年八月御下向兵庫島之時卽馳參、於神呪寺瀨川等之御陣、致警固以下忠畢、爰但馬丹波凶徒就打入、播州法樂寺御發向之間令御共之處、爲法樂寺搦手、得平因州相共可罷向之由承之間馳向之處、今月五日凶徒打出之間、於安田庄致合戰畢、然者給御證判、爲備後證言上如件、(文和二年三月日附赤松則祐證判)

〔廣峰文書〕(坤播磨)　(六、一七、七一七、

廣峯兵部大夫代舍弟次郎左衛門尉則長申軍忠□(事)、

(中略)其後當年(文和二)二月□(日)□(丹)舟波凶徒等依令亂入播州、爲御退治御起□(之間カ)御共仕、同三月八日、於蔭山庄御合戰之□(時カ)致□(至カ)極合戰畢、此等次第赤松四郎兵衛尉被見□(知)□(畢)然者賜御證判爲備(後)御證、粗言上如件、(文和二年五月日附赤松則祐證判)

(註)　去年九月七日、本年二月七日、閏二月十五日(2)ノ各條參照。

二月二十七日　西野又五郎入道(新田西野ニアラザルカ)、近江伊香郡使トシテ、菅浦ヲ侵ス。因テ、尊胤法親王、近江守護佐々木義信ニ令シテ之ヲ停メシメ給フ。

〔菅浦文書〕(二近江)　(六、一七、七五二、

文和二年三月十四日檀那院尊寶院集會議曰、

早可被仰江州守護方事、

菅浦者爲本寺檀那院并未寺竹生島佛聖燈油料所、雖一□(日)片時無牢籠地也、而去二月廿七日三月十日兩度、伊香郡使西野又五郎入道、無是非令亂入菅浦致濫妨之條、言語道斷之次第也、爲郡使之上者、可鎭國中濫吹之處、及無理沙汰條令迷惑者也、所詮急被仰守護方、被止彼惡行可全佛聖燈油之旨衆議矣、(畢カ)

(註)　同文書ニ三月十四日附、光潤ヨリ應日僧都宛、三月十八日附、法眼任憲ヨリ近江守護宛、同年五月十五日同院集會議文、同五月二十六日附、定詮ヨリ櫛崎四郎兵衛尉宛。何レモ此ノ事ヲ載セタレドモ茲ニハ略ス。新田西野修理亮、顯家ニ屬シテ安部野ニ戰フ事、延元三年三月十六日條ニアリ、本條ノ西野某ハ、新田西野ニアラザルカ、後考ノ爲ニ强テ茲ニ揭グ。

三月十九日　尊氏、新田世良田滿義ノ知行分新田庄小角田村、田中經氏知行分同庄田中郷、及ビ所々ノ田宅ヲ長樂寺普光庵ニ寄附ス。

〔長樂寺文書〕△六、一七、七五六、

寄附　長樂寺普光庵、

上野國新田庄德河内畠五町四段、在家三宇、天野肥後二郎左衛門尉後家尼忍性、并神領□了見知行分、柳澤、并西谷内田五段、畠七段、在家壹宇、顕通知行分、上今居内田貳町九十歩、畠壹町七段、在家四宇、田中經氏知行分、遠尼兵衛三郎女子尼了心知行分、中今居内畠壹町九段、爲輔知行分、村田内田貳町壹段、尼淨心知行分、田中郷内田貳町畠貳段、大類五郎左衛門尉後家尼了覺知行分、同郷内田九段、田中五郎三郎經氏知行分、小角田村内田壹町壹段、畠壹町、世良田彌二郎滿義知行分、上堀口、并富澤内田貳町九段、在家九宇、中澤左衛門大郎入道後家尼了順知行分、小野郷内藤木村田壹町、在家貳宇、尼了欽知行分、高山庄南神田、并下大塚田壹町、畠三町、在家三宇、尼慈心知行分、北笠嶋内田三段、小野子藤五郎入道尊性知行分、入事、

右爲當庵領所寄附也者、守先例、可致沙汰之狀如件、

文和二年三月十九日　　正二位源朝臣（花押）

（註）世良田滿義ニツキテハ元德二年ノ條ニ度々出ヅ。田中五郎三郎經氏ハ尊卑分脈足利義純流田中系圖ニ五郎太郎トアリ。長樂寺源氏系圖ニ五郎三郎トアリ。

〔長樂寺文書〕

奉寄進

法照禪師塔頭普光庵田畠等、

一田四段　畠參段

一、田五段

右件田畠等ハ、上野國新田庄田中郷内辻の四郎太郎の西ニ田四反、鶴の澤の西ニ畠壹反、同郷柳宮南ニ田五段あり、彼所ハ親父頼阿の手よりゆつり居候處を心ざし候によつて、普光庵へ永代寄附申候、かの田畠等に若子孫の中に違亂妨を申者、氏女の跡を一分も不可知行、永不孝の子孫たるへし、仍寄進如件、

（註）右ハ寄進ノ年月日附ヲ欠ケドモ、本條ニ掲クベキモノト思ハル。或ハ又、延文五年四月十五日附源義冬ノ寄進狀ノ内容ナルヤモ知レズ。姑ク本條ニ掲グ。

田中郷親父頼阿

三月十九日　新田世良田親秀ノ室尼兼心、寂ス。

〔宮下氏過去帳〕（上野）　明式兼心尼、文和二癸巳年三月十九日　世良田右馬之丞親秀室、

五月二十日　北條時行等、相模龍口ニ斬ラル。

〔鶴岡社務記錄〕坤　（五月）廿日、於龍口、相模（北條時行）次郎、長崎駿河四郎、工藤二郎被誅了、

正平八年（文和二年）

六月十三日　是ヨリ先、六月九日、官軍楠木正儀・石塔頼房・山名時氏等、京都ヲ陥ル。是日、義詮、後光嚴院ヲ奉ジテ近江坂本ヲ經テ東走ス。新田堀口貞祐、堅田ニ於テ之ヲ襲撃シ、敵將佐々木秀綱ヲ殪ス。義詮、院ヲ奉ジテ美濃ニ落ツ。

和仁堅田ノ官軍襲撃ス

佐々木秀綱戰死ス

〔園太暦〕二十一　六月十三日、天晴、今朝巳二尅許、自桓豪僧正許送飛脚、承仕法師也、語曰、山門公家武家勢、今曉卯刻沒落、主上、梶井宮（尊胤法親王）、同日三寶院（賢俊）等相伴、宰相中將（義詮）沒落、欲渡湖上之處無船、仍俄差北落了、其勢猶猛也、仍和仁（堅田）・和爾方田（堅田）輩走來、爲南方寄心、仍合戰、其上又京方勢馳集、合戰程也、勝負之躰、追可申分（遠カ）、自坂本有飛脚者、青蓮院宮爲出京進迎了、妙法院者、引退門跡領仰木云々者、天運不可說！——安危在暫時者歟、追手去九日合戰、大略拂底向了、而於和爾方田雖相戰、大略過了、而佐々木近江守秀綱後陣沒落被討了云々、

十四日、天晴、今日惠鎭上人送同法僧、世上事示之、傳聞行幸供奉、西園寺中納言（實俊）、仲房朝臣、隆右、時光等云々、關白（二條良基）幷忠光不參、留坂本云々、近衛前關白（基嗣）、右府（近衛道嗣）又不參、未刻計、日吉禰宜行忠參入、坂本沒落式語之、追手急攻之、定不延引之由、而無沙汰、昨日皆歸了、新主猶舊主無心（止イ）歟、武運又勿論歟、

片田浦ヨリ官軍打出ツ

堀口貞祐五百餘人ヲ語ヒテ襲撃ス、

〔源威集〕（羽後）ム、六、一八、一三七、　翌年文和二年（癸巳）夏、山陰道凶徒山名伊豆守已下南方ノ御敵令同意、六月七日（九）落（沒）中責入、武將義詮賀茂於河原防戰、終日合戰及難儀間、今道ヲ越經テ行幸、假女形乘馬、清氏御馬ニ付テ有大功、武將供奉、東坂（本股カ）著御、御息之時分、片田ノ從浦凶徒打出寄來間、佐々木近江守秀綱（道譽長子）、馳向テ防戰ノ間、一族家人數輩秀綱共ニ殞命、以此隙西近江ヲ經テ、終ニ濃州垂井驛ニ著御ス、土岐大膳大夫頼泰（康）從京都供奉ス、濃州尾州兩國爲守護間假大内已下用意（下略）

〔參考太平記〕（卷第三十二）　義詮奉具後光嚴院引退濃州（附佐々木秀綱討死事）

義詮朝臣ハ、兼テ佐々木近江守秀綱ヲ警固ニ備フレハ、東坂本ノ事心安カルヘシ、爰ニテ國々ノ勢ヲモ催サント議セラレケルカ、吉野殿ヨリ、大慈院法印ヲ、大將ノ爲ニ山門ヘ呼寄タリト沙汰シケル間、坂本ヲ皇居ニナサレン事惡カルヘシトテ、同六月十三日、義詮朝臣龍駕ヲ守護シ奉リテ、東近江ヘ落給フ、（中略）是等ヲ宗徒ノ人々トシテ、都合其勢三千餘騎、和仁・堅田ノ濱道ニ駒ヲ早メテソ落ラレケル、爰ニ故堀口美濃守貞滿ノ子息掃部助貞祐カ、此四五年（北條家、西源院、南都、天正本、作三二三年）、堅田ニ隱テ居タリケルカ、其邊ノ溢者トモヲ語ヒテ五百餘人、眞野浦ニ出合テ、落行敵ヲ打留ントス、眞前ニハ主上ヲ擁護シ奉リテ、梶井二品親王、御門徒ノ大衆濟々ト召具シテ

落サセ給ヘハ、門主ニ所ヲ置奉リテ、弓ヲ控ス矢ヲ放タス、此間坂本ノ警固ニテ居タリケル、佐々木近江守秀綱三百餘騎ニテ、遙ノ後陣ニ通リケルヲ、是ハ山門ノ故敵、時ノ侍所ナレハ、是ヲ討留ヨトテ、堀口カ兵五百餘人、東西ヨリ引裏、足輕ノ射手、山ニ添澤ヲ隔テ散々ニ射ケル間、佐々木三郎左衛門、箕浦次郎左衛門（左、西源院本作レ右、下倣レ之、第三十八卷、諸本云、貞治元年、箕浦次郎左衛門、與二和田楠一合戰、云々、而今死二于此一者可レ疑、）寺田八郎左衛門（寺田、西源院本作二吉田一、下倣レ之、）今村五郎（今村、天正本作二今川一、下倣レ之、）一所ニテ皆討レニケリ、秀綱ハ憑切タル一族若黨トモカ、跡ニ蹈留リテ討死シケルヲ見テ、心憂キ事ニヤ思ヒケン、高尾四郎左衛門入道ト（高尾、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作二高屋一、為得、下倣レ之、按、高屋氏、佐々木庶流也、）二騎馬ノ鼻ヲ引返シ、敵ノ中ヘ懸入、共ニ歩立ノ敵ニ馬ノ諸膝ナカレテ、落ル處ニテ討レニケレハ、（常樂記云、文和二年六月十三日、佐々木近江守秀綱、於二堅田一討死、）遙ニ落延タル若黨共、三十七人（毛利家、天正本作二三十八人一、）返合返合、所々ニテ討レニケリ、

○北條家、南都本云、梶井二品親王、御門徒ノ大衆少々召具シテ落サセ給ヘハ、主上門主ニ所ヲモ置奉ラス、襄懸リテ散々ニ射奉ル間、佐々木秀綱、時ノ侍所トシテ、後陣ニ警固申テ在ケルカ、是ヲ見テ、秀綱命ヲ捨スハ難儀ナルヘシトテ、其勢三百餘騎馳向テ、身命ヲ捨テ戰ケル間、一旦懸散シ、敵數輩討取トイヘトモ、難所タルニ依テ、馬ノ懸引自在ナラス、敵ハ皆案内者歩立ナリ、此彼ノツマリツマリニテ、散々ニ射ケル間、遂ニ秀綱、同五郎左衛門尉、同高屋四郎左衛門入道、若黨箕浦、寺田、今村、神保以下三十七人、一所ニ討レニケリ、云々、（下同本文、）

其夜ハ鹽津ニ瑤輿ヲ舁留メ奉リテ、供奉ノ人々ヲモ、些休メ奉ラントセラレケルヲ、鹽津、海津ノ地下人共、軍勢此ニ一夜モ逗留セハ、事ニ觸テ煩アルヘシト思ヒケル間、此ノ道辻、彼ノ岡山ニ取上リテ、鐘ヲ鳴シ関ヲ作リケル程ニ、暫ノ御逗留叶ハテ、主上亦瑤輿ニ召レタレトモ、舁進ラスヘキ駕輿丁モ皆逃失テ、一人モナケレハ、細川相模守清氏、馬ヨリ飛テ下、歩立ニナリ、鐙ノ上ニ主上ヲ負進ラセテ、鹽津ノ山ヲソ越ラレケル、子推カ股ノ肉ヲ切、趙盾カ車ノ片輪ヲ扶シモ、此忠ニハ過シトソ見ヘシ、月卿雲客、或ハ長汀ノ月ニ策ヲ擧、或ハ曲浦ノ浪ニ棹サシ給ヘハ、巴猿一叫、停舟於明月峽之邊、胡馬忽嘶、失路於黄沙磧之裏ト、古人ノ書シ征路篇モ、今コソ思知レタレ、是ヨリ東ハ、路次ノ煩モ無リシカハ、美濃垂井宿、長者カ家ヲ皇居ニシテ、（歴代皇紀、皇年代略記云、文和二年六月十三日、後光厳院赴二美濃一、御二垂井宿小鳥行宮一、）義詮朝臣以下ノ官軍、皆四邊ノ在家ニ宿ヲ取テ、皇居ヲ警固シ奉リケリ、

〔參考太平記〕（卷第三十四　義詮賜將軍宣旨事）

中ニモ秀詮カ父源三判官秀綱、去文和二年六月ニ、山名伊豆守カ謀叛ニ依テ、主上、帝都ヲ去セオハシマシテ、越路ノ雲ニ迷ハセ給

正平八年（文和二年）

新田掃部助ノ襲撃

フ、爰ニ新田掃部助堀口貞満子貞祐山名カ謀叛ニ節ヲ得テ、堅田浦ニテ君ヲ襲奉リシ時、秀綱返シ合セ命ヲ輕ス、其間ニ主上延サセオハシマス事、偏ニ秀綱カ武功ニ依テナリ、

七月二十六日　是ヨリ先、二十三日、官軍、退京シ、二十五日、賊黨石橋和義・赤松則祐等、軍ヲ率ヰテ入京ス。又、是日、義詮、歸京ス。〔園太暦〕

〔參考太平記〕〔其他〕

七月二十八日　足利基氏、新田軍上野ニ起ラントスルヲ鎭メン爲ニ、武藏入間川ニ陣ス。

〔鶴岡社務記錄〕坤　七月廿八日、殿(基氏)武州御下向、八月五日、殿御方、幷畠山(國清)ニ馬各一疋引進也、

〔烟田文書〕著到目安狀　△、六、一八、二八一、

著到　常陸國

鹿島烟田遠江守時幹、

右爲凶徒御退治、武州御下向之間、依爲平一揆、去八月九日國府馳參、同至于入間河御陣、令供奉候畢、仍著到如件、(文和二年九月日附某證判)

新田ノ殘黨上野ニ起ラントス

〔神明鏡〕下　文和三年(二カ)七月廿八日、基氏、畠山國清、武州入間川發向、

〔鎌倉九代後記〕　文和二年基氏、武州入間川下向、則入間川殿ト號ス、

〔鎌倉管領九代記〕一下　畠山道誓上洛附同關東下向謀叛滅亡

左馬頭基氏は、新田の殘黨上野に起らんとするきこえありければ、是等を退治せんために鎌倉を出て、其勢三萬六千餘騎、武藏國入間川を前にあて、陣を取ておはします事數年に及べり、新田方に心ざしある者をば、御自身をしよせて誅罰し給ふ、此故に東八ケ國には、新田を引人おほしといへども、頭を差出す者なし、

七月二十九日　尊氏、鎌倉ヲ發シテ京都ニ向フ。〔鶴岡社務記錄〕〔源威集〕〔其他〕

七月是月　足利幕府、畠山國清ヲ關東執事ト爲ス。〔喜連川判鑑〕〔鎌倉九代後記〕〔鎌倉大日記〕

九月二十一日　後光嚴院、尊氏・義詮ヲ從ヘテ京都ニ還リ給フ。〔小島之壽佐美〕〔園太暦〕

九月二十五日　東國・西國ニ官軍起ルトノ風說京都ニ傳ル。

〔園太暦〕二十　九月廿五日、天晴、康隆來云、關東宮方軍勢亂入、已及合戰之由注進

武家云々、

卅日、天晴、又聞、西國以外蜂起、直冬給南方綸旨、奉憑追捕使事、又諸國守護已下事、任承久已前例、可執行之旨勅許云々、又東國同蜂起、世上猶定難落去歟、但例浮説歟、不足信用乎、

十月十三日　岩松頼宥、備後淨土寺ニ、同國得良郷地頭職及ビ上山・草兩村公文職ヲ安堵セシム。

〔淨土寺文書〕(二)(備後)　〈六、一八、三九八、

備後國尾道淨土寺領同國得良郷地頭職、同塔婆料所上山村、并草村公文職等事、停止軍勢違妨(風カ)如元寺家可被領掌之狀如件

文和二年十月十三日　　頼宥(岩松)(花押)

淨土寺方丈

十月十七日　官軍新田江田一族、法性寺中將・高倉・土岐原等ト共ニ、今月十五日、淡路賀集莊丹山ニ據ル。細川氏春、之ヲ攻メ、是日、上田保圓鏡寺原ニ戰フ。

〔古文書〕(船越記錄御用所本)　船越駿河守景範書上　〈六、一八、三九九、

秀定左衛門尉　文和二年十月、秀定及一族定春、與南方將戰有功、定春獻書而賜證判、其書之寫、

船越六郎次郎定春申軍忠事、

右御敵法性寺中將、高倉左衛門佐、新田江(田脱カ)一族、土岐原一族、阿波小笠原一族、宇都宮越中守、赤松次郎左衛門尉、阿万六郎左衛門尉以下凶徒馳加而卒大勢、今月十五日、當國淡州賀集庄丹山取陣之間、守護御勢相共馳向彼在所、同十七日、於上田保圓鏡寺原合戰之時、一族船越委文左衛門尉秀定相共致先懸、而懸入于大勢中、散々相戰之剋、被切落乘馬後、下立切臥數輩御敵之間、定春則被疵於二箇所(左臂、右膝、)畢、且云先懸之段、且云數反之戰、一々御見知之上者、賜御證判、欲備後代之元龜、仍言上如件、

文和二年十月日　　證判(細川氏春カ)

(註)　正平六年十一月是月、本年二月二十六日條參照。

十一月八日　是ヨリ先、越後ノ和田義成・同景茂等、賊黨某ニ屬シ、十月二十五日、阿賀河ヲ渡リテ河内城ノ官軍ヲ攻ム。五日、小國城ノ官軍、之ト新堀宿ニ戰フ。是日、小國城陷リ、新田義宗・脇屋義治等、宗良親王ヲ奉ジテ城ヲ脱出ス。

宗良親王
新田義宗
脇谷義治

一品宮
新田武州
脇谷金吾

一品宮
新田馬田

奉（宗良親王）二浦・和田・新田・脇谷・新田・馬田・一品宮・新田武州・脇谷金吾等、去年閏二月二十八日、同三月十五日、同八月三日條參照。明年九月二十三日條參照。

（註）

文和二年十一月十八日　（裏花押）

（裏花押）

十二月九日　賊黨伊豫守某、宗良親王トノ戰ニ、越後ノ人村山熊王ノ父某ノ戰死セルヲ褒ス。

〔村山文書〕（羽前）　〈六、一一八、四九五、

越後國凶徒一品宮（宗良親王）以下對治之間、親父討死之條、忠功之至甚神妙也、可有其賞之狀、依仰執達如件、

文和二季十二月九日　伊豫守（花押）

村山熊王殿

十二月二十三日　足利幕府、三吉覺辨ノ訴ニヨリ、岩松頼宥ヲシテ、小文一族ノ備後泉村地頭職ヲ濫妨スルヲ停メシム。

〔鼓文書〕（備後）　〈六、一一八、五〇九、

三吉少納言房覺辨申、備後國泉村地頭職事、訴狀具書如此、小文十郎已下一族等濫妨云々、早任觀應二年二月十五日御下文并施行狀、可被沙汰付覺辨於下地之狀、依

正平八年（文和二年）

仰執達如件、

文和二年十二月廿三日　　散位（大高重成）（花押）

岩松禪師（頼宥）御房

〔福山志科〕三十二附錄古文書（三吉覺辨申狀文和二年十二月日附）

正平九年（文和三年）甲午（三〇一四）

四月十七日　北畠親房、薨ズ。〔常樂記〕〔公卿補任〕〔其他〕

七月二日　岩松頼宥、山内通氏ノ訴ニヨリ、坂田某ヲシテ、官軍大館右馬亮ト聯合セリト思ハルヽ廣澤四郎五郎通實ノ備後津田郷内和田村ヲ押妨セルヲ停メシム。尋デ頼宥、通氏ニ得良郷地頭職ヲ預ケテ、山内又五郎以下ノ官軍ヲ討タシム。

〔山内首藤文書〕十一長門　△六、一九、一〇九、（福山史料集ニモ載ス）

山内兵庫允通氏申、備後國津田郷内和田村事、茲彼所、止廣澤四郎五郎（通實）押妨、可沙汰付下地於通氏之狀如件、

文和三年七月二日　　（岩松頼宥）（花押）

坂田孫太郎入道殿

〔淨土寺文書〕二備後　△六、一九、一一〇、

備後國得良郷地頭職事、山内又五郎已下御敵退治之程、爲新所所預置也、於土貫者、任先例致其沙汰淨土寺、且差塞凶徒通路、彌可抽戰功之狀如件、

文和三年七月五日　　頼宥（花押）

（押紙）「當國庄原城主」

山内兵庫允（通氏）殿

（註）　興國四年四月十四日、正平六年十二月二十三日條參照。

八月四日　足利幕府、岩松頼宥ニ令シテ、二加・光清等ノ祇園社領備後小童保ヲ押妨スルヲ停メシム。

〔八坂神社文書〕二山城　△六、一九、一二五、

祇園社執行法印顯詮雜掌申、備後國小童保領家職事、申狀副具書如此、二加四郎左衛門尉、幷光清左衛門尉等押妨云々、早停止彼妨、沙汰付雜掌於下地、可被全所務之狀、依仰執達如件、

文和三年八月四日　　左京大夫（花押）

岩松禪師（頼宥）御房、

九月二十三日　新田義興・脇屋義治等、千種顯經・魚沼一族ト共ニ、宗良親王ヲ奉ジテ、越後宇加地城ヲ攻ム。賊黨和田茂資、和田景茂等ヲ率ヰテ城ヲ援フ。

〔三浦和田文書〕（伊佐早謙氏舊藏）　△六、一九、一五九、

（編裏書）「三浦和田三郎左衛門尉代目安　文和三十七」

三浦和田三郎左衛門尉代子息余三景茂申、

右當國御敵一品（宗良）親王、千種（顯經カ）相掌家、新田武衛（義興）、協谷金吾（義治）、幷魚沼一族等打出、御方宇加（北魚沼郡）地城責之間、爲後攻被發向三浦和田土佐（茂資）守之間、屬于彼手、去九月廿三日馳向致忠節畢、仍此等次第御見知之上者、賜御證判爲備後證言上如件、

文和三年十月五日　（裏花押）

（註）去年十一月八日、明年四月七日條參照。大日本史料、新田武衛ヲ義宗トスレド、ムシロ兵衛佐義興ト見ルベシ。

十月十七日　岩松頼宥、山内通氏ノ備後得良郷地頭職所務代ヲ禮ヒ、之ヲ淨土寺ニ還付ス。

〔淨土寺文書〕（備後）　△六、一九、一八一、

頼宥花押

淨土寺雜掌申、備後國得良郷地頭職事、依爲要害地、於下地者預置山内兵庫允通氏、有限至土貢者、無不法之儀、可沙汰渡寺家之旨、先日出事書畢、而通氏違背寺家條尤無謂、所詮向後所務代事、如元可爲寺家之沙汰之狀如件、

文和三年十月十七日　頼宥（岩松）（花押）

十一月三日　克中致柔、上野長樂寺住持トナル。

〔禪刹住持籍〕（上野州世良田山長樂寺歴代）　廿四世克中諱致柔（扁見山、文和三年甲午十一月三日入寺）

十二月二十三日　官軍足利直冬・桃井直常等、京都ヲ攻メントス。是日、尊氏、後光嚴院ヲ奉ジテ、近江武佐寺ニ奔ル。

〔柳原家記錄〕〔大福寺文書〕〔其他〕

正平十年（文和四年）乙未（三〇一五）

正月二十二日　官軍ノ將足利直冬・山名時氏・石塔頼房等入京ス。桃井直常等、如意嶽ニ陣ス。尊氏、東坂本ニ至リ給フ。〔園太暦〕〔建武三年以來記〕〔賢俊僧正日記〕〔其他〕

二月六日　岩松頼宥、義詮ニ從ヒ攝津神南ニ戰フ。官軍、退ク。尋デ十三日、頼宥、西山峯堂ニ陣シ、十五日、京西七條ニ戰フ。更ニ明月十二日、七

頼宥花押

條西大路大宮東寺口ニ戰フ。官軍、八幡ニ退キ、尋デ十八日、天王寺ニ退ク。

〔山内首藤文書原題文徴〕（長門）　（六、一九六六五、）

山内松若丸（通忠）代景山左衛三郎（門脇力）時朝申軍忠事、

右去文和四、二月六日、河内山南尾御合戰之時、御大將御供仕、依散々太刀打抽戰功、同七日、爲佐々木大夫判官（高氏）入道管領、被召出預御盛（感）畢、同日、被取山崎御陣之間、日夜警固異于他者也、加之十三日、於西山峰堂御陣、役所驚（警）固致忠節、同十五日、京都御合戰之間、御大將并仁木京兆、御詰西七條之刻御共仕畢、將又今月八日、於西七條御陣、經數日抽忠勤之處、同十三日（二カ）、御合戰之間、致（到カ）于七條西大路大宮東寺口依致軍忠、凶徒等令沒落畢、雖然東寺退散凶賊等、楯籠八幡山宇治之由依有其聞、御發向之間御共仕、馳向宇治之處、御敵等則令沒落了、此等次第御存知之上者、下賜御判爲備龜鏡、恐々言上如件、

文和四年三月日　　承了（岩松頼宥）（花押）

顯法寺城
六角峯
柿崎城

頼宥花押

今度以代官自播州令供奉京都、去二月六日、於神無山致合戰忠節之條、殊以神妙、可被抽賞之旨、可注申之狀如件、

文和四年六月三日　　頼宥（花押）

山内松（通忠）若殿

三月四日　上杉憲將・宇佐美一族等、越後顯法寺城ニ兵ヲ擧グ。賊黨風間長頼、村山隆直等ヲ率ヰテ之ヲ攻メ、十二日、六角峯ヲ占領シ、二十五日、終ニ顯法寺城ヲ陷イル、

〔村山文書〕（羽前）　（六、一九七二四、）

村山大善介隆直申軍忠事

右當國越後、御敵上杉武庫（憲藤）、宇佐美一族已下、去三月四日、於佐美庄顯法寺（中頸城郡吉川村）城揚旗之間、屬風間右京亮長頼御手、打入佐美庄、同十二日、致散々合戰、追落六角峯（同郡旭村大字六萬部）御敵、攻寄彼城數日致合戰、同廿五日、自東尾追落畢、然ニ彼御敵等楯籠柿崎城之間、同廿六日、馳向當城、致散々合戰之處ニ、四月十四日、彼凶徒等或沒落、或令降參畢、仍軍忠之次第長頼御見知之上者、給御證判爲備後證、恐々言上如件、（文和二年四月日附某證判）

四月七日　是ヨリ先、四月二日、和田茂資、越後河内城ノ官軍ヲ陣峯ニ

破ル。是日、脇屋義治等、宗良親王ヲ奉ジ、之ト木野島・平方原等ニ戰フ。

〔三浦和田文書〕（伊佐早謙氏舊藏）　〈六、一九七七一、

三浦和田三郎左衞門尉義成軍忠事

右當國越後、凶徒等蜂起之間、屬三浦和田土佐守茂資手、不廻時日馳向之處、河内（蒲原郡）御敵等出張、差塞路次之間、今月二日、青海庄賀茂口於陣峰致散々合戰追落畢、同三日、藏王（蒲原郡）堂仁馳著、同七日、一品宮（宗良親王）脇谷金吾（義治）以下御敵等、志都乃岐（古志郡）庄於木野島出向之間、守護相共致散々合戰之時、被切乘馬、吉田彌次郎時綱被疵、弓手腕被切、同日於大島（古志郡）庄平方原致散々合戰畢、此等次第御見知之上者、賜證判爲備支證、言上如件、

文和四年四月廿九日　承了（花押）

（註）去年九月二十三日、本年八月二十日、正平十五年是歲、正平二十三年七月是月條參照。

四月十四日　是ヨリ先、三月二十六日、上杉憲將・宇佐美一族等、越後柿崎城ニ據ル。賊黨風間長賴、之ヲ攻メ、是日、城陷ル。更ニ、十六・十七日、上杉憲將・禰津某等、信濃ノ小笠原長基ト戰フ。〔村山文書〕（去月四日條ニ收ム）

妙法院宮　香坂知久

〔小笠原古文書〕（山勝）乾　〈六、一九八二五

上椙（家將）兵庫助、禰津孫次郎以下凶徒等致合戰由事、去月十六、十七兩日戰功注進狀披見訖、致忠節云々、尤以神妙也、爰於國人等不參輩者、爲有殊沙汰、可注申交名、不相殘（於カ）敵陣城等者、不日可對治之狀如件、（文和四年五月廿六日附、義詮ヨリ小笠原兵庫助宛）

八月二十日　宗良親王、諏訪祝及ビ矢島一族等ヲ率ヰテ、信濃桔梗原ニ賊黨小笠原長亮ヲ攻メ給フ。

〔園太曆〕四　二十　八月十七日、天晴、今日聞、駒牽依信州合戰、不及沙汰上之由、馬所注進到來云々、妙法院宮（宗良親王）爲大將軍被合戰、周防（諏訪）祝上下、并仁科合力以外也、仍國中騷動不及國役沙汰云々、其趣付奉行職事申入之旨語之、

〔矢島文書〕（信濃）　〈六、一九八九九、

正平十年乙未八月、諏方祝矢島左衞門尉（五位大夫）正忠府中ヘ發向、一族矢島（眞志野）美作守蒲綱、矢島大井、山城守光政、矢島栗林、讃岐守政賴、矢島小野、勘兵衞尉助成、矢島桑原、伯耆守友幸、矢島今田、南枝軒入道、矢島佐久、榮春入道、矢嶋奥神次郎維正、三輪知家、栗田寛範入道、入越（マヽ）後守爲賢、藤森次郎入道貞景、其他小村、藤澤、千野、香坂、知久、平栗、早村、武居、上原、金子等之衆、自諏訪打出、府中勢者小笠原信濃守長亮、坂西、麻生、麻

正平十年（文和四年）

澤、山家、平瀨、古野、新井、赤澤等、桔梗原ヨリ取陣、同廿日大合戰、敵身方手負死人數多、左衞門尉爲流矢被遂討死候畢、

此合戰ニ下之金剌山田不馳加、如何ニ〳〵、　沙彌道念（花押）

南無本地普賢大菩薩卽往安樂世界　爲後記

（註）四月七日條參照。

十一月十八日　懷良親王、菊池武澄等ヲ率キテ、十月二日、豐後日田ニ發向シ、更ニ國府ヨリ豐前ヲ經テ、是頃、博多ニ入リ給フ。鎭西官軍ノ勢威振フ。〔木屋文書〕〔古文書〕

十二月二十七日　是ヨリ先、岩松村田賴氏、新田庄下江田鄕ノ田宅ヲ左衞門尉秀義ニ沽却ス。是日、秀義、之ヲ長樂寺塔頭正傳菴ニ交付ス。

〔長樂寺文書〕（四上野）　△六、二〇、一九一、

新田庄村田遠江太郎賴氏沽却之處、上野國新田庄下江田鄕內在家一宇、畠參反、付田五段、此外田三段、任賴氏賣狀、世良田長樂寺塔頭正傳菴御代官奉渡處也、仍渡狀如件、

文和二年十二月廿七日　左衞門尉秀義（花押）(55)

（註）村田遠江太郎賴氏ノ系緣不明ナレド、尊卑分脈ニハ岩松村田賴兼ノ甥ニ賴氏アリ。正和二年十二月二十一日條參照。

正平十一年（文和五年・延文元年（二月二十八日改））丙申（三〇一六）

三月十八日　高師冬妻明阿、參河ノ所領ノ事ニツキ愁訴スル所アリ。義詮、新田大島義高ニ令シテ之ヲ處置セシム。

〔總持寺文書〕（三河）　△六、一九、九〇九、

越後將監（高師泰）女比丘尼（師冬妻明阿）申、三川國所領違亂之由歎申候、無相違可被相計候也、謹言、

三月十八日（延文元年カ）　（義詮）（花押）

新田殿（大島義高）

（註）右ノ文書ハ年紀ヲ詳ニセザレドモ、總持寺文書ニヨレバ、高師冬ノ妻明阿（師泰ノ女）參河菅生鄕ヲ岡崎總持寺ニ寄セ、尊氏、義詮ノ之ヲ安堵セシ事、文和四年八月廿三日附ノ文書其他ニ見ユレバ、恐ラク右文書ハ其ノ翌年延文元年ノモノナルベシ。新田殿トハ參河守護大島義高ナル事、正平十五年八月四日、同二十年二月五日條ト參照シテ知ルベシ。

十月二十一日　官軍上杉憲將、信濃高井郡ニ據ル。是日、賊黨ヲ邀擊シテ之ヲ擊退ス。尋デ、二十三日、小菅寺ニ、二十八日、平林ニ戰フ。

〔市河文書〕三　△六、二〇、八八八、（正平十一年十二月日附、市河經高軍忠狀、上杉憲將證判、正平十一年十月日附、同、同、）

十一月二十四日　是ヨリ先、菊池氏等ノ官軍、豐前規矩郡ニ入ル。尊氏黨一色直氏、長門ヨリ來リテ、筑前麻生山ニ陣ス。是日、麻生山陷リ、直氏等長門ニ奔ル。〔麻生文書〕〔正閏史料〕

正平十二年（延文二年）丁酉（三〇一七）

二月十八日　幽囚中ナリシ光嚴院・崇光院・直仁親王、河內金剛寺ヨリ京都ニ還御シ給フ。〔愚管記〕〔園太曆〕〔其他〕

八月二十一日　基氏、畠山義深等ノ請ヲ聽シ、伊豆吉祥寺ニ、岩松治部大輔ノ舊領武藏万吉鄕ヲ寄ス。

〔神田孝平氏所藏文書〕二　△六、二一、四一七、

奉寄　伊豆國吉祥寺

武藏國万吉鄕（岩松治部大輔跡、）事

右任畠山尾張守義深、同左近大夫將監淸義、同式部大夫國熙等申請旨、所令寄附也者、守先例、可被致沙汰之狀如件、

延文二年八月廿一日　左馬頭源（基氏）朝臣

（註）大日本史料ニ岩松治部大輔ヲ滿純ト註スレドモ、滿純ハ應永二十三年十月ニ上杉禪秀ノ聟トシテ活動スル人ナルヨリ考フレバ、右ノ註ハ當ラズ。ムシロ正平十七年二月二十一日、同十八年八月二十六日、同十九年十月二十八日條ニ見ユル治部大輔某ナルベシ。

岩松治部大輔ニツキテ

十月二日　周叟妙松、上野長樂寺住寺トナル。

〔禪刹住持籍〕（上野州世良田山長樂寺歷代）　廿五世周叟諱妙松（高峰日、延文二丁酉十月二日入寺、貞治四乙巳十月二日寂、大通菴、）

正平十三年（延文三年）戊戌（三〇一八）

四月三十日　足利尊氏、死ス。〔公卿補任〕〔其他〕

十月十日　新田義興、賊黨ノ策謀ニ陷リ、武藏矢口渡ニ誘殺セラル。

〔參考太平記〕（卷第三十三）　新田義興自害事

去程ニ尊氏卿逝去有テ後、筑紫ハ箇樣ニ亂ヌトイヘトモ、東國ハイマタ靜ナリ、爰ニ故新田左中將義貞ノ子息左兵衞佐義興、其弟武藏少將義宗、故脇屋刑部卿義助子息右衞門佐義治（右、今川家、毛利家、北條家、南都本及本文、前作ト左、前後不一、余皆倣之、）三人、此三四年カ間、越後國ニ城郭ヲ

武藏上野ノ者義興等ノ出張ヲ請フ

構、半國計ヲ討從ヘテ居タリケルヲ、武藏上野ノ者共ノ中ヨリ、（金勝院本不レ載二武藏一）貳心ナキ由ノ連署ノ起請ヲ書テ、兩三人ノ御中ニ、一人東國ヘ御越候ヘ、大將ニシ奉リテ、義兵ヲ擧候ハントソ申タリケル、義宗義治二人ハ、思慮深キ人ナリケレハ、此比ノ人ノ心、左右ナク憑カタシトテ、許容セラレス、義興ハ大早リニシテ、忠功人ニ先タヽン事ヲ、イツモ心ニ懸テ思ハレケレハ、是非ノ遠慮ヲ運サルヽ迄モナク、纔ニ郎從百餘人ヲ、行ツレタル旅人ノ樣ニ見セテ、竊ニ武藏國ヘソ越ラレケル、元來張本ノ輩ハ申ニ及ハス、古新田義貞ニ功アリシ族、今畠山入道道誓ニ恨ヲ含ム兵、竊ニ音信ヲ通シ、頻ニ媚ヲ入テ、催促ニ從フヘキ由ヲ申者多カリケレハ、義興今ハ身ヲ寄ル處多ク成テ、上野武藏兩國ノ間ニ、其勢漸崩セリ、天ニ耳ナシトイヘ共、是ヲ聞ニ人ヲ以テスル事ナレハ、互ニ隱密シケレ共、兄ハ弟ニ語リ、子ハ親ニ知セケル間、此事程ナク鎌倉管領足利左馬頭基氏朝臣、畠山入道道誓ニ聞ヘテケリ、畠山大夫入道是ヲ聞シヨリ、敢テ寢食ヲ安クセス、在所ヲ尋聞テ、大勢ヲ差遣セハ、國內通計シテ、行方ヲ知ス、又五百騎三百騎ノ勢ヲ以テ、道ニ待テ夜討ニ寄テ討ントスレハ、義興更ニ事トモセス、蹴散シテハ道ヲ通、打破テハ圍ヲ出、千變萬化總テ人ノ業ニ非スト申ケル間、今ハスヘキ樣ナシトテ、手ニ餘リテソ覺ケル、サテモ此事如何スヘキト、畠山入道道誓、晝夜案シ居タリケルカ、或夜潛ニ竹澤右京亮ヲ近ツケテ、（竹澤、西源院本作二片澤一、下倣レ之、亮、金勝院本作二大夫一、而云、名良衡、）御邊ハ先年武藏野合戰ノ時、彼義興ノ手ニ屬シテ忠アリシカハ、義興モ定テ其舊好ヲ忘レシトソ思ハルラン、サレハ此人ヲ僞テ討ンスル事ハ、御邊ニ過タル人有ヘカラス、如何ナル謀ヲモ運シテ、義興ヲ討テ、左馬頭殿ノ見參ニ入給ヘ、恩賞ハ宜請ニ依ヘシトソ語ハレケル、竹澤ハ元來欲心熾盛ニシテ、人ノ嘲ヲモ顧ズ、古ノ好ヲモ思ハヌ情ナキ者ナリケレハ、曾テ一議ヲモ申サス、サ候ハヽ、兵衞佐殿ノ疑ヲ散シテ、相近ツキ候ハン爲ニ、某態御制法候ハンスル事ヲ背テ、御勘氣ヲ蒙リ、御內ヲ罷出タル體ニテ、本國ヘ罷下リテ後、此人ニ取寄候ヘシト、能々相謀テ、已カ宿所ヘソ歸ケル、兼テ謀ツル事ナレハ、竹澤翌日ヨリ宿々ノ傾城共ヲ數十人呼寄テ、遊戲レ舞歌フ、是ノミナラス、相伴フ傍輩共二三十人招聚テ、博奕ヲ晝夜十餘日迄ソシタリケル、或人是ヲ畠山ニ告知セタリケレハ、畠山大ニ僞怒テ、制法ヲ破ル罪科一ニアラス、凡道理ヲ破ル法ハアレトモ、法ヲ破ル道理ナシ、況有道ノ法ヲヤ、一人ノ科ヲ誡ルハ、萬人ヲ助ン爲ナリ、此時緩々ノ沙汰ヲ致サハ、向後ノ狼藉斷ヘカラストテ、則竹澤カ所帶ヲ沒收シテ、其身ヲ逐出サレケリ、竹澤一言ノ陳謝ニモ及ハス、穴コトコトシ、左馬頭殿ニ仕ハレヌ待ハ、身一ツハ過ヌカト

道誓竹澤某ニ囑ル

竹澤苦肉ノ計ヲ廻ラス

畠山、竹澤ヲ罰ス

正平十三年（延文三年）

竹澤、義興ニ通ズ

飽迄廣言吐散シテ、己カ所領ヘソ歸ニケル、角テ數日有テ、竹澤竊ニ新田兵衞佐殿ヘ人ヲ奉リテ申ケルハ、親ニテ候シ入道、故新田殿ノ御手ニ屬シ、元弘ノ鎌倉合戰ニ、忠ヲ抽テ候キ、某又先年武藏野御合戰ノ時、御方ニ參テ忠戰致候シ條、定テ思召忘候ハシ、其後ハ世ノ轉變度々ニ及テ、御座所ヲモ更ニ存シ仕ラデ候ツル間、力ナク暫ノ命ヲ助リテ、御代ヲ待候ハン爲ニ、畠山禪門ニ屬シテ候ツルカ、心中ノ趣氣色ニ顯レ候ケルニ依テ、指タル罪科トモ覺ヘヌ事ニ、一所懸命ノ地ヲ沒收セラレ、結句討ヘキナトノ沙汰ニ及候シ間、則武藏ノ御陣ヲ逃出テ、當時ハ深山幽谷ニ隱レ居タル體ニテ候、某カ此間ノ不義ヲタニ、御免有ヘキニテ候ハヽ、御內奉公ノ身ト罷成候テ、自然ノ御大事ニハ、御命ニハ代リ進ラセ候ヘシト、念比ニソ申入タリケル、兵衞佐是ヲ聞給ヒテ、姑ハ申處誠シカラストテ、見參ヲモシ給ハスシテ密議ナトヲ知セラルヽ事モ無リケレハ、竹澤尙モ心中ノ僞ラサル所ヲ顯シテ、近ツキ奉ランタメ、京都ヘ人ヲ上セ、アル宮ノ御所ヨリ、少將殿ト申ケル上臈女房ノ、年十六七許ナル容色類ナキ、心樣優ニヤサシクオハシケルヲ、兎角申下シテ、先己カ養君ニシ奉リ、御裝束女房達ニ至迄、樣々ニシ立テ、竊ニ兵衞佐殿ノ方ヘソ出シタリケル、義興元來好色ノ心深カリケレハ、類ナク思ヒ通シテ、一夜ノ程ノ隔モ、千年ヲ

武藏ノ陣

竹澤、義興ニ少將局ヲ進ム

竹澤、義興ニ近ヅク

明月ノ會ニ義興ヲ討タントス

經ル心地ニ覺ケレハ、常ノ隱家ヲ易ントモシ給ハス、少ヒタヽケタル式ニテ、其方樣ノ草ノユカリ迄モ、心ヲクヘキ事トハ露計モ思ヒ給ハス、誠ニ褒姒一笑テ幽王國ヲ傾ケ、玉妃傍ニ媚テ、玄宗世ヲ失ヒ給ヒシモ、角ヤト思ヒ知レタリ、ザレハ太公望カ利ヲ好ム者ニハ、財珍ヲ與ヘテ是ヲ迷ハシ、色ヲ好ム者ニハ、美女ヲ與ヘテ是ヲ惑ハスト、敵ヲ謀ル道ヲ敎シヲ、知サリケルコソ愚ナレ、角テ竹澤奉公ノ志切ナル由ヲ申ケルニ、兵衞佐早心打解テ、見參シ給フ、軈テ鞍置タル馬三匹、只今威シシ立タル鎧三領、召替ノ爲トテ引進ス、是ノミナラス越後ヨリ附纏奉リテ、此彼ニ隱レ居タル兵共ニ、皆一獻ヲ勸メ、馬物具衣裳太刀刀ニ至迄、用々ニ從テ、漏サス是ヲ引ケル間、兵衞佐殿モ、竹澤ヲ他ニ異ナル思ヒヲナサレ、傍輩共モ皆是ニ過タル御要人有ヘカラスト、悅ハヌ者ハ無リケリ、箇樣ニ朝夕宮仕ノ勞ヲ積、晝夜無二ノ志ヲ顯シテ、半年許ニ成ニケレハ、佐殿今ハ何事ニ附テモ心ヲ置給ハス、謀反ノ計略、與力ノ人數、一事モ殘ラス、心底ヲ盡シテ知セラレケルコソ淺マシケレ、九月十三夜ハ、暮天雲晴テ、月モ名ニオフ夜ヲアラハシヌト見ヘケレハ、今夜明月ノ會ニ事ヲ寄テ、佐殿ヲ我館ヘ入奉リ、酒宴ノ砌ニテ討奉ラント議シテ、無二ノ一族若黨三百人催シ聚、我館ノ傍ニソ籠置ケル、日暮ケレハ、竹澤急キ佐殿ニ參テ、今夜ハ明月正平十三年（延文三年）

少將局義興ノ出遊ヲ止ム

ノ夜ニテ候ヘハ、恐ナカラ私ノ茅屋ヘ御入候テ、草深キ庭ノ月ヲモ御覽候ヘカシ、御内ノ人々ヲモ慰申候ハン爲ニ、白拍子共少々召寄テ候ト申ケレハ、興アル遊アリヌト面々ニ皆悅テ、軈テ馬ニ鞍置セ、郎從共召集テ、已ニ打出ントシ給ヒケル處ニ、少將御局ヨリトテ、佐殿ヘ御消息アリ、披テ見給ヘハ、過シ夜ニ御事ヲ惡キ樣ナル夢ニ見進ラセテ候ツルヲ、夢說ニ問テ候ヘハ、重キ御慎ニテ候、七日カ間ハ、門ノ內ヲ御出有ヘカラスト申候ナリ、御心得候ヘシトソ申サレタリケル、佐殿是ヲ見給ヒテ、執事井彈正ヲ井、西源院本作ニ井伊、下倣之、金勝院本云、名興種、非也、井伊家譜、作ニ彈正左衞門直秀ニ直貞子也、近ツケテ、如何有ヘキト問給ヘハ、井彈正、囚ヲ聞テ愼マスト云事ヤ候ヘキ、只今夜ノ御遊ヲハ、止ラルヘシトコソ存候ヘトソ申ケル、佐殿實モト思ヒ給ケレハ、俄ニ風氣ノ心地有トテ、竹澤ヲソ歸サレケル、竹澤ハ今夜ノ企、案ニ相違シテ、安カラス思ヒケルカ、抑佐殿ノ少將御局ノ文ヲ御覽シテ止リ給ヒツルハ、如何樣我企ヲ、內々推シテ告申サレタル者ナリ、此女性ヲ生テ置テハ叶フマシトテ、翌夜潛ニ少將局ヲ門ヘ呼出シ奉リテ、刺殺シテ堀ノ中ニソ沈メケル、痛ハシキカナ都ヲハ打續タル世ノ亂ニ、アレノミマサル宮ノ中ニ、年經テ住シ人々モ、秋ノ木葉ノ散々ニ、ヲノカ樣々ニ成シカハ、憑陰ナク成果テ、身ヲ津ノヨルベトハ、此竹澤ヲコソ賴給ヒシニ、何故ト思ヒ分タル方

竹澤、少將局ヲ害ス

畠山、竹澤等苦內ノ計ヲ重ヌ

モナク、見テタニ消ヌヘキ秋ノ霜ノ下ニ伏テ、深キ淵ニ沈メラレ給ヒケル、今ハノ際ノ有樣ヲ思ヒ遣タニ哀ニテ、外ノ袖サヘシホレニケリ、西源院本云、其後武衞ヨリ、御局ヘ御消息有ケレトモ、片澤申ケルハ、此間御遠例トソ申ケル、武衞如何樣ニモ、返事ノナキハ、片澤カ心ニ違フ事有テ、御局ヘ申サヌヤラン、如何シテモ片澤カ心ニ違ハシト思召コソ、御遲ノキハメナレ、云々、其後ヨリ竹澤我力ニテハ尙討得ジト思ヒケレハ、畠山殿ノ方ヘ使ヲ立テ、兵衞佐殿ノ隱レ居ラレテ候所ヲハ、委細ニ存シ仕テ候ヘトモ、小勢ニテハ打漏シヌト覺候、急キ一族ニテ候、江戶遠江守ト金勝院本云、名能登、下野守トヲ金勝院本云、名興寬、下サレ候ヘ、彼等ニ能々評定シテ討奉リ候ハントソ申ケル、畠山大夫入道大ニ悅テ、軈テ江戶遠江守ト、其姪下野守ヲ下サレケルカ、討手ヲ下ス由、兵衞佐傳聞ハ、在所ヲ易テ隱ルヽ事モ有トテ、江戶伯父姪カ所領、稻毛莊十二鄕ヲ闕所ニナシテ、則給人ヲソ附ラレケル、江戶伯父姪大ニ僞怒テ、軈テ稻毛莊ヘ馳下リ、給人ヲ逐出シ、城郭ヲ構、一族以下ノ兵五百餘騎金勝院本作ニ五百人ニ招聚テ、只畠山殿ニ向ヒ、一矢射テ討死セントソ勾リケル、程經テ後江戶遠江守、竹澤右京亮ヲ緣ニ取テ、兵衞佐ニ申ケルハ、畠山殿故ナク懸命ノ地ヲ沒收セラレ、伯父姪共ニ牢浪ノ身ト罷成間、力及ハス一族共ヲ引率シテ、鎌倉殿ノ御陣ニ馳向ヒ、畠山殿ニ向テ、一矢射ンスルニテ候、但然ルヘキ大將ヲ仰キ奉ラテハ、勢ノ著事有間敷ニテ候ヘハ、佐殿ヲ大將ニ憑ミ奉ランスルニテ候、先忍ヒテ鎌倉ヘ御

江戶遠江守、義興ヲ謀ル

正平十三年（延文三年）

江戸、義興ニ鎌倉潛行ヲ奬ム

越候ヘ、鎌倉中ニ當家ノ一族、イカナリトモ二三千騎有ヘク候、其勢ヲ附テ、相模國ヲ打從ヘ、東八箇國ヲ推テ、天下ヲ覆ス謀ヲ運シ候ハント、誠ニ容易ゲニソ申タリケル、サシモ志深キ竹澤カ執シ申ナレハ、疑フ所ニ非スト憑マレテ、則武藏上野常陸下總ノ間ニ、内々與力シツル兵共ニ、事ノ由ヲ相觸テ、十月十日ノ曉ニ、兵衞佐殿ハ、忍テ先鎌倉ヘトソ急カレケル、江戸竹澤ハ、兼テ支度シタル事ナレハ、矢口渡ノ船ノ底ヲ、二所鑿拔テノミヲ指、渡ノ向ニハ宵ヨリ江戸遠江守、同下野守、ヒタ物具ニテ三百餘騎、木ノ陰岩ノ下ニ隱レテ、餘ルアラハ討止ント用意シタリ、跡ニハ竹澤右京亮、究竟ノ射手百五十人勝リテ、取テ歸サレハ、遠矢ニ射殺サント巧タリ、大勢ニテ御通候ハヽ、人ノ見尤奉ル事モコソ候ヘトテ、兵衞佐ノ郎從共ヲハ、兼テ皆拔々ニ鎌倉ヘ遣シタリ、世良田右馬助、井彈正忠、大島周防守、土肥三郎左衞門、市河五郎（金勝院本有二衞門字一）、由良兵庫助、同新左衞門尉（第三十一卷新田義宗已下起二義兵一段、有二由良新左衞門入道信阿一、今無二入道字一者可レ疑也、）、南瀨口六郎（西源院本作二大瀨口一、金勝院本載二松田與市、澁谷孫七、堺壹岐權守、遠藤孫六左衞門一、）、總十三人ヲ（毛利家、北條家、金勝院、南都本、作二十二人一）、打連テ、更ニ他人ヲハ雜ヘス、ノミヲ指タル船ニコミ乘テ、矢口渡ニ推出ス、是ヲ三途ノ大河トハ、思ヒ寄ヌソ哀ナル、熟是ヲ譬レハ、無常ノ虎ニ追レテ、煩惱ノ大河ヲ渡レハ、三毒ノ大蛇浮出テ、是ヲ呑ント舌ヲ伸、其殘害ヲ遁レント、岸ノ額ナル草根ニ、命ヲ係テ取附タ

義興以下憤死ス　井彈正　世良田右馬助　大島周防守　由良兵庫助　由良新左衞門　土肥三郎左衞門　南瀨口六郎　市河五郎

乘船

レハ、黑白二ノ月ノ鼠カ、其草ノ根ヲカブルナル、無常ノ喩ニ異ナラス、此矢口ノ渡ト申ハ、面四町ニ餘リテ、浪嶮シク底深シ、渡守已ニ櫓ヲ盪テ、河ノ半ヲ渡ル時、取ハツシタル由ニテ、櫓楫ヲ河ニ落シ入、二ノノミヲ同時ニ拔テ、二人ノ水手同シ樣ニ河ニカハカハト飛入テ、ウフニ入テソ逃去ケル、是ヲ見テ向ノ岸ヨリ兵四五百騎（按、前作二三百騎一、誤）懸出テ、鬪ヲ咄ト作レハ、跡ヨリ鬪ヲ合テ、愚ナル人々カナ、タハカルトハ知ヌカ、アレヲ見ヨト歎テ、箙ヲ敲テソ笑ケル、去程ニ、水船ニ涌入テ、腰中計ニ成ケル時、井彈正、兵衞佐殿ヲ抱キ奉リテ、中ニ指擧タレハ、佐殿安カラヌ者カナ、日本一ノ不道人共ニ、タハカラレツル事ヨ、七生迄汝等カ爲ニ恨ヲ報スヘキ者ヲト、大ニ忿テ腰ノ刀ヲ拔、左ノ脇ヨリ右ノ肋骨迄カキ廻シカキ廻シ、二刀迄切給フ、井彈正、腸ヲ引切テ、河中ヘカハト投入、已カ吭二所刺切テ、自ラカウツカヲ飜、已カ首ヲ後ヘ折附ル音、二町許ソ聞ヘケル、世良田右馬助ト大島周防守トハ二人、刀ヲ柄口迄ツキ違テ、引組テ河ヘ飛入、由良兵庫助、同新左衞門ハ、船ノ艫舳ニ立アカリ、刀ヲ逆手ニ取直シテ、互ニ已カ首ヲカキ落ス、土肥三郎左衞門、南瀨口六郎（南瀨口、西源院本前作二大瀨口一、今相違、六郎、毛利家本作三郎一、此上同二本文一、亦相矛盾、）、市河五郎三人ハ、各袴ノ腰引チキリテ裸ニ成、太刀ヲ口ニクワヘ、河中ヘ飛入ケルカ、水ノ底ヲ潛テ、向ノ岸ヘ懸上リ、敵三百騎ノ（今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、）

首ヲ入間川ナル基氏ノ陣ニ送ル

作三五百騎一、中ヘ走入、半時許切合ケルカ、敵五人打取、十三人ニ手負セテ、同枕ニ討レニケリ、新田家譜云、義興、延文四年十月三日、於二矢口渡一自殺、非也、櫻雲記及井伊家譜、作二延文三年十月一、神明鏡又作二延文三年九月十九日一、其後水練ヲ入テ、兵衛佐殿、幷自害討死ノ首十三求出シ、酒ニ浸シテ、江戸遠江守、同下野守、竹澤右京亮、五百餘騎ニテ、左馬頭殿ノオハシマス武藏入間河ノ陣ヘ馳參ル、畠山入道斜ナラス悅テ、小俣少輔次郎（金勝院本云、名惟衡、非也、當レ作二義弘一、說見二第三十一卷一、）松田（金勝院本作二松田大藏大輔能宣一、）河村ヲ（金勝院本作二河村但馬守氏清一、）呼出シテ、此ヲ見セラルヽニ、仔細ナキ兵衛佐殿ニテオハシ候ケリトテ、此三四年カ先ニ、數日相馴奉リシ事トモ申出テ、皆涙ヲソ流シケル、見ル人悅ノ中ニ哀添テ、共ニ袖ヲソ濡シケル、

義興ノ履歷

後醍醐天皇ノ御前ニテ元服

此義興ト申ハ、故新田左中將義貞ノ妾ノ腹ニ出來タリシカハ、兄越後守義顯カ討レシ後モ、親父猶是ヲ嫡子ニハ立ス、三男武藏守義宗ヲ六歲ノ時ヨリ昇殿セサセテ時メキシカハ、義興ハ有ニモアラヌ孤ニテ、上野國ニ居タリシヲ、奧州國司顯家卿、陸奧國ヨリ鎌倉ヘ攻上リシ時、義貞ニ志アル武藏上野ノ兵共、此義興ヲ大將ニ取立テ、三萬餘騎ニテ奧州國司ニ力ヲ合セ、鎌倉ヲ攻落シテ、吉野ヘ參シタリシカハ、先帝叡覽有テ、誠ニ武勇ノ器用タリ、尤義貞カ家ヲモ興スヘキ者ナリトテ、重名德壽丸ト申シヲ、御前ニテ元服サセラレテ、新田左兵衛佐義興トソ召レケル、器量人ニ勝レ、謀巧ニ心飽マテ早カリシカハ、正平七年ノ武藏野合戰、鎌倉ノ軍ニモ、大敵ヲ破リ、萬卒ニ當ル事、古今イマタ聞サル處多シ、其後身ヲ側メ、只二三人（北條家、金勝院、）

義興ノ强勇

南都本、作二此二三年一、武藏上野ノ間ニ隱レ行給ヒシ時、宇都宮清黨カ三百餘騎ニテ（三百、金勝院本作二五百一、）取籠タリシモ討得ス、其行跡恰モ天ヲ翔地ヲ潛ル術アリト、怪シキ程ノ勇者ナリシカハ、鎌倉左馬頭殿モ、京都宰相中將殿モ、安キ心地オハセサリツルニ、運命窮リテ、短才庸愚ノ者共ニタハカラレ、水ニ溺レテ討レ給フ、懸リシ程ニ、江戸竹澤カ忠功拔群ナリトテ、則數箇所ノ恩賞ヲソ行ハレケル、アハレ弓矢ノ面目カナト、是ヲ羨ム人モアリ、又キタナキ男ノ擧動カナト、爪彈ヲスル人モアリ、竹澤ヲハ、猶モ謀反與黨ノ者共ヲ委細ニ尋ラルヘシトテ、御陣ニ留置レ、江戸二人ニハ暇タ（マ脫カ）フテ、恩賞ノ地ヘソ下サレケル、江戸遠江守（金勝院本載二同下野守康延一、此上作二能登一、龜鶴、）喜悅ノ眉ヲ開テ、則拜領ノ地ヘソ下向シケル、十月二十三日暮程ニ、矢口渡ニ下居テ、渡舟ヲ待居タルニ、兵衛佐殿ヲ渡シ奉リシ時、江戸カ語ラヒヲ得テ、ノミヲ拔テ船ヲ沈メタリシ渡守カ、江戸カ恩賞賜テ下ルト聞テ、種々ノ酒肴ヲ用意シテ、迎ノ舟ヲソ漕出シケル、此舟已ニ河中ヲ過ケル時、俄ニ天カキ陰リテ雷鳴、水嵐烈シク吹漲リテ、白波舟ヲ漂ハス、渡守周章騷テ、漕モドサントシ櫓ヲ盪テ舟ヲ直シケルカ、逆卷浪ニ打返サレテ、水手柁取一人モ殘ラス、皆水底ニ沈ミケリ、天ノ怒只事ニ非ス、是ハ如何樣義興ノ怨

江戸竹澤ニ恩賞

江戸矢口渡ニカヽル

義興ノ怨靈

正平十三年（延文三年）

江戸悶死ス

靈ナリト、江戸遠江守（西源院本有ニ叔姪字一）懼戰ヒテ、河端ヨリ引返シ、餘ノ處ヲコソ渡サメトテ、此ヨリ二十餘町アル上瀨ヘ、馬ヲ早メテ打ケル程ニ、電行前ニ閃テ、雷大ニ鳴ハタメク、在家ハ遠シ日ハ晩ヌ、只今雷、神ニ蹴殺サレヌト思ヒケレハ、御助候ヘ兵衛佐ト、手ヲ合セ虛空ヲ拜シテ逃タリケルカ、兎アル山ノ麓ナル辻堂ヲ目ニ懸テ、アレマテト馬ヲアヲリケル處ニ、黑雲一群、江戸カ頭ノ上ニ落下リテ、雷電耳ノ邊ニ鳴閃ケル間、餘リノ怖シサニ、後ヲ屹ト顧タレハ、新田左兵衛佐義興、火威ノ鎧ニ、龍頭ノ五枚兜ノ緒ヲシメテ、白栗毛ナル馬ノ額ニ角ノ生タルニ乘、アヒノ鞭ヲシト打テ、江戸ヲ弓手ノ物ニナシ、鐙ノ鼻ニ落サカリテ、徑七寸許ナル脛股ヲ以テ、カヒカネヨリ乳ノ下ヘカケス、フツト射洞サルヽト思ヒテ、江戸（西源院本有ニ遠江守字一）馬ヨリ倒ニ落タリケルカ、軈テ血ヲ吐、悶絕僻地シケルヲ、輿ニ載テ、江戸カ門ヘ昇著タレハ、七日カ間足手ヲアカキ、水ニ溺タル眞似ヲシテ、アラ堪カタヤ、是助ケヨト叫死ニ死ニケリ、（此下數行、論ニ因果ニ切評ニ江戸ニ、今除レ之、）又其翌夜ノ夢ニ、畠山大夫入道殿ノ見給ヒケルハ、黑雲ノ上ニ、大鼓ヲ打テ閧ヲ作ル聲シケル間、何者ノ寄來ルヤラント怪シクテ、音スル方ヲ遙ニ見遣タルニ、新田左兵衛佐義興、長二丈許ナル鬼ニ成テ、牛頭馬頭阿放羅刹共十餘人前後ニ從ヘ、火車ヲ引テ左馬頭ノオハスル陣中ヘ入ト覺テ、胸打騷テ

（藏王同）巻輪起縁神明大田新畫下加野上進寄植政平松年四寶延（口文藏武）圖古社神田新　社府京東　八六

新田大明神

武家ノ棟梁トモナルベキ器用

延文四年十月十日

夢覺ヌ、禪門夙ニ起テ、懸ル不思議ノ夢ヲコソ見テ候ヘト語リ給ヒケル、言ノイマタ終ラサルニ、俄ニ雷火落懸リ、入間河在家三百餘宇、堂舍佛閣數十箇所、一時ニ灰燼ト成ニケリ、是ノミナラス義興討レシ矢口渡ニ、夜々光物出來テ、往來ノ人ヲ惱シケル間、近隣ノ野人村老集リテ、義興ノ亡靈ヲ一社ノ神ニ崇ツヽ、新田大明神トテ、常磐堅磐ノ祭禮、今ニ絶ストソ承ル、不思議ナリシ事トモナリ、

〔参考太平記〕卷第三十四　義詮賜ニ將軍宣旨ニ事

鎌倉贈左大臣尊氏公薨シ給ヒシ刻、世ノ危事、深淵ニ臨テ薄氷ヲ蹈カ如クニシテ、天下今ニ反覆シヌト見ヘケル處ニ、是ソ誠ニ武家ノ棟梁トモ成ヌヘキ器用ト見ヘシ、新田兵衞佐義興ハ、武藏國ニテ討レヌ、去年マテ筑紫九國ヲ打從ヘタリシ、菊池肥後守武光モ、少貳大友カ翻テ敵ニ成シ後ハ、勢少ク成ヌト聞ヘシカハ、宮方ノ人々ハ、月ヲ望ムニハ曉ノ雲ニ逢ヘルカ如ク、アラマホシキ天ニ悲アリテ、意ニ叶ハヌ世ノウサヲ歎ケレハ、將軍方ノ武士トモハ、樹ヲ移シテ春ノ花ヲ看ルカ如ク、危キ中ニモ待事多クシテ、今ハ何事カ有ヘキト、悅ハヌ人モ無リケリ、

〔大乘院日記目錄〕一　延文四年十月十日、新田左兵衞佐義興、自害於武藏國、鎌倉左馬頭知行、

正平十三年（延文三年）

十月十三日　〔由良文書〕清和源氏　新田由良系圖

義興、左兵衛佐、正五位下、童名新田德壽丸、延文四年十月十三日於武州矢口渡自害、彼邊崇神社、新田大明神是也、

延文二年十月十三日　〔新島戰記〕（上野太田、岡文造氏所藏）　正平十二年丁酉十月十三日、北朝延文二年、誘殺義興公于矢口渡頭、

十月三日　〔新田或問覺心密記〕（上野）　同（正平）十四年己亥十月三日、新田義興ハ、武藏の國矢口討死、

延文三年十月十日　〔新田足利兩家系圖〕（鑁阿寺本）（系圖部ニ收ム）

〔喜連川判鑑〕（基氏）戊戌延文三、（中略）十月十日、新田義興ヲ武州矢口ノ渡ニテ誅ス、基氏、武州入間川ニ御陣ヲメサル、武備嚴重成ルニ依テ東國靜謐、

〔新田系圖〕（佐田家本）（筑後）（系圖部ニ收ム）

〔系圖纂要〕（藤氏井伊）二十一　直貞―太郎、直秀彈正左衛門、延文三年從新田義興、于矢口渡溺死、

十月三日　〔宮下過去帳〕（上野）（三日）〈　正莫禪定　新田左兵衛佐義興、延文四己亥十月三日　今新田大明神　武藏國矢口渡ニ而生害、尊像如雷公

〔佐野本系圖〕（十八秩父江戸）　〈六、二二、七六、

泰重―長門　江戸遠江守、正平七年壬辰十月十日、於武州矢口渡、討取新田義興、同二十三日於同所、爲義興怨靈絕入死、――高重

蓮沼滿家義興ニ加勢ス

〔諸家所藏文書〕（七小野姓）　蓮沼氏家譜　〈六、二二、七六

定政―滿家　從五位下、安藝守、自足利滿隆卿、諱字ヲ賜フ、文和元年二月、新田義宗、同義興、脇屋義治、於上野國起義兵、向相州鎌倉、足利尊氏對陣、此節新田方之從族下、有戰功、延文三年十月、再ヒ義興義兵之時、新田方ニ加勢、從將輩ニハ、得田、大井田、大舘、羽根川、土井、得能、他家之輩ニハ、大磯、小磯、蓮沼安藝守滿家等也、

（註）義興自殺ノ日、諸書ニヨリテ異ル。姑ク之ヲ太平記ニヨリテ是日ニ揭ク。

十二月二十三日　是頃、官軍忽那則平、安藝ニ於テ、尊氏黨ト戰フ。大館右馬亮、亦是ニ戰功アリテ、明年二月一日、某宮將軍、右馬亮ヲ褒シ給フトモ云フ。

〔忽那文書〕（伊豫）　〈六、二二、一七九、

於藝州致忠節之條、尤神妙、彌可抽軍忠之狀如件、

正平十三年十二月廿九日　（直冬）（花押）

忽那五郎（前平）左衛門尉殿

〔萩藩閥閱錄〕二十七ノ二（熊谷帶刀）　〈六、二二、一七四、

藝州凶徒對治事、致戰功之由、守護人所注申也、尤以神妙、急速可加救之由、被仰賴之

正平十三年（延文三年）

了、向後彌可抽忠節之狀如件、

延文三年十二月廿三日　　義詮公御判

熊谷彦四郎入道殿

〔福山史料集〕(新田氏研究二〇二頁)

於藝州致忠節之條、尤神妙者、彌可抽軍忠之條、宮將軍令旨如此、仍執達如件、

正平十四年二月朔日　　左中將(花押)

大館右馬助殿

(註)　正平六年十二月二十三日ニハ、大館右馬亮、歸順セル尊氏黨ト聯合シテ直冬黨ト戰ヒタレドモ、其ノ後尊氏ノ離叛、直冬ノ歸順ニヨリテ再ビ直冬黨ト聯合スル事トナリシナルベシ。然レドモ、右ノ福山史料集所收令旨、疑ヒナキニアラズ。

正平十四年(延文四年)己亥(二〇一九)

四月十日　新田世良田義政、新田庄世良田郷後閑ノ田宅ヲ、僧了哲ニ賣渡シ、其ノ年貢ヲ長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕(四上野)　△六、二二、四七四、

賣渡私領事

上野國世良田後閑三木内作人、子善後家在家壹宇、田伍段、并畠貳町八段、間事

右所領者、相傳當地行無相違地也、而依有要用、直錢伍拾貫文、限永代、所申了哲都閣賣渡實也、如此賣申之上者、更不可有子細、若於子々孫々中、至于致違亂輩者、永可爲不孝之仁者也、仍爲向後龜鏡、賣券之狀如件、

延文四年己亥四月十日　　散位源義政(花押)(56)

奉寄進世良田山長樂寺

上野國世良田郷後閑三木内作人、子善後家在家壹宇、田伍段、畠貳町八反、毎年々貢合拾貫文

間事、

右所者、代々相傳當知行無相違地也、而且爲祈禱、且爲亡者菩提、長樂寺所奉寄進也、子々孫々敢不可有子細、若至于違亂煩之輩者、永可爲不孝之仁、仍寄進之狀如件、

延文四年己亥卯月十日　　散位源義政(花押)(57)

世良田後閑内畠壹町貳段、梁町、堀内畠壹町六段三木村内田五段、已上田畠參町參段、

正平十四年(延文四年)

任正員御寄進之狀、長樂寺所渡申也、仍渡狀如件、

延文三年己亥四月十六日　僧　法　清（花押）(58)

政所沙彌常如（花押）(59)

世良田殿

奉寄進世良田長樂寺

上野國世良田郷後閑三木内作人子善後家在家壹宇、田五段井畠貳町八段、

右彼所者、世良田殿重代御領也、以直錢五十貫文、買給之、所奉寄進長樂寺也、仍本主御寄進狀賣券狀、同進上之、仍狀如件、

延文四年己亥四月廿日　沙彌道行（花押）(60)

〔長樂寺文書〕（貞治四年七月五日ノ條ニ收ム）

（註）正平五年十二月二十三日、同二十七日條、正平十九年七月二十八日條參照。

八月六日　鎭西ノ新田一族岩松・世良田・田中・桃井・江田・山名・里見等、菊池武光ト共ニ、懷良親王ヲ奉ジテ、筑後川畔大保原ニ於テ、小貳賴尙ノ大軍ト決戰ヲ遂ゲ、義ニ殉ズルモノ多シ。

四月十六日　小貳賴尙ヲ太宰府ニ出ル　八月六日　大保原合戰

官軍七月十日　筑後河ヲ渡ス　八月十九日　大保原合戰

〔佐賀文書纂〕（龍造寺文書坤）　△、六、二二、六四二、

肥前國龍造寺吉岡彌三郎家貞申軍忠事

右爲良氏（五條）、良遠竝菊池以下凶徒等退治、去四月十六日御出府之間、御共仕、猶筑前、豐前、肥前、筑後國々所々致宿直警固上、八月六日夜、筑後國大保原御合戰之時、分捕頸一、此段今泉孫六、和世彦三郎令見知畢、若此條僞申候者、八幡大菩薩御罰於可罷蒙候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

（延文四）八月　日　藤原家貞上

承了（少貳賴尙）（花押）

進上　御奉行所

〔木屋文書〕（筑後）　△、六、二二、六四四、

加一見了（五條良氏）（花押）

筑後國木屋彈正左衞門尉行實申軍忠事

右爲御對治太宰筑後守賴尙、同直資以下凶徒、去七月十九日御渡筑後河之時、令御共、於河北、岩田、福同原御陣、日夜致警固之忠、同八月六日夜、大保原御合戰之時、爲東手先勢十八人、其隨一、寅前切入、自丑刻至同七日巳刻、抽軍忠之間、若黨又五郎、惣扶

正平十四年（延文四年）

持人二郎三郎被疵、四郎三郎、彌二郎討死訖、然早下賜御判、爲備龜鏡、言上如件、

正平十四年八月　日

〔參考太平記〕卷第三十三　菊池合戰事

少貳、大友ハ、菊池ニ九國ヲ打從ヘラレテ、其成敗ニ從フ事、安カラス思ヒケレハ、細川伊豫守ノ下向ヲ待テ、旌ヲ擧ント企ケルカ、伊豫守、崇德院御靈ニ罰セラレテ、犬死シヌト聞ヘケレハ、力ヲ失ヒテ、機ヲ顯サス、懸ル處ニ畠山治部大輔カ、イマタ宮方ニハ從ハテ、楯籠タル六笠城ヲ攻ントテ、菊池肥後守武光五千餘騎ニテ、十一月十七日、（按、延文三年、）肥後國ヲ立テ、日向國ヘソ向ケル、道四日路カ間、山ヲ越川ヲ渉リテ、行前ハ嶮岨ニ、跡ハ難所ニテソ有ケル、少貳大友、菊池カ催促ニ應シテ、豐後國中ニ打出テ、勢汰ヲシケルカ、是コソ好時分ナリト思ヒケレハ、菊池ヲ日向國ヘヤリ過シテ後、大友刑部大輔氏時（貞宗入道愚鑑子、）旗ヲ擧テ、豐後高崎城ニ取登ル、宇都宮大和前司ハ、（金勝院本云名安知、）川ヲ前ニシテ豐前（今川家、金勝院本作豐後、）路ヲ塞キ、肥前刑部大輔ハ、（肥前、今川家、毛利家、北條家、南都、天正本作肥田民部大輔正員、）山ヲ後ニ當テ、筑後ノ道ヲソ塞キケル、菊池既ニ前後ノ大敵ニ取籠ラレテ、何クヘカ引ヘキ、只籠ノ内ノ鳥、網代ノ魚ノ如シト、哀マヌ人モ無リケリ、

菊池此二十餘年カ間、（餘、本文誤作レ四、今依二異本一改レ之、按、元弘三年、菊池初起レ兵、至二延文三年一、凡二十六年也、）筑紫九國者共カ軍立手柄ノ程ヲ、敵ニ受御方ニナシテ、能知透シタリケレハ、後ニハ、敵旌ヲ擧、路ヲ塞タリト聞ヘケレトモ、更ニ事トモセス、十一月十日ヨリ（十一月、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作三三月一、按、延文四年三月也、本文此上云、十一月十七日、菊池發二肥後一、赴二日向一、而今云二十一月十日矢合一者、於レ理不レ通、）矢合シテ、畠山治部大輔カ子息民部少輔カ（金勝院本作二民部大輔重隆一、）籠タル三俣城ヲ（上段云、畠山所レ據六笠城一耳、云々、今云二畠山三俣城一者、似二相違一、蓋異名一所矣、）晝夜十七日カ中ニ攻落シテ、敵ヲ討コト三百人ニ及ヘリ、畠山父子憑切タル三俣ヲ落サレテ、叶ハシトヤ思ヒケン、ツメノ城ニモタマラス、引テ深山ノ奥ヘ逃籠リケレハ、菊池今ハ是迄ソトテ、肥後國ヘ引返スニ、跡ヲ塞キシ大敵共、更ニ戰フ事ナケレハ、矢ノ一ツヲモ射ズ、己カ館ヘソ歸ケル、是迄ハイマタ太宰少貳、阿蘇大宮司、宮方ヲ背ク氣色ナカリケレハ、彼等ニ牒シ合テ、菊池五千餘騎ヲ率シテ、（五、金勝院本作レ六、）大友ヲ對治セン爲ニ、豐後國ヘ馳向フ、此時太宰少貳俄ニ心變シテ、太宰府ニシテ旌ヲ擧ケレハ、阿蘇大宮司是ニ與シテ、菊池カ迹ヲ塞カント、小國ト云處ニ（小國、金勝院、西源院本、作二小田一、恐非也、）九箇所ノ城ヲ構テ、菊池ヲ一人モ討漏サシトソ企ケル、菊池兵粮運送ノ路ヲ止ラレテ、豐後ヘ寄ル事モ叶ハス、又太宰府ヘ向ハンスル事モ難儀ナリケレハ、先我肥後國ヘ引返シテコソ、其用意ヲモ致サメトテ、菊池ヘ引返シケルカ（菊池下、金勝院本有二隈府字一、）阿蘇大宮司カ構タル九箇所ノ城ヲ、一々ニ攻落シテ通ルニ、阿蘇大宮司賴切タル手ノ者共三百餘人討レケレ

小貳、大友、菊池ニ從ヘリ

菊池武光日向ニ發向ス

大友氏時、菊池ニ叛ク

菊池、畠山ノ三俣城ヲ攻メ落ス

菊池、大友退治ノ爲豐後ニ發向ス

小貳叛ス

阿蘇叛ス

正平十四年（延文四年）

新田一族
菊池一族
太宰府ニ寄セントス

ハ、敵ノ通路ヲ止ル迄ハ思ヒ寄ス、我身ノ命ヲ希有ニシテコソ落行ケレ、去程ニ七月ニ今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、七月上有二延文四年字一、征西將軍宮ヲ大將トシテ、新田ノ一族、菊池一類、太宰府ヘ寄ルト聞ヘシカハ、少貳ハ陣ヲ取テ敵ヲ待ントテ、大將太宰筑後守賴尙子息筑後新少貳忠資今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作二賴高一下傚レ之、姪太宰筑後守賴泰筑後、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本及本文、此下作二越後一、今作二筑後一、恐非也、下傚レ之、朝井但馬將監胤信按二少貳家譜一、朝井、金勝院本作二朝日一、爲レ得、下傚レ之、筑後新左衞門賴信金勝院本作二賴延一、西源院本不レ載二胤信賴信二人一、窪能登太郎泰助、肥後刑部大輔泰親肥後、今川家、毛利家、天正本及本文、此上作二肥前一、今川家、毛利家、北條家、南都、天正本、此上作二肥田一、金勝院本、此上作二肥田民部大輔正員一、今悉飜餘、太宰出雲守賴光金勝院本作二賴益一、而載二同上野權守賴英一、山井三郎惟則、饗場左衞門藏人重高、同左衞門大夫行盛同、今川家、毛利家、西源院、天正本、作二言同一、金勝院本作二權藤一、下傚レ之、行盛、金勝院本作二行衞一、相馬小太郎毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作二宗右馬小太郎一、金勝院本又云、名宗邦、下傚レ之、木綿左近將監金勝院本云、名持有、下傚レ之、西河兵庫助毛利家本云、名顯景、金勝院本作二護一、草壁六郎、牛糞刑部大輔此上二人、金勝院本不レ出、松浦黨ニハ、佐志將監金勝院本云、名貞晴、田平左衞門藏人金勝院本云、名幸貞、千葉右京大夫金勝院本云、名胤清、草野筑後守筑後、今川家、毛利家本、作二筑前一、金勝院本云、名武繼、子息肥後守金勝院本云、名宗爲、高木肥前守肥前、北條家、南都本、作二肥後一、金勝院本云、名俊滿、綾部修理亮金勝院本云、名義左、藤木三郎藤、毛利家本作二藏藤一、金勝院本云、名惟定、幡田次郎幡田、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作二横内一、金勝院本作二波多三郎高遠一、高田筑前前司高田、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作二田宮内大輔善尙一、秋月一族、島津上總入道、澁谷播磨守今川家、毛利家本、作二下總守一、天正本作二六郎一、金勝院本云、名好敏、本間十郎金勝院本云、名政倫、土屋三郎今川家、毛利家、北條家、西源院、南都本、作二六郎一、天正本作二播磨守一、金勝院本云、名守業一、松田

小貳賴尙ニ味坂庄ニ陣ヲ取ル宮方ノ軍勢
新田一族
菊池一族

彈正少弼金勝院本云、名久昭、河尻肥後入道肥後、北條家、毛利家、南都本、作二備後一、非也、金勝院本、號寃信、託間三郎金勝院本云、名員正、鹿子木三郎金勝院本云、名員繼、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、載二高田對馬守一、同長門守、字都宮大和前司、同山田越中守一、此等ヲ宗徒ノ侍トシテ、都合其勢六萬餘騎、杜渡ヲ今川家、毛利家本、作二熊城渡一、前ニ當テ味坂庄ニ陣ヲ取、宮方ニハ先帝第六皇子、征西將軍宮按、懷良也、註二于前一、但爲二第六子一者非也、後醍醐帝皇子爲二第八子一、往々既註二于前一、可二并見一、洞院權大納言金勝院本云、名親弘、竹林院三位中將金勝院本云、名隆直、春日中納言金勝院本云、名興文、櫻雲記作二顯時一、花山院四位少將金勝院本云、名基直、土御門少將金勝院本作二左近中將一、左少辨國充一、坊城三位名有氏、葉室左衞門督金勝院本云、名惟言、日野左少辨今川家本作二左中將一、金勝院本作二左大辨一、資舞一、而載二同左少辨國充一、高辻三位北條家、南都、天正本、作二二位一、西源院本作二高二位一、下傚レ之、九條大外記九條、今川家、毛利家、北條家、南都、天正本、作二五條一、子息主水正此上三人、金勝院本不レ出、而載二高倉少將重群、菊亭左兵衞督嬰具、錦小路皇太后宮匡季、花岡中將充合、正親町出納秀字、坊門中將公求一、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、載二北畠中納言一、新田一族ニハ、岩松相摸守金勝院本云、名盛俊、世良田大膳大夫金勝院本云、名貞國、田中彈正大弼今川家、天正本、作二少弼一、金勝院本作二彈正忠義通一、桃井左京亮左、當レ作レ右、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作二大夫一、金勝院本云、名直邦、江田丹後守丹後、毛利家本作二丹波一、金勝院本云、名良宗、山名因幡守金勝院本云、名氏政、堀口三郎堀口、毛利家作二堀江一、恐非也、金勝院本云、名實直、里見十郎金勝院本云、名貞堅、而載二鳥山次郎利清一、侍大將ニハ菊池肥後守武光子息肥後次郎金勝院本及菊池系圖云、名武政、西源院本作二武家一、非也、姪肥前二郎武信二郎、北條家、南都本、作二三郎一、西源院本作二肥後小次郎一、按、武光弟武隆子也、今川家、毛利家本、作二武澄一、非也、武澄、武光弟也、非レ姪也、同孫三郎武明三、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作二下傚レ之、武信弟也、金勝院本作二氏明一、非也、赤星掃部助武貫今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作二武世一、恐非也、按二系圖一、武貫、赤星三郎有隆孫也、賀屋兵部大輔賀屋、毛利家本作二加賀一、今川家、金勝院本、作二加度一、恐非也、此下同二本文一、前後不レ一、金勝院本云、城越前守金勝院本、名親廉、而第三十六卷作二重經一、相飜餘、

正平十四年（延文四年）

名昌雄、見參（ミサヲカ）岡三河守（金勝院本云、名高子、）庄美作守（金勝院本云、名忠益、）國分二郎（金勝院本云、名行喬、）故伯耆守長年次男名和伯耆權守長秋（名和家譜、無二長秋一、）三男修理亮（金勝院本不レ出、）宇都宮刑部丞（金勝院本云、名氏紀、天正本載二紀伊常陸前司一、）千葉刑部大輔（刑部、北條家、西源院本、作二式部一、金勝院本、大輔作二少輔一、而云、名胤貞、毛利家、南都、天正本、作二木葉式部大輔一、）白石三川入道（金勝院本云、號慈鑒、）鹿島刑部大輔（鹿島、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作二岸島一、刑部、金勝院本作二治部一、而云、名宗定、）大村彈正少弼（少弼、金勝院本作レ疏、而云、名基明、）太宰權少貳（金勝院本云、名頼令、）宇都宮壹岐守（金勝院本云、名清德、）大野式部大輔（金勝院本云、名乘資、）派讃岐守（金勝院本ミナマタ不レ出、）溝口丹後守（丹後、毛利家、金勝院本、作二丹波一、金勝院本云、名能元、）牛糞越前權守（金勝院本云、名俊舒、）波多野三郎（金勝院本云、名幸康、）河野邊次郎（河野邊、西源院本作二河邊一、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、次郎下有二太郎字一、金勝院本云、名高廉、）稲佐治部大輔（大輔、金勝院本作二少輔一、而云、名光宇、）谷山右馬助（右、今川家本作レ左、金勝院本云、名宣高、）澁谷三河守（金勝院本云、名重氏、）同修理亮（金勝院本不レ出、）島津上總四郎（金勝院本云、名高澄、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都本、載二野中卿司一、）齋所兵庫助（金勝院本作二兵庫頭正登一、）高山民部大輔（大輔、今川家、毛利家本、作二少輔一、金勝院本云、名逸宿、北條家、西源院、南都、天正本、作二畠山民部少輔一、）伊藤攝津守（金勝院本云、名義鄕、）絹脇播磨守（天正本脇字、金勝院本、播磨下有二二郎字一、而云、名左逞、）土持十郎（金勝院本云、名公高、）合田筑前守（合田、西源院本作二藍田一、南都本作二秋田一、天正本、筑前作二筑後一、金勝院本云、名匡宣、）此等ヲ宗徒ノ兵トシテ其勢都合八千餘騎（八千、今川家本作二八百一、恐非也、毛利家本作二八萬一、）高良山、柳坂水繩山、（金勝院本作二耳納山一、西源院本作二御名場山一、）三箇所ニ陣ヲソ取タリケル、同七月十九日菊池ハ先己カ手勢五千餘騎ニテ、筑後河ヲ打渡リ、少貳カ陣ヘ推寄ル、少貳如何思ヒケン戰ハス、三十餘町引退キ、大原ニ（金勝院本作二嗣童原一、）陣ヲ取、菊池續テ攻ントシケルカ、交ニ深キ沼有テ、細道一ツ有ケルヲ、三所堀切テ、細橋ヲ

高良山
柳坂
水繩山
菊池筑後
河ヲ渡河ス

菊池夜襲ヲナス

毛利家、金勝院、天正本、作二繼橋一、）渡シタリケレハ、渡ヘキ樣モナカリケリ、兩陣僅ニ隔テ、旗ノ紋鮮ニ見ユル程ニナレハ、菊池態少貳ヲ恥シメン爲ニ、金銀ニテ月日ヲ打テ附タル旗ノ蟬本ニ、一紙ノ起請文ヲソ押タリケル、此ハ去年太宰少貳、古浦城ニテ、（古浦、金勝院本作二小浦一、）已ニ一色宮内大輔ニ討レントセシヲ、菊池肥後守大勢ヲ以テ後攻ヲシテ、少貳ヲ援タリシカハ、少貳悅ニ堪ス、今ヨリ後子孫七代ニ至迄、菊池ノ人々ニ向テ、弓ヲ引矢ヲ放ス事有ヘカラスト、熊野ノ牛王ノ裏ニ、血ヲシホリテ書タリシ起請ナレハ、今情ナク心變リシタル處ノウタテシサヲ、且ハ天ニ訴、且ハ人ニ知シメン爲ナリケリ、八月十六日ノ（櫻雲記作二延文三年七月十九日、菊池合戰一、按二上段次彼年月及菊池家譜、實延文四年也、然第三十四卷記、似レ爲二延文三年一、誠可レ疑也、詳註二第三十四卷一、可二合見一、）夜半許ニ、菊池先夜討ニ馴タル兵ヲ三百人勝リテ、山ヲ越水ヲ渡リテ搦手ヘ廻ス、宗徒ノ兵七千餘騎ヲハ、三手ニ分テ筑後河ノ端ニ副テ、河音ニ紛レ、嶮岨ヘ廻リテ推寄ル、大手ノ寄手今ハ近ツカント覺ケル程ニ、搦手ノ兵三百人、敵ノ陣ヘ入テ、三所ニ鬨聲ヲ揚、十方ニ走散テ、敵ノ陣々ヘ矢ヲ射懸テ、後ヘ廻テソ控タル、分内狹キ所ニ、六萬餘騎ノ兵、沓ノ子ヲ打タル樣ニ、役所ヲ作並ヘタレハ、鬨ノ聲ニ驚キ、何レヲ敵ト見分タル事モナク、此ニ寄合彼ニ懸合、喚叫テ追ツ返ツ同志打ヲスル事數刻ナリシカハ、少貳憑切タル兵三百餘人、同士討ニコソ討レケレ、敵陣騷亂テ、夜已ニ明ケレ

正平十四年（延文四年）

小武忠資戰死

ハ、一番ニ菊池次郎、件ノ起請ノ旗ヲ進メテ、千餘騎ニテ懸入、少貳カ嫡子太宰新少貳忠資（金勝院本作ニ頼資ニ、下後ニ之ニ、此上同ニ本文ニ前後不レ一ニ）、五十餘騎ニテ（五十、今川家、毛利家、北條家、南都、天正本、作ニ五千ニ、蓋本文、千誤歟ニ）、十、開ケルカ、父カ起請ヤ子ニ負ケン、忠資忽ニ打負テ、引返引返戰ケルカ、敵ニ組レテ討レニケリ、是ヲ見テ、朝井但馬將監胤信、筑後新左衛門、窪能登守、肥前刑部大輔（肥前、諸本或作ニ肥田ニ、或作ニ肥後ニ、前後不レ一ニ）、菊池孫次郎武明（孫次郎、本文此）百餘騎ニテ取テ返シ、近ツク敵ニ引組引組刺違テ死ケレハ、菊池孫次郎武明討死、（上作ニ孫三郎ニ、鯉鰭、系圖云、延文四年八月十六日武明討死、）同越後守（金勝院本作ニ越前守ニ、毛利家、北條家、南都、天正本、作ニ城越前守ニ、）賀屋兵部大輔、見參岡參河守（天正本不レ出、）莊美作守（毛利家本不レ出、）宇都宮刑部丞、國分次郎以下、宗徒ノ兵八十三人、一所ニテ皆討レニケリ、少貳カ一陣ノ勢ハ、大將ノ新少貳討レテ引退ケレハ、菊池カ前陣ノ兵、汗馬ヲ休テ控タリ、二番ニ菊池カ姪肥前二郎武信（西源院本、上文作ニ肥後小次郎ニ、今作ニ肥前小次郎ニ、前後不レ一ニ、今川家、毛利家本、此本文ニ相鯉鰭、）赤星掃部助武貫、千餘騎ニテ進メハ、（千、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作ニ二千ニ、）少貳カ次男太宰越後守頼泰（越後、本文此上訛作ニ筑後ニ、故今相鯉鰭、）并太宰出雲守、二萬餘騎ニテ相向フ、初ハ百騎充出合テ戰ケルカ、後ニハ敵御方二萬二千餘騎（西源院本無ニ二千字ニ）颯ト入亂、此ニ分レ彼ニ合、半時許戰ケルカ、組テ落レハ下重リ、斬テ落セハ首ヲトル、戰イマタ決セサル前ニ、少貳方ニハ赤星掃部助武貫ヲ討テ悦（系圖云、延文四年八月十六日、赤星武貫討死、）寄手ハ引返、菊池カ方ニハ太宰越後守ヲ生虜テ、勝閧ヲ揚テソ悦ケル、此時宮方ニ（自ニ太宰越後守ニ至レ此、西源院本不レ出、）結城右馬頭

宮ノ御勢新田一族菊池武光

親王傷キ給フ討タルヽ公卿多シ

新田一族奮戰シテ死スル人多シ

右、（今川家本作レ左、金勝院本云、名親昭、）加藤大夫判官（金勝院本云、名宗高、）合田筑前入道（入道、諸本此上作レ守、今相鯉鰭、）熊谷豐後守、三栗屋十郎、太宰修理亮、松田丹後守（松田、毛利家、西源院、天正本、作ニ松浦ニ、）同出雲守、熊谷民部大輔（金勝院本不レ出、初載ニ字野源七兵衛、下田右衛門尉、岩野藏人大夫、佐々木四郎兵衛ニ、）以下宗徒ノ兵三百餘人討死シケレハ、將軍方ニハ饗場右衛門藏人（右、諸本此上作レ左ニ、今相鯉鰭、）同左衛門大夫、山井三郎、相馬小太郎、木綿左近將監、西川兵庫助、草壁六郎（金勝院本載ニ長九郎兵衛、河崎八郎ニ、）以下憑切タル兵共七百餘人討レニケリ、三番ニハ宮ノ御勢、新田一族、菊池肥後守一手ニ成テ三千餘騎、（三千、毛利家本作ニ三萬ニ、）敵ノ中ヲ破テ、蜘手十文字ニ懸散サント、喚テ懸ル、少貳、松浦、草壁（毛利家、天正本、作ニ草野ニ、）山鹿、島津、澁谷ノ兵二萬餘騎、左右ヘ颯ト分レテ、散々ニ射ル、宮方ノ勢射立ラレテ引ケル時、宮ハ三所迄深手ヲ負セ給ヒケレハ、日野左少辨（諸異本或作ニ左中將ニ、或作ニ左大辨ニ、或作ニ左中辨ニ、或作ニ左少辨ニ、前後混雜ニ、）坊城三位、洞院權大納言（金勝院本作ニ左衛門督ニ、）花山院四位少將（金勝院本不レ出、）北山三位中將（金勝院本作ニ皇后宮亮ニ、）北畠源中納言（櫻雲記云、名信親、西源院本、此上三人不レ出、）春日大納言（天正本及本文、此上作ニ中納言ニ、今相鯉鰭、）土御門右少辨（今川家、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、及本文此上作ニ少將ニ、）高辻三位（此上二人、金勝院本不レ出、）葉室左衛門督ニ（金勝院本載ニ鷹司少將、高倉宰相中將、錦小路右大辨、冷泉少將ニ、）至迄、宮ヲ落シ進ラセント、蹈留リテ討レ給フ、是ヲ見テ新田一族三十三人（毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作ニ三十二人ニ、）其勢千餘騎横合ニ懸リテ、兩方ノ手先ヲ追マクリ、眞中ヘ會釋モナク懸入テ、引組テ落、打違ヘテ死、命ヲ限ニ戰ケルニ、世良田大膳大夫（大夫、金勝院本作レ亮、此上同ニ本文ニ相鯉鰭、）田中彈正大弼、岩松相摸守（此上二人、金勝院本

正平十四年（延文四年）

菊池武光ノ奮戰

小貳退却ス

不レ出、桃井右京亮（亮、毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、作二大夫一、而或作レ亮、前後不レ一、）堀口三郎、江田丹後守（此上二人、金勝院本不レ出、毛利家本、上文作二丹波守一、今同二本文一、相組顯、）山名播磨守（毛利家、北條家、西源院、南都、天正本、及本文、此上作二因幡守一、今相組顯、）敵ニ組レテ討レニケリ、菊池肥後守武光子息肥後二郎ハ、（北條家、南都本、作二三郎一、）宮ノ御手ヲ負セ給フノミナラス、月卿雲客、新田一族達許多討ルヽヲ見テ、何ノ爲ニ惜ムヘキ命ソヤ、日來ノ契約違ヘス、我ニ伴フ兵共、殘ラス討死セヨト勵シテ、眞前ニ懸入、敵是ヲ見知タリケレハ、射テ落サント、鏃ヲソロヘテ、雨ノ降如ク射ケレトモ、菊池カ著タル鎧ハ、此合戰ノ爲ニ、三人張ノ精兵ニ、草摺ヲ一枚充射サセテ、洞ラヌ札ヲ一枚マゼニ拵テ威タレハ、如何ナル强弓カ射ケレトモ、裏カク矢一モ無リケリ、馬ハ射ラレテ倒レルトモ、騎手ハ創ヲ被ラネハ、騎易テハ懸入懸入、十七度迄懸ケルニ、菊池兜ヲ打落サレテ、小鬢ヲ二太刀切レタリ、スハヤ討レヌト見ヘケルカ、少貳新左衞門武藤ト（異本或作二少貳武藤新左衞門一、爲レ得、按、少貳元武藤氏也、今以二武藤一爲二新左衞者、非也、）推並テ、組テ落、少貳カ首ヲ取テ鋒ニ貫キ、兜ヲ取テ打著テ、敵ノ馬ニ乘替、敵ノ中ヘ破テ入、今日ノ卯刻ヨリ、酉ノ下リ迄、一息ヲモ繼ス相戰ケルニ、新少貳ヲ始トシテ、一族二十三人、憑切タル郎從四百餘人（天正本作二百餘人一、）其外ノ軍勢三千二百二十六人（天正本作二二千餘人一、）迄討レニケレハ、少貳今ハ叶ハシトヤ思ヒケン、太宰府ヘ引退テ、寶萬嶽ニ引上ル、菊池モ、勝軍ハシタレトモ、討死シタル人ヲ算レハ、千八百餘人ト（天正本無二八百字一、餘、北條家、南都本、作二八十一一、毛利家、西源院本、作二十一人一、）記シタリケル、續テ敵ニモ懸ラス、姑ク手負ヲ助テコソ、又合戰ヲ致サメトテ、肥後國ヘ引返ス、其後ハ敵モ御方モ、皆己カ領知ノ國ニ楯籠リテ、中々軍モ無リケリ、

（註）正平十年十月是月條、正平十六年八月六日條參照。

九月下旬　道阿ナル人、新田氏ノ根據セル越後妻有莊附近ニ、吉野朝年號ノ供養塔ヲ造立ス。

〔供養塔〕（中魚沼郡橋村大字仁田所在）（新編會津風土記百九、魚沼郡之三、十日町組、仁田村、古碑ノ條ニ見ユ、）（越佐史料卷二、五八九頁）

（梵字三略ス）正平十二年（九月下旬）道阿敬白

（參考）左ニ越後魚沼三郡内ニ在ル吉野朝年號ノ供養塔銘文ヲ合收ス。（越佐史料卷二）

〔供養塔〕（中魚沼郡中野村大字友重所在）正平二年□□□（梵字一略ス）

〔同〕（中魚沼郡中野村大字坪山所在）正平二年（梵字一略ス）

〔同〕（南魚沼郡城内村大字藤原法音寺所在）正平八年八月日

〔同〕（南魚沼郡大崎村大字大崎字阪ノ下所在）正平九年八月十日

〔同〕（南魚沼郡大崎村大字大崎字諏方ノ木龍谷寺所在）正平十年二月十日　施主敬白（梵字略ス）

〔同〕（北魚沼郡戴神村大字長松所在）正平十二年九月十五日　淨阿敬白（梵字一略ス）

道阿

淨阿

〔同　　〕（同）　正平□□□（梵字一略ス）

（參考）左ニ新田氏鄉國上野ニ在ル吉野朝年號ノ供養塔銘文ヲ合收ス。

〔同　　〕（新田郡世良田村長樂寺裏發掘）（缺字）延元元年十一月三十日

〔同　　〕（山田郡毛里田村大字市場字道原所在）（阿彌陀三尊種字）延元丶年丙子（請地（カ）廣（カ））十月七日生年七十四

〔同　　〕（多野郡藤岡町淺見作兵衛氏所藏）南無多寶如來　正平己（カ）年（已丑ハ正平四年ナレド、或ハ乙巳カトモ思ハル、乙巳ハ正平二十年ナリ）

南無妙法蓮華經　丑（カ）二月日

南無釋迦牟尼佛

〔同　　〕（勢多郡木瀨村笑井安養院所藏）（阿彌陀種字）□（正カ）平七年二月日

〔同　　〕（勢多郡荒砥村大寶神社所藏）（缺字）正平七年四月日

十月一日　綱宗了紀、上野長樂寺住持トナル。

〔禪刹住持籍〕（上野州世良田山長樂寺歷代）廿六世綱宗諱了紀　晶月船、延文四己亥十月一日入寺、（康安元年カ）歲六十一、四月七日化緣龍菴、

正平十四年是歲　上杉憲顯、賊黨ニ轉ジ、越後三寶寺城ニ戰ヒ、尋デ東城寺城ヲ圍ム。

〔諸州古文書〕（二十五明年是歲混雜六條ニ收ム）

正平十五年（延文五年）庚子（二〇二〇）

四月十五日　源義冬ナル人、上野長樂寺ニ土地ヲ寄進ス。

〔長樂寺文書〕

（前欠）

跡一分不可有知行、爲後日相副惣領書狀者也、仍奉寄進之狀如件、

延文五年庚子四月十五日　源義冬判

（註）正平八年三月十九日條參照。

八月四日　畠山國淸、鎌倉ニ下向ス。途中、仁木義長ニ黨シ、之ヲ遮ル者多シ。新田大島義高、三河守護トナリテ之ヲ攘フ。

〔大乘院日記目錄〕一　八月四日、畠山道誓鎌倉下向、

〔參考太平記〕（卷第三十五）尾張小河東池田事

吉良治部大輔モ滿貞仁木カ語ヒヲ得テ、參河國守護代西鄉兵庫助ト一ニ成テ、矢矧ノ東ニ陣ヲ張、海道ヲ差塞キ、畠山入道カ下向ヲ支タリケルカ、大島左衞門佐義高義政子、當國守護ヲ賜リテ、星野行明等ト引合、國ヘ入ケル路次ノ（西源院本有ニ大野原字丶）軍ニ打負

正平十五年（延文五年）

テ、西郷伊勢ヘ落行ケレハ、吉良治部大輔ハ御方ニ成テ、都ヘソ出タリケル、

（註）正平十一年三月十八日條參照。

九月是月　天皇、攝津住吉社ニ行幸シ給フ。尋デ、宗良親王ニ西上ヲ命ジ給フ。

〔李花集〕雜歌　正平十五年東國（島山脈）の凶徒とも、河内國にせめ入て、行宮もあやうく聞えしかは、何ともして、ひとつ所へなと思ひ侍しことも、ふとはかなひ侍らて、心くるしうきゝ渡り侍し、ほとなふもとのことくに打したかへられて、あまさへ御入洛あるへきにて、住吉へうつろはせ行ほと、信濃より、とく力をあはせて、せめのほるへきよし仰られしに、秋冬までになりにけれは、をそく侍とて、いつまてか我のミひとり住吉のとはぬうらみを君にのこさんと仰られしかは、御返事に奏せさせ侍し、

我いそく心をしらはすみよしのまつ久しさを恨さらまし

冬の程は、馬の足なとも、木曾路の氷に難きなるへきよし申とて、

木曾路川あらしにさして行波のとゝこほるまてしはしまたなん

正平十五年是歳　上杉憲顯、越後（或ハ越中カ）赤田城ヲ攻ム。尋デ、又、新田義宗等ノ據レリト思ハルゝ越後上田城及ビ妻有城ヲ攻ム。

〔諸州古文書〕二十五　混雜六　△六、二三、三四七、

目安

石河遠江入道妙圓幷舍弟刑部少輔光親申軍忠事

右去延文四年、越後國御發向之間、最前馳參三寶寺城（西頸城郡）、致忠節、其後於東城寺城（刈羽郡）向陣（刈羽郡）田尻御陣、致宿直、同五年、被赤田城（刈羽郡）責之時、光親子息隼人佐光經、被疵之間、被檢知訖、又於上田（南魚沼郡）、妻有（中魚沼郡）兩城、所被數ケ度忠勤也、將又鎌倉御共仕、抽忠節者也、然則下給御證判、爲備末代龜鏡（鑑）、恐恐言上目安如件、

三寶寺城
東城寺城
赤田城
上田城
妻有城

貞治三年十一月　日

承了（上杉憲顯）（花押）

（註）上田城及妻有城ニハ新田義宗等據リシナルベシ。其ノ攻擊ノ紀年不明ナレドモ是年ニ掲グ。正平二十三年七月是月條參照。

正平十六年（延文六年・康安元年（三月二十九日改））辛丑（一三〇二）

八月六日　是ヨリ先、七月、新田一族、菊池武光ト共ニ、筑前北部ニ進出シ、賊黨小貳賴國等ト長鳥山及ビ飯盛細峰城等ニ戰フ　是日、官軍、賴國

ヲ油山ニ破ル。尋デ、大友氏時・小貳冬資等ヲ青柳ニ攻メテ、之ヲ追フ。

〔佐賀文書纂〕（龍造寺文書坤）（〇、六、二三、六五〇、）

肥前國龍造寺民部大夫家平申軍忠事

右爲菊池武光以下凶徒等退治御出之時、馳參松浦大村、宿直警固之刻、七月五日、筑前國御發向之間、屬于御手、加布利之城（於土郡）沒落之時、抽忠勤畢、次爲細峰之御陣、日夜致合戰訖、隨而迄于飯盛油山之御陣、抽忠節者哉、然早預御證判、欲備後代龜鏡、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、（延文六年九月日、附、少貳頼國（カ）證判、）

松浦大村
加布利城
細峯陣
飯盛油山

〔深堀記錄證文〕（八、肥前）（〇、六、二三、六五七、）

肥前國彼杵庄深堀五郎左衞門尉時勝申軍忠事

右去七月十七日、馳參筑前國長鳥山御陣、致宿直之處、少貳次郎頼國幷松浦以下凶徒等、引退本陣飯盛細峰城、取上油山之間、八月六日被追拂彼等之刻、抽忠節、翌七日馳參青柳御陣之處、被追落大友刑部大輔氏時（參議）、源孫二郎冬資等逆徒之刻、亦勵軍忠、同八日、爲敗軍誅伐、同國西郷御發向之間、同令供奉於葦屋鬼津以下所々御陣、無斷絶致宿直、同月十六日、爲殘黨對治、屬于守護代御手、豐前國規矩郡發向之間、同罷向、屬當郡無爲、迄□歸津之期致忠節畢、然早賜御判、爲備將來龜鏡、粗言上如件、

長鳥山陣
飯盛細峯城、油山
青柳陣
西郷葦屋鬼津
規矩郡

正平十六年九月　日

承了（菊池武光）（花押）

〔參考太平記〕（卷第三十六）　山名時氏攻落美作城（附菊池軍事（前略））

又筑紫ニハ、去七月初ニ（七月、毛利家本作二十月一、恐非也、櫻雲記作二六月一、）征西將軍宮、新田ノ一族二千餘騎（二千、金勝院本作三千一）菊池肥後守武光三千餘騎（三千、毛利家本作二五千一）博多ニ打テ出テ、香椎ニ陣ヲ取ト聞ヘシカハ、勢ノ附ヌ先ニ逐落セトテ、大友刑部大輔七千餘騎（七千、毛利家本作二三千一）太宰少貳五千餘騎（五千、毛利家本作二二千一）宗像大宮司八百餘騎、紀井常陸前司（紀井、金勝院本作二城井一、西源院本作二紀伊一）三百餘騎、都合二萬五千餘騎ノ勢（二萬五千、毛利家本作二六千一、天正本作二一萬三千五百一、北條家、南部本、作二二萬一、毛利家、天正本、與二前人數一符合、）一手ニ成テ大手ヘ向フ、上松浦、下松浦ノ一黨、兩勢ノ兵三千餘騎ハ、（三千、毛利家本作二一千一）飯守山ニ打上リテ、敵ノ後ヘソ廻リケル、寄手ハ目ニ餘ル程ノ大勢ニテ、シカモ敵ヲ取卷タリ、宮方ハ對揚マテモナキ小勢ニテ、シカモ平場ヲ陣ニ取タリケレ共、菊池カ氣分元來大敵ヲ拉ク心根ナリケレハ、敢テ事トモセサリケリ、兩陣ノ間僅ニ二十餘町ヲ隔タレハ、二十、（毛利家本作二三十一）數日互ニ馬ノ腹帶ヲ堅メ、鎧ノ高紐ヲハツサデ、懸リテヤ攻ル、待テヤ戰フト、際ヲ窺ヒ氣ヲタメラヒテ、徒ニ兩月ヲソ送リケル、菊池カ家ノ子、城越前守ハ、（金勝院本云、名重經、而第三十三卷作二親廉一、相違歟、）謀アル者ナリケレハ、山伏禪僧遁世者ナントヲ、忍々ニ松浦カ

懷良親王
新田一族
菊池武光
香椎ニ陣ス
大友氏時
飯守山

正平十六年（延文六年・康安元年）

陣へ遣シテ、其陣ノ人々ノ中ニ、誰某ハ御方ヘ内通ノ事アリ、何カシハ後矢射テ、降參スヘキ由ヲ申候ソ、野心ノ者共ニ、心ヲヲカデ犬死シ給フナナト、樣々ニソ申遣シケル、是ヲ聞テサル事ヤ有ヘキト思ヒナカラ、今時ノ人心、又有マシキ事ニテモナシト、互ニ心置合テ、危フマヌ人モ無リケリ、其後少程經テ、八月六日ノ曉、城越前守千餘騎ノ勢ニテ、飯守山ニ推寄、楯ノ板ヲ敲テ鬨ヲ咄ト作ル、松浦黨元來大勢ナリ、城ヨカリケレハ、此敵ニ落サルヘキ樣ハ無リケルヲ、城中ニ敵ノ内通ノ者多シト、敵ノ謀テ告タリシヲ、誠ト心得テ、御方ニ討ルナ、目ヲ賦レト云程コソ有ケレ、我先ニト落ケル間、寄手勝ニ乘テ、追懸追懸是ヲ討、夜明タリセハ一人モ助ルヘシトハ見ヘサリケリ、敵ナカラ手痛カランスルト思ヒツル松浦黨ヲハ、城越前守カ謀ニテ、容易ク攻落シヌ、少貳大友ヲ打散サン事ハ、掌ヲ指ヨリモ寄易カルヘシトテ、菊池、宮ノ御勢ト一手ニ成テ五千餘騎、明七日午刻ニ、香椎ノ陣ヘ推寄ル、松浦黨、昨日搦手ノ軍ニ打負ヌト聞シヨリ、哀引ハヤト思フ少貳大友カ勢トモナレハ、何カハ一タマリモタマルヘキ、鞭ニ鐙ヲ合テ我先ニト落テ行、道モ去得ス脫捨タル物具弓矢ニ目ヲ懸スハ、一日路餘追レツル、大手二萬餘騎ハ、二萬、毛利家本作ニ六千、天正本作ニ一萬、半モ生テ本國ヘ歸ヘキトハ見ヘサリケリ、

城越前守飯守山ヲ攻落ス

官軍香椎ヨリ賊黨ヲ追落ス

（註）正平十四年八月六日、正平十七年九月二十一日條參照。

九月二十三日　義詮、細川清氏ノ異志アルヲ疑ヒ、後光嚴院ヲ奉ジテ、新熊野ニ移ル。馳參ズル諸將ノ中ニ新田大島義雅アリ。清氏、若狹ニ走リ、明日、義詮、歸第ス。〔愚管記〕〔其他〕

〔參考太平記〕卷三十六　細川清氏背義詮、附子息元服事（前略）

今熊野ニ引籠リ、北條家、西源院、南都本云、將軍頓テ竊ニ内裏ヘモ急ト、新熊野ニ臨幸クルヘシト、三寶院ヲ以申入、云々、一橋引落シテ、所所ニカイ楯カキ車引並ヘテ、逆茂木轅門ヲ堅メテ、待懸給ヘハ、今川上總介企勝院本云、名武邦、非也、系圖作ニ範氏、毛利家本作ニ上總入道心有、然則心有者、範氏法名歟、然範氏父國範法名心省、難太平記云、心省亦參ニ今熊野ニ云々、由ヲ此見ヲ之、心有、蓋心省之訛也、宇都宮參河入道天正本不ル出、以下我モ我モト馳參ル、

○毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、載ニ今川伊豫守、企勝院本云、名興言、非也、毛利家本作ニ貞世ニ爲レ得、難太平記云、清氏下ニ天龍寺ニ之時、貞世在ニ遠州ニ云々、然則載ニ貞世ニ者非也、難太平記出ニ此下ニ、可ニ合見ニ、金勝院本亦載ニ飯川新藏人ニ　○天正本載、土岐大膳大夫入道、澁川左衞門佐義行左、系圖作ニ有、中務大輔直顯子、吉良兵部大輔義貴滿義子、大島左衞門佐義雅第三十五卷諸本作ニ義高ニ、可ニ井見ニ、下略

十月十九日　南海寶洲、上野長樂寺住持トナル。

〔禪刹住持籍〕上野州世良田長樂寺歷代　廿七世寶洲諱南海上品當寺前版橋源勤、康安元辛丑十月十九日入寺、歲四十歲後歷迂京萬壽東願、永德

正平十六年（延文六年・康安元年）

十月二十七日　細川清氏、吉野朝廷ニ降ル。〔柳原家記録〕〔愚管記〕〔其他〕

三癸亥十一月廿九日
化壽六十二歳、靈雲菴、

十一月二十八日　基氏、上野長樂寺ニ令シテ、天下靜謐ヲ祈禱セシム。

〔長樂寺文書〕(上野)四

天下靜謐祈禱事、殊可被致精誠之狀如件、

康安元年十一月廿八日　左兵衛督(基氏)(花押)

長樂寺(南海)長老

十二月三日　江田兵庫允、幕府黨湯川一族ト共ニ紀伊ニ留リテ軍務ニ勤ム。

〔湯川文書〕(下野)　ハ、六、二三、七八九、

注進　令同心光種致忠節間、望申御感御教書輩事、

一今度上洛分　湯河上藏人　湯河小池次郎左衛門入道(中三十名略)

一殘留紀州抽忠節分(中湯川氏等二十四名略)　江田兵庫允　多胡九郎左衛門尉　多胡藏人

右注進如件、

康安元年十二月三日　美濃權守光種(花押)

(註)　江田兵庫允、新田江田氏ナルヤ否ヤ不詳、江田ヲ名乘ル者、新田氏以外ニ多シ。唯試ニ茲ニ掲グ。

十二月八日　是ヨリ先、官軍、京都ニ迫ル。義詮、東寺ニ陣ス。新田大島義高等馳參ズ。是日、義詮、後光嚴院ヲ奉ジテ近江ニ走ル。尋デ二十七日、義詮、入京ス。官軍、戰ハズシテ京都ヲ退ク。

〔參考太平記〕巻第三十七　後光嚴院附義詮京落事

(前略)　宰相中將殿ハ、二日ヨリ(天正本作ニ朔日、東寺長者補任作ニ五日夜ニ)東寺ニ陣取テ著到ヲ附ラレケルニ、(毛利家、天正本云、吉良治部大輔清貞、澁川武藏守義行、一色修理大夫入道、今川上總介範氏、同伊豫守貞世、大島左衛門、佐々木道譽以下馳參云々、下同、天正本又載ニ佐々木高秀ニ)御内外樣ノ勢四千餘騎ト記セリ、サテハ敵ノ勢ヨリモ、御方ハ猶多カリケル、外都ニ向テ防ヘシトテ、時ノ侍所ナレハ、佐々木治部少輔高秀ヲ、攝津國ヘ差下サル、(下略)

官軍引ニ退京都ニ事

宮方ニハ、今度都ノ敵ヲ追落ス程ナラハ、元弘ノ如ク天下ノ武士皆コホレ落テ、附從ヒ進ラセンスラント思ハレケルニ、案ニ相違シテ、始テ參ル武士コソナカラメ、筑紫菊池、伊豫土居得能、周防大内介、越中桃井、新田武藏守、同左衛門佐、其外一族共、國々ニ多シトイヘトモ、或ハ道ヲ塞カレ、或ハ勢イマタ叶ハサレハ、一人モ上洛セ

新田武藏守

正平十六年(延文六年・康安元年)

ス、(中略)宮方ノ官軍、始ハ京都ニテコソ、兎モ角モナラメト申ケルカ、四方ノ敵雲霞ノ如クナリト告タリケレハ、是程ニ能シヨセタル天下ヲ、一時ニ失フヘキニアラス、先南方ヘ引テ、四國西國ヘ大將ヲ分遣シ、越前(毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作越後)爲レ得、下做レ之、按、越前高經之誤、而非ニ南朝之有レ也、時新田義宗義治在ニ越後一)信濃(宗良親王時在ニ信濃一)山名仁木ニ牒シ合セテ、又コソ都ヲ落サメトテ、同二十六日晩景程ニ、(西源院本作レ晩)南方ノ宮方宇治ヲ、經テ、天王寺住吉ヘ落ケレハ、同二十九日將軍京ヘ入給ヒケリ、

〔愚管記〕〔大乘院日記目錄〕〔其他〕

正平十七年(康安二年・貞治元年(九月二十三日改))壬寅(一三〇二)

二月二十一日　是ヨリ先、去年十一月、畠山國清、鎌倉ヲ出奔シ、城廓ヲ伊豆ニ構フ。同二十六日、基氏、波多高道・安保泰規等ニ令シテ之ヲ擊タシメタルモ、泰規、國清ニ内通ス。是日、基氏、岩松直國ヲ遣シテ、國清ヲ伊豆神餘城ニ攻メシム。尋デ、五月二十四日、直國、敵ノ夜襲ヲ退ク。基氏、之ヲ賞シ、且、援軍ヲ遣ス。尋デ、六月十二日、直國、走湯山ニ戰勝ヲ祈ル。尋デ、六月二十一日、基氏、直國ニ書ヲ與ヘテ、昨夜ノ風説子細ナカリシ趣ヲ、其軍並ニ立野城攻擊軍ニ傳ヘシム。

〔雲頂庵文書〕(乾相模)　〔安保文書〕(信濃)　〔鎌倉大日記〕(問注所)

〔正木文書〕一

畠山(國清)阿波入道以下輩誅伐事、

早相具白旗一揆、上野國藤家(イ脱)一揆、和田宮内少輔、令發向神餘城、可致忠節之狀如件、

康安二年二月廿一日　　基氏(花押)

岩松治部(直國)少輔殿

白旗一揆藤家一揆神餘城

岩松直國

〔正木文書〕(貞治三年六月十一日附基氏書狀)(明年五月二十八日ノ條ニ收ム)

〔正木文書〕

去廿四日夜討之事、致散々合戰、被追返御敵候之條、神妙候、手負討死交名披見候、殊被感思食候、此等子細以使節可被仰候、次無勢之由、被聞食候、荒手急速可差遣候、謹言、

(康安二)五月廿八日　　基氏(花押)

岩松治部(直國)少輔殿

〔豆州志稿〕十二古蹟　ハ、六、二四、三七、

金山城(田方郡、上)(略)岩松治部少輔殿又走湯山祠ニ藏ム、直國、走湯山ニ祈願ス

ル祈願文ニ、豆州神益城爲退治令發向之間、殊御祈禱可被致精誠之狀如件、康安二

正平十七年(康安二年・貞治元年)　一二〇三

年六月十二日、散位（花押）走湯山上衆徒御中、

〔正木文書〕一

去夜廿日依雑説、雖用心事候、無殊子細候、其段可被相觸軍勢等候、此趣立野城發向仁等方可有音信候、謹言、

（康安二）六月廿一日　　基氏（花押）

岩松治部（直國）少輔殿

三津・金山・修禪寺城

〔參考太平記〕（巻第三十七）　畠山道誓逆心事（此段除二稿國忠事一）

畠山入道道誓、舍弟尾張守義深、同式部大輔（義熙）兄弟三人ハ、其勢五百餘騎ニテ、伊豆國ニ逃下リ、三津（北條家、南都本、作三長演一）修禪寺三ノ城ヲ構テ、楯籠リタリト聞ヘケレハ、（中略）左馬頭安カラス思ヒケレハ、新田田中ヲ（今川家、北條家、金勝院、南都、天正本、作二岩松一）大將トシテ、軈テ武藏、相摸、伊豆、駿河、上野、下野、上總、下總、八箇國ノ勢二十萬餘騎ヲソ向ラレケル、畠山ハ此十餘年、左馬頭ヲ妹婿ニ取テ、榮耀門戸ニ餘ルノミナラス、執事職ニ居シテ、天下ヲ掌ニ握シカハ、東八箇國ノ者共ノ、命ニ代ラント昵ヒ近ツキケルヲ、我身ノ仁德ト心得テ、何トナクトモ、我旗ヲ擧タランニ、勢四五千騎モ馳加ハラヌ事ハアラシト憑シニ、案ニ相違シテ餘所ノ勢一騎モ附ス、結句一方ノ大將ニモト憑シ、狩野介モ降參シヌ、又其外相傳普代ノ家人、厚恩他ニ異ナル郎從共モ、日ニソヒ落失テ、今ハ戰フヘシトモ覺ヘサリケレハ、大勢ノ重テ向フ由ヲ聞テ、二（金勝院、西源院本作ヲ一、恐非也、）城ニ火ヲ懸テ、修禪寺城ヘ引籠ル、夢ナルカナ、昨日ハ海ヲハカリシ大鵬ノ、九霄ノ雲ニ摶カ如ク、今日ハ轍ニ伏涸魚ノ、三升ノ水ヲ求ルニ異ナラス、我身カヽルヘシト知タラハ、新田左兵衛佐ヲ、柱テ打マシカリケル物ヲト、後悔セリトイヘリ、早ク報ヒケルヲ、兼テ知サルコソ愚ナレ、

新田義興ヲ討チシヲ後悔ス

（參考）基氏ニ養育セラレシ新田四郎義一ナル人、此戰ニ總帥トシテ遣ハサルトノ傳アリ。又、岩松治部大輔眞義ナル人、立野城ヲ攻メテ功アリ。後ニ所領ヲ還サルトノ傳アリ。

〔鎌倉管領九代記〕一下　畠山道誓上洛（附同關東下向謀叛滅亡（前略））

畠山入道一言の義にも及ばず、父子兄弟一族三百餘人、（康安元）十一月廿三日に鎌倉を出て、伊豆の修禪寺に楯籠る、左馬頭殿きこしめして、新田四郎が妾の腹に生れし藤王丸とかや、世良田の城をせめおとせしとき、十四歳にていけどられ、基氏の御前に參る心ざま臆せず、餘りに眉目うつくしかりければ、たすけをきて召つかひ給ふ、元服をさせて、新田四郎義一と名のらせらる、武勇にして才智あり、これを大將

として、東八ヶ國の勢廿萬騎をつかはして、基氏は箱根の山中に出陣有て、荒手を入替てせめらるゝに、城の要害堅固なれば、中々落べきやうもなし、

〔喜連川判鑑〕基氏　辛丑康安元、十一月二十三日、畠山道誓政事ノ私曲重過シテ、關東ノ武士千餘人、連判ヲ以テ入間川殿（基氏）ニ訴フ、依之道誓御勘氣ヲ蒙リ、鎌倉ヘ逃登ル、後ニ豆州修禪寺ニ楯籠ル、新田四郎義一討手ノ大將トシテ、其外軍勢差向ラル、

新田義一

〔新田世良田諸抄〕新田岩松、横瀬、抑新田郡金山ノ本主ハ、岩松家ト號ス、足利遠江守義純ノ三男、岩松藏人太郎時兼ノ嫡孫六郎政經、外祖父新田下野前司頼有德川四郎義季之男、養子ト成リテ、下野太郎ト云フ、瑞泉寺基氏在鎌倉之後、上州世良田ノ城ヲ攻ラレシ時、新田四郎義重（秀俊、義重疑アヘシ、）妾腹ノ男藤王丸十四歳、若杉（一本ニ若槻、）太郎ガ爲ニ擒ニセラレカ（シ脱カ）、無双ノ美童タルヲ以テ、基氏是ヲ助命シ、寵愛淺カラス、十八歳ニノ元服、新田四郎義弐ト名謁セ、關東征伐一方ノ大將トセラル、貞治三年癸卯六月、武州若林野ノ合戰ニ、義弐勇ヲ揮テ忠死ス、基氏甚哀惜シ、下野太郎政經ノ息三郎經家ノ次男、治部太輔直國ニ、彼ガ遺迹ヲ興エテ、家系ヲ嗣ガシム、（下文ハ應永廿三年十月二日條ニ收ム、）

新田義弐

岩松直國

〔頼邦大僧正行狀繪詞〕岩松治部大輔眞義ハ、左馬頭義兼ノ嫡々トシテ、源家無雙ノ人ナリ、錦小路殿ニ心ヲヨセシニヨリテ隱家トナレリ、爰ニ關東管領畠山大輔眞義誓願ヲ攻落ス

畠山道誓

眞義ノ加持ニ頼印ヲ本領ニ還補シテ丹生郷受領ク

阿波入道道誓御不審ヲ蒙リシ時、本領子細アルベカラズトテ、召出サレテ、康安二年ニ豆州立野城ヘ發向ス、御所進發ニヨリテ、道誓ハ京都ヘ參、兄弟トモ降參ス、此條眞義ノ高名ナリ、鎌倉還御之後ハ、早速ニ本領還補スベキ所ニ、兎角延引シテ其期ナシ、隨テ眞義院主ヘ參テ申テ云、此事人間ノ力及ザル處也、併御加持力ヲ仰ベキヨシ歎申アイダ、八幡ノ本地ノ護摩ヲ、一七日勤行シテ、卷數ヲ遣サル、處ニ、同時ニ還補ノ御教書到來、手ヲ拍テ、法驗ノ地ニヲチザル事ヲ貴デ、上州丹生郷ノ慈悲寺ノ別當職ヲ奉ラル、當寺ハ中納言律師忠快ノ草創靈佛ニシテ、其瑞繁多ナリ、

（註）眞義ヘノ本領還補ハ八月十一日條ノ岩松直國ノ本領還補ヲサスカ。正平十二年八月廿一日、正平十八年八月廿六日、同十九年十月廿八日條參照。

七月二十四日　官軍細川清氏、細川頼之ト讃岐白峯ニ戰ヒテ敗死ス。

〔愚管記〕〔武家年代記〕〔參考太平記〕（延元三年閏七月二日條ニ一部ヲ收ム）〔其他〕

八月七日　斯波氏經・大友氏時等、官軍豐前守護代菊池武盛等ヲ破リ、七十餘人ヲ討チ取ル。〔阿蘇文書〕

八月十一日　基氏、岩松直國ノ本領ヲ還補ス。

〔正木文書〕

本知行分事、如元所還補也、早守先例、可被致沙汰之條如件、

康安二年八月十一日　　基氏（花押）

岩松治部少輔殿（直國）

（註）本年二月二十一日條所收ノ新田眞義ヘノ本領還補ト同一ナルカ。

岩松直國

九月二十日　新田鳥山右近將監頼仲、死ス。

〔新田正傳記〕（上野）　一觀應比、鳥山右近將監頼仲振猛威、剩寺尾押領ス、岩松前司頼宥下知トシテ、小此木馳向追却シ、漸鳥山ノ郷ヲ宛行ハル、西慶寺開基開山良覺法師、貞治元壬寅九月二十日遷化ナリ、鳥山頼仲ハ四郎義一ノ弟ナリ、

鳥山頼仲

〔宮下氏過去帳〕（上野）　良覺貞治元壬寅九月廿日遷化、實ハ鳥山右近將監頼仲新田義一舍兄也、

（註）正平五年五月七日、同七年六月十二日條參照。

九月二十一日　新田一族岩松・田中等、菊池武光ト共ニ、筑前長者原ニ斯波氏經等ヲ破ル。

〔佐賀文書纂〕（深江文書）　〈六、二四、四三一、

安富民部大夫泰重申軍忠事

右去九月十四日、豐後國萬寿寺（大分郡）御立之間、御共仕、所々致宿直候畢、同廿一日、御敵京都大將并冬資以下凶徒、依打出於長者原、御合戰之間、致種々軍忠、分捕之條、預御檢知畢、次松浦御敵蜂起之由、在國司筑前守令申之間、同廿五日福井罷下、致合力之處、御敵退散之由、依風聞令參上之處、御敵又鏡濱崎打寄之由、其聞候之間、十月五日、重福井罷下、在國司令同心、於一貴寺高嶽、對于御敵抽忠勤者也、將又冬資、宗像大宮司以下凶徒依打出、香椎大隅御出之間、十一月三日馳上、令御供者也、同廿一日、蓮打御發向之間、御共仕、同廿四日迄于歸津之期、御共之上者、下賜證判、可備將來龜鏡候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

廿一日長者原戰

一貴寺高嶽

正平十七年十一月廿五日　　承了（菊池武光）（花押）

田中彈正少弼

岩松相模守

〔參考太平記〕（卷第三十八）　菊池少武大友軍事（本文略）

〔北肥戰誌〕三　〈六、二四、四三五、探題氏經下向、付長者原軍之事

斯テ菊池ハ、探題以下大勢攻來ル由ヲ聞、サラハ中途ヘ出向テ可戰ト、宮ノ御供申シテ、大宰府ヲ打出ル、供奉ノ雲客ニハ、竹林院中納言、中院中將、武家ニハ、田中彈正少弼、岩松相摸守、宇都宮三河守、名和伯耆判官、兒島備後入道、原田、秋月、千葉、大村、高木、後藤、有馬、安富、其外近國ノ宮方相集テ、都合六万餘騎也、菊池ハ先陣ニテ、同名豐

前守、城越前守以下、松浦ノ波多、福井合テ一万四千餘騎、九月廿一日、或ハ九月廿七日、十月三日トモ、長者原ヘ陣ヲ取ル、

（註）正平十六年八月六日、本年八月七日、正平十八年是春條參照。

九月是月　畠山國清、基氏ニ降ル。尋デ流浪シテ死ス。時ノ人、是ヲ新田義興ノ怨念ニヨルト爲ス。

〔鎌倉大日記〕康安元年十一月廿三日、畠山阿波入道自（基氏）入間川殿御勘氣（中略）翌年康安二年九月、入間川殿御向箱根山、依降參、家人遊佐入道兄弟以下多被誅、

〔參考太平記〕（卷第三十四）吉野上北面夢附諸國軍勢還二京都一事（前略）

爰ニ二條禪定殿下ノ候人ニテ有ケル上北面、（中略）セメテ今一度先帝ノ御廟ヘ參リ、出家ノ暇ヲモ申サント思ヒテ、只一人御廟ヘ參リタルニ、（中略）餘リニ氣クタビレテ、頭ヲ低テ少マトロミタル夢ノ中ニ、（中略）遙ニ見上タルニ、先帝衰龍ノ御衣ヲ召レ、寶劔ヲ拔テ右ノ御手ニ提ケ、玉扆ノ上ニ坐シ給フ、（中略）暫有テ主上、俊基資朝ヲ御前近ク召レテ、サテモ君ヲ惱シ、世ヲ亂ル逆臣共ヲハ、誰ニカ仰附テ罰スヘキト勅問アレハ、俊基資朝ハ、此事ハ已ニ摩醯修羅王ノ前ニテ議定有テ、討手ヲ定ラレテ候、サテ如何ニ定タルソ、先今南方ノ皇居ヲ喪ハント仕候、五畿七道ノ朝敵トモヲハ、正成ニ（今川家本作ニ正儀一非也、）申附テ候ヘハ、一兩日ノ間ニハ、追返シ候ハンスラン、仁木右京大夫義長ヲハ、菊池入道愚鑑ニ申附テ候ヘハ、（愚鑑、今川家、毛利家、西源院、天正本、作二寂阿一爲レ得、菊池武時、法名寂阿、按、愚鑑、大友貞宗入道法名也、愚鑑或作二具簡一、）伊勢國ニテソ亡ヒ候ハンスラン、細川相摸守清氏ヲハ、土居得能ニ申附テ候ヘハ、四國ニ渡テ後亡ヒ候ヘシ、東國ノ大將ニテ罷上テ候、畠山入道、舍弟尾張守ヲハ、殊更嗔恚强盛ノ大魔王、新田左兵衛佐義興カ申請候テ、罰スヘキ由申候ツレハ、容易カルヘキニテ候、道誓カ郎從トモヲハ、所々ニテ首ヲ刎サセ候ハンスルナリ、中ニ江戸下野守、同遠江守（按、遠江守既死、是傳會說、不レ足レ信也、）二人ハ殊更ニ惡キ奴ニテ候ヘハ、龍ノ口ニ引居テ、我手ニ懸テ斬候ヘシトコソ申候ツレト奏シ申ケレハ、主上誠ニ御心ヨケニ打笑ハセ給ヒテ、サラハ年號ノ易ラヌ先ニ、疾々對治セヨト仰ラレテ、御廟ノ中ヘ入セ給ヒヌト見進ラセテ、夢ハ忽ニ覺ニケリ、（後略）

畠山道誓
新田義興
江戸下野守

〔參考太平記〕（卷第三十八）畠山兄弟楯籠修禪寺城附遊佐入道自害事（前略）

畠山入道兄弟、甲斐ナキ命助リテ、（中略）南都山城脇邊ニ、トアル禪院律院、或ハ山賤ノ柴ノ庵、賤カフセ屋ノサヒシキニ、袂ノ露ヲ片敷テ、夜ヲ重ヌヘキ宿モナク、道路ニ袖ヲヒロケヌ計ニテ、朝三暮四ノ資ニ、心有人モカナト、身ヲ苦シメタル有樣、聞ニ耳冷シク、見ルニ目モアテラレズ、幾程モナク兄弟共ニハカナク成ケルコソ哀

正平十七年（康安二年・貞治二年）

新田義興ノ怨靈

ナレ、毛利家、北條家、南都本、無二畠山兄弟死之句一、而毛利家本至二段尾一載二細川尾張守義深、式部大輔國經被レ殺事等一、皆同二天正本一、詳出二于上一、可二并見一。

人間榮耀風前塵ト、白居易カ作リ、富貴草頭露ト杜甫カ作リシモ理カナ、此人々去々年春ハ、三十萬騎カ大將トシテ、三十萬、毛利家本作二二十萬一、爲レ得、第三十四卷云、畠山率二二十萬一云云、南方ヘ發向シタリシカハ、德風遠ク扇テ、靡カヌ草木モナカリシニ、イツシカ三年ヲ過ス、生ナカラ恥ヲ曝シテ、敵陣ノ境ニサマヨヒヌル事、更ニ直事トハ覺ス、此人ニ出拔レ討レシ新田左兵衞佐義興怨靈ト成テ、吉野ノ御廟ヘ參タリケルカ、畠山ヲハ義興カ手ニ懸テ、生ナカラ軍門ニ恥ヲ曝サスヘシト奏シ申ケル由、先立テ人ノ夢ニ見テ、天下ニ披露アリシモ、誤ニテハナカリケリト、今コソ思ヒ知レタレ、

十一月二日　義詮、勳功ノ賞トシテ、越後風間入道某ノ跡ヲ大友氏時ニ與フ。

〔大友文書〕四（筑後）　△六、二四、五一七、

越後國風間入道跡事、任今月二日御下文、可被沙汰付大友刑部大輔氏時代之狀依仰執達如件、

貞治元年十一月六日　（斯波義將）治部大輔（花押）

上杉民部大輔（憲顯）入道殿

江田廣澤三吉

大島遠江守

十一月十八日　是ヨリ先、足利直冬・山名時氏等ノ官軍、美作・備前・備中・備後方面ニ進出ス。是日、義詮、新田大島義高・今川貞世・石橋和義等ヲ丹波ニ遣シ、時氏ノ軍ヲ擊タシメントス。

〔東寺百合文書〕ゑ十六下之二十二（山城）　△六、二四、五七五、

參河遠江兩國軍勢丹州發向事、來月二日必定可下著以隙給候由、所仰含守護人等候也、相圖無相違之樣可令相計狀如件、（貞治元年十一月十八日附、義詮（花押ノミ）ヨリ左衞佐入道宛）

〔參考太平記〕卷第三十八　諸國宮方蜂起附備前軍井桃井直常越中軍事（前略）

備後ヘハ富田判官秀貞カ子息彈正少弼直貞（今川家本作二尊貞一）八百餘騎、出雲ヨリ直ニ國中ヘ打出タルニ、江田廣澤三吉ノ一族馳著ケル間、程ナク二千餘騎ニナリニケリ（中略）丹波ハ京近キ國ナレハ、暫モ差置ヘキニアラス、急大勢ヲ下シテ、義尹ニ力ヲ合ヨトテ、若狹守護尾張左衞門佐入道心勝（尾張、天正本作二石橋一、毛利家、天正本、作二石橋左衞門佐入道一者、氏頼道世之後、道心不レ怠、出家終レ身、而今重二出於此一者相圖歟、毛利家本、尾張上有二石橋字一、二說共爲レ得、按二國太曆一、觀應二年七月二十九日、今曉左衞門佐和義出家、云々、詳出二第三十卷尊氏兄弟和睦段一、）遠江守護今川伊豫守、三河守護大島遠江守（天正本作二新田左衞門佐義高一、毛利家本作二大島遠江守新田義高一、而此下三人、作二四人一者恐非也、）三人ニ三箇國ノ勢ヲ相副テ三千餘騎、京都ヨリ差下サル。

十二月二十二日　基氏、伊豆宇具須鄕ノ地ヲ岩松直國ニ預ク。

正平十七年（康安二年・貞治元年）

〔正木文書〕一

伊豆國宇貝須郷（船賀郡）佐野常陸介跡事、所預置也、者守先例、可致沙汰之狀如件、

貞治元年十二月廿二日　　基氏（花押）

新田治部少輔（岩松直國）殿

正平十七年是歳　南海寶洲、上野長樂寺ニ至ル。

〔正統下南和尚傳〕（元德元年是歳條ニ收ム）

正平十八年（貞治二年）癸卯（二〇二三）

閏正月十六日　基氏、新田庄青根郷ノ地ヲ同國長樂寺ニ寄附ス。

〔長樂寺文書〕（貞治四年七月五日、明德三年八月十一日條ニ收ム）

三月二十四日　基氏、越後地方ノ鎮マリタルニヨリ、上杉憲顯ヲ徵シテ、關東管領ト爲ス。尋デ憲顯、越後ヲ發シテ鎌倉ニ赴ク。

〔上杉古文書〕一（上杉憲顯）　〇、六、二五、一七、

關東管領事、自京都度々雖被仰候、時儀難治候間、令延引候、今時分不可有子細候、不廻時日可被參候、就是非相構候、不可及異儀候、且爲天下候間、如此申候也、若遲々候者、支申仁なとも出來すへく候、此事多年念願事候間、此時就願大慶候、委細旨希源可申候、謹言、

（貞治二年）三月廿四日　　基氏（花押）

民部大輔（上杉憲顯）入道殿

〔鹿苑寺文書〕（山城）　〇、六、二五、一八、　上椙殿去月廿八日進發候き、東國定可屬無爲候歟、（下略）（貞治二年卯月十日附、妙葩ヨリ二階堂忻憲ニ與ヘタル書狀）

〔喜連川判鑑〕（基氏ノ條）　貞治二、六月、上杉民部大輔憲顯再任執事職、

〔鎌倉九代後記〕（略）　〔諸州古文書〕（正平十五年是歳ノ條ニ收ム）

四月八日　得藏（敎外）、上野長樂寺ニ入ル。

〔禪刹住持籍〕〔延寶傳燈錄〕（正平二十年正月三日ノ條ニ收ム）

是春　大内弘世、足利幕府ニ降リ、厚東武直ヲ門司城ニ攻ム。官軍新田岩松某、菊池・名和・宇都宮等ト共ニ厚東ヲ救援ス。

〔歷代鎭西誌〕九　〇、六、二五、四六、　正平十九年（八カ）甲辰、周防國大内介義弘（弘世ト同ジ）多々良氏、依細川右馬頭（頼之）誘、降參于武家、爲長門周防幷豐前國守護職、長門前司厚東駿河守處奪長州、忽叛武家、屬於南方、乃賜帥宮之令旨、渡于豐前、入門司城、大内之軍逐厚東至豐州、厚東請援於太宰府、名和、宇都宮、岩松提帥三千師、爲門司之援、菊池武勝卒（率カ）兵二千、

岩松救援ス

正平十八年（貞治二年）

馬岳城

加于門司城、原田、秋月、山鹿、麻生、宗像等五千許人、同會于豐前厚東矣、豐前人城井出羽守不從宮方、招大内義弘、時義弘在蘆屋、來入於馬岳城對陣於宮方諸軍矣、（下略）

〔舊典類聚〕十一上　山田聖榮自記　△六、二五、四三、（貞治二年五月二日附、師久訴陳狀）

〔參考太平記〕卷第三十九、　大内介降參武家事

〔北肥戰誌〕三、△六、二五、四五、探題氏經沒落之夏

（註）　去年九月二十一日、明年七月是頃條參照。

岩松直國

五月二十八日　基氏、武藏瀧瀨郷下手墓村ヲ岩松直國ニ與フ。

〔正木文書〕一

武藏國榛澤郡瀧瀨郷内下手墓村事、所宛行也、者早守先例、可被致沙汰之狀如件、

貞治二年五月廿八日　　基氏（花押）

岩松治部（直國）少輔殿

岩松治部少輔直國申、武藏國榛澤郡瀧瀨郷内下手墓村（安保信乃入道跡）事、守去月廿八日下文之旨、不日可沙汰付下地於直國之狀如件、

貞治二年六月二日　　基氏（花押）

畠山阿州安保入道

岡部出羽入道殿

手波賀郷以前御拜領之事、安保信濃入道過失之段者、畠山阿州爲御敵被楯籠伊豆城之時、彼安保入道、畠山阿州ニ同意之事、依無其隱、被召上鎌倉、已可蒙御不審御沙汰落居之處、兩寺之爲訴訟、大喜和尚申口にて御申候間、被助命、著大衣候、拜領之地者、皆被召候かと存候、

貞治三年六月十一日　　基氏（瑞泉寺殿）御判

小嶋勘解由左衞門入道申通にて書進上申候、安保信濃入道ハ今の信濃守ニ　ハおうちにて候、

八月二十六日　是ヨリ先、芳賀高名等、越後守護職ヲ替ヘラレテ、上杉憲顯ヲ擊タントス。是日、基氏、高名等ヲ擊チテ武藏岩殿山ニ破ル。此戰ニ岩松治部大輔、基氏ニ代リテ死セントス。岩松ノ家臣金井新左衞門、主ニ代リテ戰死ス。

〔額田小野崎文書〕〔集古文書〕二十四　目安類中村貞行目安〔畑野靜司氏所藏文書〕〔其他〕

〔參考太平記〕卷第三十九　芳賀禪可與足利基氏合戰事

正平十八年（貞治二年）

岩松治部大輔、基氏ノ身代トナル

金井新左衛門主人岩松ノ身代トナル

（前略）左馬（基氏）頭ノ御方ニ岩松治部大輔ハ、（按、名直國、下野太郎政經子也、）ヨク慮有テ、軍ノ變ヲ籌ル人ナリケレハ、大將左馬頭殿ノ鎧ノ毛ヲ、敵何樣見知ヌラント推量シテ、御大事ニ替ラント思ハレケレハ、我今マテ著給ヘル紺絲ノ鎧ニ、鎌倉殿ノ白絲ノ鎧ヲ俄ニ著セ替奉リテソ控ヘタル、暫有テ兩陣又亂合テ、入替入替戰ヒケル、岡本信濃守白絲ノ鎧著タル岩松ヲ、左馬頭殿ソト目ニ懸テ、組テ討ントテ相近附、岩松ハ亦元來左馬頭ノ命ニ代ラント、鎧ヲ著替シ上ハ、ナシカハ命ヲ惜ムヘキ、二人共ニ靜々ト馬ヲ歩マセ寄テ、アハヒ已ニ草鹿ノアヅチ長ニ成ケル時、岩松カ郎等金井新左衛門、岩松カ馬ノ前ニ馳塞テ、岡本ト引組、馬ヨリドウト落ケルカ、互ニ中ニテ刺違ヘテ、共ニ命ヲ止テケリ、岩松ハ左馬頭ノ命ニ代ラント鎧ヲ著カヘ、金井ハ岩松カ命ニ代リテ討死ス、主從共ニ義ヲ守テ、節ヲ重スル忠貞、有カタカルヘキ人々ナリ、

〔鎌倉大草紙〕（應永廿三年十月二日ノ條ニ收ム）

（參考）又、此戰ニ新田四郎義式、戰死ストノ說アリ。

〔新田世良田諸抄〕（正平十七年二月二十一日ノ條ニ收ム）

（註）正平十二年八月二十一日、同十九年十月二十八日條參照。

九月十日　是ヨリ先、足利直冬、備後ヲ沒落シ、山名時氏、足利幕府ニ降ル。是日、義詮、之ヲ小早川春平ニ告グ。〔小早川什書〕〔參考太平記〕（卷第三十九）

十二月二十九日　基氏、上杉憲顯ヲシテ、曾テ尊氏ノ新田大島義政ト走湯山トニ折半セシ上野淵名莊ノ內ナル花香塚實相院方ノ地ヲ大僧都賴印ニ交付セシム。尋デ明年正月十六日、之ガ交付ヲ了ス。

〔相州文書〕（十八、鎌倉郡文書、鶴岡八幡宮供僧莊嚴院所藏）　△六、二五、二九九、

上野國（緋名山）滿行寺執行中納言大僧都賴印申同國淵名庄內花香塚實相院方事、早任安堵下文、可被沙汰付下地於寺家之狀如件、

貞治二年十二年廿九日　（花押）（基氏）

上楣民部（憲顯）大輔入道殿

賴印淵名庄花香塚

上野國淵名庄內花香塚實相院方事、任御施行旨、沙汰付下地於中納言大僧都賴印代候畢、仍渡狀如件、

貞治三年正月十六日　教阿（花押）

（註）正平七年閏二月十六日ノ條參照。

正平十九年（貞治三年）甲辰（一三〇二四）

六月十二日　基氏、岩松直國ノ所領新田庄由良郷ノコトヲ足利幕府ニ申達ス。

〔士林證文〕二（肥前）　△六、二五、八二九、

新田治部少輔（岩松）直國申上野國新田庄由良郷事、可被經御沙汰候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

貞治三年六月十二日　左兵衛督基氏（花押）

進上　治部大輔殿（新田義貞）

七月二十八日　新田世良田義政、基氏ト戰ヒ、上野如來堂ニ於テ自殺ス。

尋デ八月二日、基氏、用心ノ爲、南部右馬助ヲ召ス。

〔鎌倉大日記〕　貞治三年、甲辰、上州住人世良田伊豫守義政、七月廿七日、蒙御勘（勘カ）気、同廿八日、被向討手、於如來堂自害、

〔常樂記〕　貞治三年甲辰　八月、勢良多兄弟三人幷梶原入道子息、於鎌倉被討、

〔系圖纂要〕六十三　清和源氏十二　岩松　△六、二六、九四、

政經―義政　岩松太郎、新田伊豫守、自父政經譲與新田領及苗字、元弘亂、與義貞朝臣起兵、貞治三年七ノ七、基氏兵來攻自殺、（新田岩松家譜異事ナシ）

〔喜連川判鑑〕基氏　甲辰　三、七月二十七日、世良田伊豫守義政御勘氣ヲ蒙ル、同二十八日、討手ヲ向ラル、義政如來堂ニ入テ自害、

七月二十八日自殺説

七月七日自殺説

八月鎌倉ニテ戰死説

〔萬澤文書〕（後鑑卷六十六所載）

依義政（世良田）景安（紀原）誅伐事、所有御用心也、早不廻時日、可馳參之狀如件、

貞治三年八月二日　基氏判

南部右馬助殿

〔鎌倉九代後記〕（貞治三年）同年七月廿七日、世良田伊豫守義政、基氏ノ命ニ背ク、同廿八日、討手ヲ向ラル、如來堂ニテ自殺、

〔七卷册子〕（貞治三年南方正平十九年）七月上旬ノ比上野國ニ於テ新田ノ世良田伊豫守義政兵ヲ揚、鎌倉基氏ト度々合戰アリト、云々、

七月下旬上野ノ國合戰、世良田等敗北、義政以下討死スト、云々、

（註）　正平十四年四月十日條、本年十月二十八日條參照。

七月是頃　肥後官軍ノ將、阿蘇惟澄、卒ス。其ノ追啓狀（年月日不詳）中ニ新田宗覺ナル人アリ。

〔阿蘇家譜〕五　△六、二五、九六五、

追言上、

正平十九年（貞治三年）

新田宗覺手物

惟澄此間合戰之次第、同注進候、此外肥後國菊池木城、當時合志入替武士令楯籠、去ル十五日、武光令發向、追落外城燒拂、打取凶徒廿餘人了、同十六日、追落隈部城、筑後國吉木一族等、去年屬朝敵、引入冬綱代官楯籠之、去八日夜、當國官軍寺尾八郎相談光五郎三郎永宗打入彼城、討取守護代薩摩孫三郎男了、新田宗覺手物、黑木西智手物等、同十六日、囚徒元吉城引退了、筑後肥後當時令對治所々候、追可言上候、恐惶謹言、（家讃、此ノ後ニ「右副書一篇、吉野ヘ訴ヘし申狀などの追啓とみゆれど、いつ頃の物とも今詳ならず云々」トテ種々考證シ、正平三年以後ノモノナラント云ヘリ）

（註）去年是春條參照。

九月四日　基氏、上杉憲顯ニ令シテ、曾テ尊氏ノ新田大島義政ト走湯山トニ折半セシ上野淵名庄ノ半分ノ地ヲ走湯山密嚴院別當光濟ニ交付セシム。

〔三寶院文書〕（五十二　山城）　△、六、二五、五九六

被下上杉之內書

密嚴院別當職事、三寶院僧正忠（光濟）□□□（務異他之カ）間、宛行畢、定於京都聞候哉、寺領以下事、無相違樣申御沙汰候者、殊爲悅候、謹言、

九月四日　御判（基氏）

（貞治三年カ）

上杉入道（憲顯）殿

御端書　淵名庄半分事、早速可被請□□（取　候カ）

（註）去年十二月二十九日條參照。

九月十六日　義詮、新田遠江彥五郎直明ニ令シテ、相模極樂寺地藏院領上總二宮庄小林鄕半分ノ他ヲ同寺雜掌玄充ニ交付セシム。尋デ十月二日、直明、之ヲ遵行セシ由ヲ幕府ニ報ズ。

〔相州文書〕（十四　鎌倉郡四　極樂寺村極樂寺藏）　△、六、二六、二六七、

極樂寺雜掌玄充申當寺地藏院領上總國二宮庄內小林鄕半分事、早守寄附狀等、沙汰付下地於雜掌、可全向後所務、更不可有緩怠之狀如件、

貞治三年九月十六日　源直明（義詮）（花押）

新田遠江彥五郎殿

極樂寺雜掌玄充申上總國二宮庄小林鄕半分事、任被仰下之旨、遵行任了、仍執進請取狀候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

貞治三年十月二日　源直明

正平十九年（貞治三年）

進上　御奉行所

（註）右新田遠江彦五郎直明ハ嘉暦二年（一九八七）十一月二日條ニ見ユル新田遠江彦五郎入道妙西ト同一人ナリヤ否ヤ不詳。正和二年十二月二十一日條參照。

十月十二日　基氏、僧竺心ヲ上野長樂寺住持トナス。

〔空華集〕仙竺心住長樂江湖疏

貞治甲辰夏、朝廷有旨、關東幙府始置行宣政院、以十州管內禪敎諸刹屬焉、歲之冬十月十二日、府君在武衞大將軍源公（基氏）、躬領院事、公選住持、廣搜遺佚、以擇材、於是妄庸濫進之弊革矣、長樂禪寺適虛席、前崇壽竺心仙公禪師、首中其選、可謂允矣、凡我江湖、喜公道行而善類拔者、緝詞賀慶云、

選士無它、謀在衆而斷在獨、擧賢有道、觀其行以察其言、若冰壺懸淸秋、豈明月混濁水、天所命也、人焉廋哉、某行介而和、言雅而婉、入水晶宮而侍瑤池席、名播遐方、賓賜谷日以升若木枝、化行故里、矧茲公選之始擧、快覩甲科之先登、長樂曙鐘赤城暮霞、詩興知幾首、二頃秋雲、一池春藕、道香已二生、我正彈冠、公其視篆、

〔五山群綱考〕△六、二六、三三四、崇壽仙竺心、住長樂、貞治甲辰十月十二日、

〔禪刹住持籍〕（山城）上野州世良田山長樂寺歷代　廿九世竺心、諱景樹（ヤヽ）、嗣南山雲、渡宋云々、四月廿一日示寂、

十月二十八日　基氏、佐貫師綱・高田忠遠等ニ令シテ、新田世良田義政ノ跡新田莊江田郷ヲ新田治部大輔代官ニ交付セシム。

〔正木文書〕一

上野國新田庄內江田郷（世良田義政）新田伊與守跡、事

早高田遠江守相共莅彼所、守去月廿八日御下文之旨、可被沙汰付下地於新田治部太輔代之狀、依仰執達如件、

貞治三年十一月九日　　左近將監（花押）

佐貫駿河守殿

新田伊豫守

上野國新田庄內江田郷新田伊與守跡、事

任去月廿八日御下文幷今月九日御施行之旨、讃岐（佐貫）駿河守相共莅彼所、打渡下地於新田治部太輔代之處也、仍渡狀如件、

貞治三年十一月廿日　　遠江守忠遠（高田）（花押）

上野國新田庄內江田郷（新田伊與守跡、）事

任去月廿八日御下文幷今月九日御施行之旨、高田遠江守相共莅彼所、打渡下地於新田治部太輔代之處也、仍渡狀如件、

貞治三年十一月廿日　　前駿河守（佐貫）師綱（花押）

（註）去年八月二十六日、今年七月二十八日條參照。

正平十九年是歲　足利幕府、上杉憲春ヲ關東執事ト爲ス。

正平二十年（貞治四年）乙巳（二〇二五）

正月三日　上野長樂寺得藏（教外）、寂ス。

〔禪刹住持籍〕（上野州世良田山長樂寺歷代山號）　廿八世、教外、諱得藏、（嗣明極楚俊）貞治二癸卯四月八日入寺、歲五十九、貞治四乙巳正月三日示寂、寶光院、

〔延寶傳燈錄〕（二十七臨濟宗）　南禪明極楚俊禪師法嗣

上野州長樂教外得藏禪師、初出世攝之棲賢、次住長樂、高識博達、辯若建瓶、包笠萍水逢源者多、上堂靈光獨耀、迥脫根塵、上士悟之明中不見跡、下士迷之暗裏施文彩、所以道、三級浪高魚化龍、癡人猶戽夜塘水、且道、迷悟明暗作麼生分、良久曰、向下文長、且待來日、師應常州檀越之請、革鹿鳴根本教寺、播揭宗乘、寺衆奉爲中興祖焉、貞治四年正月三日、安然而化、

〔廣智國師語錄〕（四偈頌）　教外

單傳直示絕言詮、之遠依前打那邊、向上全提還不是、德山臨濟退三千、

二月五日　京廷、春日社造營ノ棟別錢十文ヲ諸國ニ課ス。義詮、之ヲ諸國ニ令スル事、他ニ同ジ。

〔春日神社文書〕（四大和）　一、六、二、六、七、一八、

春日社造替新諸國（種別拾文）□□□□事、所被下綸旨也、參川國分可致嚴密沙汰狀如件、

貞治四年二月五日　　新田左衛門佐（義高）殿　　（花押）

三月五日　義詮、岩松直國ノ本領ヲ安堵セシム。

〔正木文書〕一

本領事、不可有相違之狀如件、

貞治四年三月五日　　岩松治部少輔（直國）殿　　（義詮）（花押）

七月五日　上野長樂寺了宗、寺領目錄ヲ製ス。

〔長樂寺文書〕

世良田長樂寺領所目錄事

合

一所　女塚郷　寛元四年□月十一日　徳川義季

在所坪付略之　沙彌榮勇寄進之

一所　世良田郷内在家一字條正壇供田　同前

康元二年□□十日　前參河守源朝臣頼氏寄進之　頼氏

一所　江田堂垣内　同前　建治三年十二月廿三日　淨院寄進之　淨院

一所　今井堀内御堂地　弘安三年庚辰二月十一日（二カ）　源輔村

源輔村寄進之

一所　上今井内道忍跡屋敷　弘安□（十）年十一月三日源資村寄進　慈圓念空

坪付略之　同前

一所　鳥山郷内在家　永仁五年丁酉六月十一日　慈圓念空兩人在判

一所　南女塚村内　元亨二年十一月廿日　淨院寄進之

在家二字　同前

一所　小角田村内田地　同前　元亨三年癸亥十月十七日源滿義寄進　世良田滿義

一所　小角田村　同前　嘉暦三年戊辰六月一日　源滿義寄進之

一所　小角郷内畠地　同前　元德二年四月廿一日源滿義寄進之

一所　小角郷内　同前　元德二年十二月廿三日源滿義寄進之

一所　那波郡内　善業寺　同前　元德三年七月十三日買得領主紀氏寄進之　紀氏

一所　出塚村寄北　觀應三年□　尼了觀寄進之　尼了觀

一所　後閑三木村内　延文四年四月十日　世良田義政

地頭義政寄進買領主道行奉進也、

一所　鳥山内寺領

一所　村田　武州　微都寺寄進地

一所　中條　武州　寄進狀在之

一所　香坂　江州

一所　平塚村　建武五年九月六日

正平二十年（貞治四年）　將軍家御判

一所　那波郡飯塚郷嘉暦三年七月十七日　先代安堵在之
一所　八木沼一方（暦應二年十一月十五日安養寺殿追善料所）　將軍家御判
一所　八木沼三分一　正平七年二月十五日　將軍家御判
一所　青根郷　貞治二年四月　鎌倉殿（武蔵將軍）基一氏
右當知行之地郷村并散在所々注文如件、
此外不知行所々散在者非當用之文書之間不駄註之焉、
貞治四年乙巳七月五日　了宗（花押）(61)

（註）了宗ナル名、長樂寺住持歴代ノ中ニ見エズ。

閏九月四日　足利幕府、三河守護新田大島義高に令シ、青蓮院領同國村松庄地頭（上杉憲顕）代ノ同庄年貢ヲ押領スルヲ停メ、寺家ニ返濟セシム。尋デ明年五月廿四日、再度之ヲ促ス。更ニ、十二月十四日、三度之ヲ促ス。

〔青蓮院文書〕六、二七、三八、
（収録「参河國村松庄之事　貞治年中」）

青蓮院雜掌申參河國村松庄年貢事、重訴狀如此、先度被仰處、無音云々、太無謂、任御下知狀、不日可糺返之由、相觸上杉民部大輔（憲顕）入道代、可被申左右之狀、依仰執達如件、

貞治四年潤九月四日　左兵衛佐（吉良満貞）（花押）
新田左衛門佐（義高）殿

〔猪熊信男氏所藏文書〕（山越）六、二七、三〇三、

青蓮院雜掌申參河國村松庄□□（年貢）事、重訴狀如此、兩度被仰之處、不事行之條、太不可然、御下知違背之條、無所于遁歟、不日可糺返由、相觸地頭代、可被申左右之狀、依仰執達如件、

貞治五年五月廿四日　左兵衛佐（吉良満貞）（花押）
新田左衛門佐（義高）殿

〔碓井小三郎氏所藏文書〕（山越）六、二七、三〇三、

參河國村松庄年貢事、重訴狀如此、度々被仰之處、無音之條、太不可然、任御下知狀、不日可究濟之由、可相觸地頭代、若又不承引者、載起請之詞、可被注申之狀、依仰執達如件、

貞治五年十二月十四日　左兵衛佐（花押）
新田左衛門佐殿

正平二十二年（貞治六年）丁未（二〇二七）

正平二十年（貞治四年）